

基本計画書

基本計画										
事項		記入欄						備考		
計画の区分		大学の設置								
設置者		フクヤマシ 福山市								
大学の名称		フクヤマシリツダイガク 福山市立大学 (Fukuyama City University)								
大学本部の位置		広島県福山市港町二丁目19番1号								
大学の目的		持続可能な地域社会の発展に寄与する人材を育成し、社会的課題の解決に向けて、地域社会と連携した実践的で学際的な学術研究を推進するとともに、地域に開かれた教育研究拠点として、地域の文化の向上に貢献し、国際化時代に相応しい地域社会の実現に寄与することを目的とする。								
新設学部等の目的		教育学部においては、幅広い教養と豊かな人間性を備え、地域の未来を担う子どもの乳児期から児童期までの発達・成長を総合的に捉え、一人ひとりの子どもを尊重した指導・支援ができる実践的指導力をもった教育者・保育者を育成する。 都市経営学部においては、環境についての幅広い知識と素養とともに、都市の計画やデザイン、都市の経済や経営、都市における共生や開発についての複合的な知識と素養を備え、持続可能な都市社会の構築に向けた企業の活性化や地域社会の再生に創造的に寄与していける人材を育成する。								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地		
	教育学部 [Faculty of Education] 児童教育学科 [Department of Childhood Education]	4年	100人	年次人 —	400人	学士 (教育学)	平成23年4月 第1年次	広島県福山市港町二丁目19番1号		
	都市経営学部 [Faculty of Urban Management] 都市経営学科 [Department of Urban Management]	4年	150人	—	600人	学士 (都市経営学)	平成23年4月 第1年次			
	計		250	—	1000					
同一設置者内における変更状況（定員の移行、名称の変更等）		平成23年4月 福山市立女子短期大学 生活学科及び保育科の学生募集停止（△210）（平成22年4月届出済み）								
教育課程	新設学部等の名称		開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
			講義	演習	実習	計				
	教育学部 児童教育学科		136科目	58科目	23科目	217科目	124単位			
都市経営学部 都市経営学科		94科目	41科目	8科目	143科目	124単位				
教員組織の概要	学部等の名称			専任教員等					兼任教員	
				教授	准教授	講師	助教	計	助手	
	新設分	教育学部 児童教育学科		16人 (14)	7人 (7)	4人 (4)	—人 (—)	27人 (25)	—人 (—)	60人 (33)
		都市経営学部 都市経営学科		13人 (13)	5人 (5)	7人 (6)	—人 (—)	25人 (24)	—人 (—)	46人 (21)
		計		29人 (27)	12人 (12)	11人 (10)	—人 (—)	52人 (49)	—人 (—)	84人 (36)
	既設分	該当なし		— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)
				— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)
				— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)
		計		— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)
	合計			29人 (27)	12人 (12)	11人 (10)	—人 (—)	52人 (49)	—人 (—)	84人 (36)

教員以外の職員の概要	職 種		専 任		兼 任		計				
	事 務 職 員		16人 (16)		4人 (3)		20人 (19)				
	技 術 職 員		一人 (一)		1人 (1)		1人 (1)				
	図 書 館 専 門 職 員		2人 (2)		4人 (4)		6人 (6)				
	そ の 他 の 職 員		一人 (一)		1人 (1)		1人 (1)				
	計		18人 (18)		10人 (9)		28人 (27)				
校 地 等	区 分		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用		計				
	校 舎 敷 地		10,753.22㎡	0㎡	0㎡		10,753.22㎡				
	運 動 場 用 地		6,523.00㎡	0㎡	0㎡		6,523.00㎡				
	小 計		17,276.22㎡	0㎡	0㎡		17,276.22㎡				
	そ の 他		9,406.27㎡	0㎡	0㎡		9,406.27㎡				
	合 計		26,682.49㎡	0㎡	0㎡		26,682.49㎡				
校 舎			専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用		計				
			17,063.46㎡ (17,063.46㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)		17,063.46㎡ (17,063.46㎡)				
教室等		講義室	演習室	実験実習室		情報処理学習施設		語学学習施設		大学全体	
		15室	24室	21室		3室 (補助職員 一人)		0室 (補助職員 一人)			
専 任 教 員 研 究 室			新設学部等の名称			室 数					
			教育学部 児童教育学科			27 室					
			都市経営学部 都市経営学科			25 室					
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称		図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種		電子ジャーナル 〔うち外国書〕 点	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	[注] 電子ジャーナルは、大学全体で1パッケージで、4,185種類の雑誌を網羅している。	
	教育学部 児童教育学科		35,000 [5,000] (9,000 [3,000])	147 [34] (103 [16])		1 [1] (1 [1])	130 (30)	62 (62)	0 (0)		
	都市経営学部 都市経営学科		70,000 [10,000] (8,000 [2,000])	225 [80] (140 [45])		1 [1] (1 [1])	60 (15)	146 (146)	0 (0)		
	計		105,000 [15,000] (17,000 [5,000])	372 [114] (243 [61])		[注] 1 [1] (1 [1])	190 (45)	208 (208)	0 (0)		
図書館		面積		閲覧座席数			収 納 可 能 冊 数			大学全体	
		1,225.35㎡		193席			186,000冊				
体育館		面積		体育館以外のスポーツ施設の概要							
		1,272.70㎡		テニスコート2面			該当なし				
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経 費 の 見 積 り	区 分		開設前年度	第 1 年次	第 2 年次	第 3 年次	第 4 年次	第 5 年次	第 6 年次	図書費には電子ジャーナルデータベース整備費を含む (運用コスト含む)
		教員1人当り研究費等			700千円	700千円	700千円	700千円	－ 千円	－ 千円	
		共同研究費等			－ 千円	－ 千円	－ 千円	－ 千円	－ 千円	－ 千円	
		図書購入費		99,500千円	100,000千円	12,000千円	12,000千円	12,000千円	－ 千円	－ 千円	
		設備購入費		453,000千円	－ 千円	－ 千円	－ 千円	－ 千円	－ 千円	－ 千円	
	学生1人当り 納付金	第 1 年次		第 2 年次	第 3 年次	第 4 年次	第 5 年次	第 6 年次			①市内の者 ②市外の者
		①790千円 ②959千円		536千円	536千円	536千円	－ 千円	－ 千円			
学生納付金以外の維持方法の概要				市からの運営費負担金収入，寄付金収入，手数料収入 等							

既設大学等の状況	大 学 の 名 称	福山市立女子短期大学							※平成23年度より学生募集停止（生活学科，保育科）
	学 部 等 の 名 称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	
		年	人	年次人	人		倍		
	生活学科	2	160	—	320	短期大学士（生活学）	0.94	昭和49年	広島県福山市北本庄四丁目5番2号
	保育科	2	50	—	100	短期大学士（保育学）	1.07	昭和49年	
附属施設の概要		名 称：附属幼稚園 目 的：幼児教育 所 在 地：福山市北本庄二丁目17番13号 収容定員：（5歳児）35人，2年保育（4歳児）35人，3年保育（3歳児）20人 設置年月：昭和49年4月 規 模 等：土地3,079.00㎡，建物671.56㎡							

福山市 設置認可等にかかわる組織の移行表

平成22年度

入学定員

平成23年度

入学定員

変更の事由

福山市立女子短期大学	
生活学科	160
保育科	50



<u>福山市立大学</u>		大学新設
<u>教育学部</u>	<u>100</u>	
<u>都市経営学部</u>	<u>150</u>	
福山市立女子短期大学		
生活学科	<u>0</u>	平成23年度より学生 募集停止
保育科	<u>0</u>	

様式第2号（その2の1）

教育課程等の概要														
(教育学部 児童教育学科)			○数字は各学期（クォーター）をさす											
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員の配置					
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
共通教育科目	人間と文化	哲学	1・2・3-②	2		○								兼1 集中
		教育学	1・2-③	2		○			1					
		心理学	1・2-①	2		○			1					
		社会思想史	1・2・3・4-①	2		○								兼1
		家族とジェンダー	1・2・3・4-③	2		○			1					
		美術史	1・2・3・4-④	2		○			1					
		瀬戸内の歴史と文化	1・2・3・4-②	2		○								兼1
		小計（7科目）		0	14	0	7	0	4	0	0	0	0	兼3
	社会と経済	法学概論	1・2-②	2		○								兼1
		日本国憲法	1・2・3-②	2		○								兼1
		行政法	1・2・3-②	2		○								兼1 集中
		現代の経済	1・2-①	2		○								兼1
		現代の経営	1・2-②	2		○								兼1
		会計学概論	1・2-④	2		○								兼1
		都市・社会調査法	1・2・3-④	2		○								兼1 ※演習
		国際関係史	1・2・3・4-③	2		○								兼1
		平和学	1・2・3・4-③	2		○								兼1
		メディア論	1・2・3・4-①	2		○								兼1
		小計（10科目）		2	18	0	10	0	0	0	0	0	0	兼10
	人間と自然	数理の世界	1・2・3-④	2		○								兼1
		統計の世界	1・2・3-②	2										兼1
		生命科学	1・2・3・4-②	2		○								兼1
		地球の進化	1・2・3・4-③	2		○								兼1
		科学史・科学哲学	1・2・3・4-④	2		○								兼2 オムニバース
		近代哲学と技術	1・2・3・4-④	2		○								兼1 集中
		フィールド情報学	1・2・3・4-③	2		○								兼1
		小計（7科目）		0	14	0	7	0	0	0	0	0	0	兼6
	環境と生活	環境と物理	1・2・3-①	2		○								兼1
		化学と環境	1・2・3-③	2		○								兼1
		生物生態学	1・2・3・4-④	2		○								兼1 集中
		自然誌概論	1・2-①	2		○								兼1
		自然誌実習	1・2・3-④	1				○						兼1
		森林資源学	1・2・3・4-①	2		○								兼1
		環境資源論	1・2・3・4-④	2		○								兼1
		環境科学実験	1・2-③	1				○	1					兼2 オムニバース
		地域学（福山学）	1・2・3-②	2		○								兼3 オムニバース
		小計（9科目）		0	16	0	7	0	2	1	0	0	0	兼10
	合計	開講 33科目	—	2	62	0	31	0	4	1	0	0	0	兼25
スキル科目	外国語	英語	総合英語Ⅰ	1-①	1		○							兼2
			総合英語Ⅱ	1-②	1		○							兼2
			総合英語Ⅲ	1-③	1		○							兼2
			総合英語Ⅳ	1-④	1		○							兼2
			英語コミュニケーションA	2-③・④	1		○							兼1
			英語コミュニケーションB	2-③・④	1		○							兼2
			ビジネス英語Ⅰ	2-①～②	1		○							兼1
			ビジネス英語Ⅱ	3・4-①～②	1		○							兼1
			ビジネス英語Ⅲ	3・4-③～④	1		○							兼1
			上級英語Ⅰ	3・4-①～②	1		○							兼4
			上級英語Ⅱ	3・4-③～④	1		○							兼4
			小計（11科目）		6	5	0	0	11	0	0	0	0	兼6

科目区分				授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員の配置							
						必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
共通教育科目	スキル科目	外国語	中国語	入門中国語Ⅰ	1-①～②		1			○			1				兼1		
				入門中国語Ⅱ	1-③～④		1			○			1				兼1		
				初級中国語Ⅰ	2・3・4-①		1			○			1						
				初級中国語Ⅱ	2・3・4-②		1			○			1						
				中級中国語Ⅰ	2・3・4-③		1			○			1						
				中級中国語Ⅱ	2・3・4-④		1			○			1						
				小計（6科目）		0	6	0	0	6	0	0	1	0	0	0	兼1		
		ポルトガル語・	フランス語	フランス語Ⅰ	1-①～②		1			○			1						
				フランス語Ⅱ	1-③～④		1			○			1						
				ポルトガル語Ⅰ	1-①～②		1			○							兼1		
				ポルトガル語Ⅱ	1-③～④		1			○							兼1		
				小計（4科目）		0	4	0	0	4	0	0	1	0	0	0	兼1		
		タコン・スキル	情報	情報演習Ⅰ	1-①～②	1				○			1					※講義	
				情報演習Ⅱ	1-③～④	1				○			1				兼1	※講義	
				情報応用演習Ⅰ	2・3・4-①～②		1			○							兼1		
				情報応用演習Ⅱ	2・3・4-③～④		1			○							兼1		
				小計（4科目）		2	2	0	0	4	0	0	1	0	0	0	兼1		
	合計				開講 25科目	—	8	17	0	0	25	0	0	3	0	0	0	兼9	
	人間力科目	イアキンデザリ	キャリアデザイン	キャリアデザインA	2-①		2			○					1			兼1	
				キャリアデザインB	3-①		2			○								兼1	
				小計（2科目）		0	4	0	2	0	0	0	0	1	0	0	兼1		
		体育・健康	健康	健康・スポーツⅠ	1-①～②	1					○							兼3	
				健康・スポーツⅡA	1・2・3・4-①・②・③・④		1				○						兼4		
				健康・スポーツⅡB	1・2・3・4-②		1				○		1				兼1	集中	
				健康・スポーツⅡC	1・2・3・4-④		1				○						兼1	集中	
				健康科学	1・2・3-③		2			○							兼1		
				小計（5科目）		1	5	0	1	0	4	0	1	0	0	0	兼6		
		ミ入門ゼ	大学入門ゼミ	大学入門ゼミ	1-①～②	2				○		2	2	4					
				教育入門ゼミ	1-③～④	2				○		5	3	0					
				小計（2科目）	—	4	0	0	0	2	0	7	5	4	0	0	0	0	
	合計				開講 9科目	—	5	9	0	3	2	4	7	6	4	0	0	兼7	
専門教育科目	科学部基礎	人間と教育	基礎	人間と教育	1-①	2				○		2						オムニバス	
				発達と教育	1-②	2				○		2						オムニバス	
				福祉と教育	1-③	2				○		2						オムニバス	
				文化と教育	1-④	2				○		2						オムニバス	
				合計	開講 4科目		8	0	0	4	0	0	8	0	0	0	0	0	0
	基幹科目	発達	子ども論	子ども論	2-①		2			○		1	1						
				発達心理学	2-④		2			○									
				教育心理学	2-①		2			○		1							
		家族	家族の歴史	家族の歴史	2-③		2			○				1					
				家族臨床	2-③		2			○		1							
				地域福祉論	2-③		2			○		1							
				家族援助論	2-③		2			○							兼1		
		障害	障害者の福祉と教育	障害者の福祉と教育	2-④		2			○		1							
				インクルージョンの歴史	2-①		2			○		1							
				障害者教育指導論	2-④		2			○							兼1		
	合計				開講 10科目		0	20	0	10	0	0	6	1	1	0	0	兼2	

科目区分			授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員の配置						
					必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専門教育科目	展開科目	教育学関連科目	初等国語	2-①		2		○				1					兼1
			書写演習	2-③～④		2			○		1						
			初等社会	2-②		2		○									
			算数	2-③		2		○				1					
			初等理科	2-④		2		○				1					
			生活	2-②		2		○									兼1
			初等音楽	2-①～②		2		○			1						
			図画工作	2-③		2		○			1						
			初等家庭	2-④		2		○			1						
			初等体育	2-②		2		○									兼1
			教職論	1-④		2		○			1						
			教育原理	2・3-①		2		○					1				
			教育史	2-②		2		○			1						
			教育制度論	2・3-②		2		○					1				
			教育社会学	3-②		2		○									兼1 集中
			教育課程論A (小)	2-③		2		○			1						
			国語科指導法	3-②		2		○				1					兼1 オムニバス
			社会科指導法	3-①		2		○			1						
			算数科指導法	2-②		2		○									兼1 集中
			理科指導法	2-②		2		○									兼1 集中
			生活科指導法	2-②		2		○									兼1 集中
			音楽科指導法	2-③～④		2		○			1						兼1 オムニバス
			図画工作科指導法	3-②		2		○			1						※演習
			家庭科指導法	2-③		2		○			1						
			体育科指導法	3-①		2		○									兼1
			道徳教育論	2-②		2		○			1						
			特別活動論	2-②		2		○					1				
			教育方法論A (小)	3-②		2		○			1						
			生徒指導論 (進路指導を含む。)	3-①		2		○			1						
			教育相談	3-①		2		○			1						
			教職実践演習 (小・幼)	4-④		2			○		1						兼1
			英語活動論	3-①		2		○									兼1
			科学実験法	3-④		1				○		1					
			心理学実験演習	3-①～②		2				○	1		2				オムニバス
			子どもと法律	3-②		2		○									兼1 集中
			教育統計	1-④		2		○					1				
			小計 (36科目)	—	0	71	0	32	2	2	9	3	4	0	0	兼11	

科目区分			授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員の配置						
					必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専門教育科目	展開科目	保育学関連科目	社会福祉	2-④		2		○			1					兼1	オムニバス
			社会福祉援助技術	3-①		2			○		1						
			児童福祉論	3-①		2		○			1						
			保育原理Ⅰ	1-③		2		○			1						
			保育原理Ⅱ	1-④		2		○			1					兼1	オムニバス
			養護原理	2-④		2		○									
			小児保健Ⅰ	2-①		2		○									
			小児保健Ⅱ	2-③		2		○									
			小児保健実習	2-①		1				○						兼1	オムニバス
			小児栄養Ⅰ	2-③		1			○								
			小児栄養Ⅱ	2-④		1			○								
			精神保健	3-②		2		○									
			保育内容（健康）	1-②		2			○							兼1	オムニバス
			保育内容（人間関係）	2-③		2			○		1		1				
			保育内容（環境）	1-①		2			○								
			保育内容（言葉）	1-④		2			○		1						
			保育内容A（表現）	2-①～③		2			○			1				兼1	オムニバス
			保育内容B（表現）	1-③		2			○		1						
			保育内容C（表現）	1-③		2			○		1						
			乳児保育Ⅰ	1-④		1			○				1				
			乳児保育Ⅱ	2-①		1			○		1					兼1	オムニバス
			障害児保育	3-④		1			○								
			養護内容	3-①		1			○		1						
			音楽表現活動Ⅰ（基礎）	1-①～②		1			○		1					兼4	オムニバス
			音楽表現活動Ⅱ（応用）	1-③～④		1			○		1						
			音楽表現A（ピアノ）	1-③～④		1			○								
			音楽表現B（声楽）	1-③～④		1			○								
			図画工作表現活動Ⅰ（基礎）	1-①～②		1			○		1					兼2	オムニバス
			図画工作表現活動Ⅱ（応用）	1-④		1			○		1						
			運動・身体表現活動Ⅰ（基礎）	1-①～②		1			○			1					
			運動・身体表現活動Ⅱ（応用）	1-③～④		1			○			1					
			保育・教職実践演習（幼）	4-④		2			○		1					兼1	オムニバス
			保育者論	2-③		2		○			1						
			教育課程論B（幼・保）	2-①		2		○			1						
			乳幼児心理学	3-①		2		○					1				
			青年心理学	3-①		2		○					1			兼1	オムニバス
			保育臨床相談	3-②		2		○					1				
			幼児の理解と発達相談	3-④		2		○									
			教育方法論B（幼）	3-②		2		○									
			自然環境の観察法	3-④		1				○						兼2	オムニバス
			保育教材研究	1-②		1			○								
			食育研究	1-③		1			○								
			小計（42科目）	—	0	66	0	15	25	2	8	1	3	0	0	兼23	

科目区分			授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員の配置						
					必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専門教育科目	展開科目	特別支援教育関連科目	特別支援教育総論	1-④		2		○			1						兼1 オムニバス 兼1 集中 兼1 集中 兼1 オムニバス 兼1 集中 兼1 集中 オムニバス
			知的障害者の心理・生理・病理	2-②		2		○			1	1					
			肢体不自由者の心理	3-②		2		○									
			肢体不自由者の生理・病理	3-②		2		○									
			病弱者の心理	3-②		1		○									
			病弱者の生理・病理	3-①		2		○									
			障害者発達診断法	3-④		2		○				2					
			知的障害者指導論	1-④		2		○				1					
			肢体不自由者指導論	4-①		2		○									
			病弱者指導論	4-②		2		○									
			知的障害者教育課程論	3-②		2		○									
			障害者の心理・生理・病理	1-④		2		○			1	2					
			言語障害指導論	3-④		2		○				1					
			重複障害教育総論	4-①		2		○			1						
			発達障害教育総論	1-③		2		○				1					
			小計（15科目）	—	0	29	0	15	0	0	2	2	0	0	0		兼7
			合計			開講 93科目		0	166	0	62	27	4	15	6	4	0
発展科目	教育学・保育学	教育学・保育学	教育史特論	3-①		2		○			1						
			教育方法特論	3-①		2		○			1						
			教育制度特論	3-②		2		○					1				
			保育実践理論研究特論	3-④		2		○			1						
			保育制度特論	3-①		2		○			1						
			保育国際比較特論	3-④		2		○				1					
			保育表現研究特論	3-②		2		○				1					
			産育文化史特論	3-④		2		○					1				
	床心理学・発達臨	床心理学・発達臨	発達心理学特論	3-②		2		○			1						
			生理心理学特論	3-④		2		○			1						
			青年心理学特論	3-④		2		○					1				
			教育心理学特論	3-①		2		○			1						
			臨床心理学特論	3-②		2		○			1						
			幼児心理学特論	3-④		2		○					1				
	育特・別児支援福祉	育特・別児支援福祉	障害原理特論	3-④		2		○			1						
			特別支援教育特論	3-②		2		○				1					
			児童福祉特論	3-④		2		○			1						
			言語障害特論	3-④		2		○				1					
			社会福祉特論	3-②		2		○			1						
	教育・保育内容研究	教育・保育内容研究	国語科教育特論	3-④		2		○			1						兼1 ※演習
			社会科教育特論	3-④		2		○			1						
			算数科教育特論	3-④		2		○				1					
			理科教育特論	3-①～②		2		○									
			音楽教育特論	3-①		2		○			1						
			絵画造形表現特論	3-②		2		○			1						
			家庭科教育・生活保育特論	3-①		2		○			1						
	合計			開講 26科目		0	52	0	26	0	0	16	5	4	0	0	兼1

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員の配置							
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門教育科目	実習科目	小学校教育実習事前事後指導	3-③		1				○	1					兼1	オムニバス
		小学校教育実習	3-③		4				○	1					兼1	
		幼稚園教育実習事前事後指導A	2-②～3-②		1				○	1					兼1	
		幼稚園教育実習事前事後指導B	3-②		1				○	1					兼1	
		幼稚園教育実習Ⅰ	2-②		1				○	1					兼1	
		幼稚園教育実習ⅡA	3-②		3				○	1					兼1	
		幼稚園教育実習ⅡB	3-②		2				○	1					兼1	
		保育実習事前事後指導	2-②～3-③		1				○	2					兼1	
		保育実習Ⅰ（保育所）	2-②		2				○			1			兼1	
		保育実習Ⅰ（施設）	3-③		2				○	1					兼1	
		保育実習Ⅱ	2-②		2				○			1			兼1	
		保育実習Ⅲ	3-③		2				○	1					兼1	
		特別支援学校教育実習	4-③		3				○		1				兼1	
	合計	開講 13科目		0	25	0	0	0	13	4	1	1	0	0	兼4	
	演習	教育基礎ゼミ	2-①～④	3					○		16	7	4			
		教育専門ゼミ	3-①～④	3					○		16	7	4			
		教育研究ゼミ	4-①～④	3					○		16	7	4			
		小計（3科目）		9	0	0	0	3	0	16	7	4	0	0	兼0	
	卒業研究	卒業研究	4-通	4					○		16	7	4			
		小計（1科目）		4	0	0	0	1	0	16	7	4	0	0	0	
	合計	開講 4科目	—	13	0	0	0	4	0	16	7	4	0	0	0	
総計	開講 217科目	—	36	351	0	136	58	23	16	7	4	0	0	兼77		
学位又は称号	学士（教育学）		学位又は学科の分野			教育学・保育学関係										
卒業要件及び履修方法									授業期間等							
・教養科目から19単位以上（必修2単位を含む）（人間と文化，社会と経済，人間と自然，環境と生活から各4単位以上） ・スキル科目から10単位以上（必修8単位を含む）（英語から6単位以上，その他の外国語から2単位以上，コンピュータ・スキルから2単位以上） ・人間力科目から7単位以上（必修5単位を含む） ・学部基礎科目から8単位（必修8単位を含む） ・基幹科目から教育コースは6単位以上，保育コースは8単位以上（発達，家族，障害から各2単位以上必修） ・展開科目から46単位以上 ・発展科目から教育コースは10単位以上，保育コースは6単位以上（教育学・保育学，心理学・発達臨床，特別支援教育・児童福祉，教育・保育内容研究の各区分のいずれかから教育コースは6単位以上，保育コースは4単位以上必修） ・実習科目から教育コースは5単位以上，保育コースは7単位以上（実習科目の履修に替えて，展開科目から同等数の単位の履修をもって充てることができる。ただし，この場合は，教員免許状及び保育士資格を取得することはできない。） ・演習9単位 ・卒業研究4単位 計124単位以上を修得する。 （履修科目の登録の上限：42単位（年間）ただし，別に定める「除外科目」は上限設定の42単位の算出には含めない。）									1学年の学期区分			4学期				
									1学期の授業期間			8週				
									1時限の授業時間			90分				

様式第2号（その2の1）

教育課程等の概要																		
(都市経営学部 都市経営学科)				○数字は各学期（クォーター）をさす														
科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員の配置					備考			
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
共通教育科目	教養科目	人間と文化	哲学	1・2・3-②		2		○			1						兼1	集中
			教育学	1・2-③		2		○								兼1		
			心理学	1・2-①		2		○								兼1		
			社会思想史	1・2・3・4-①		2		○										
			家族とジェンダー	1・2・3・4-③		2		○								兼1		
			美術史	1・2・3・4-④		2		○								兼1		
			瀬戸内の歴史と文化	1・2・3・4-②		2		○					1					
		小計（7科目）			0	14	0	7	0	0	1	0	1	0	0	兼5		
	社会と経済	法学概論	1・2-②		2		○				1						兼1	集中
		日本国憲法	1・2・3-②		2		○									兼1		
		行政法	1・2・3-②		2		○									兼1		
		現代の経済	1・2-①		2		○					1						
		現代の経営	1・2-②		2		○						1					
		会計学概論	1・2-④		2		○									兼1		
		都市・社会調査法	1・2・3-④		2		○						1			※演習		
		国際関係史	1・2・3・4-③		2		○			1								
		平和学	1・2・3・4-③		2		○									兼1		
		メディア論	1・2・3・4-①		2		○			1								
		小計（10科目）			0	20	0	10	0	0		2	1	2	0	0	兼5	
	人間と自然	数理の世界	1・2・3-④		2		○			1							オムニバス 集中	
		統計の世界	1・2・3-②		2		○									兼1		
		生命科学	1・2・3・4-②		2		○									兼1		
		地球の進化	1・2・3・4-③		2		○			1								
		科学史・科学哲学	1・2・3・4-④		2		○			2								
		近代哲学と技術	1・2・3・4-④		2		○									兼1		
		フィールド情報学	1・2・3・4-③		2		○			1								
		小計（7科目）			0	14	0	7	0	0	3	0	0	0	0	兼3		
	環境と生活	環境と物理	1・2・3-①		2		○			1							兼1 集中	
		化学と環境	1・2・3-③		2		○			1								
		生物生態学	1・2・3・4-④		2		○											
		自然誌概論	1・2-①		2		○			1								
		自然誌実習	1・2・3-④		1				○			1						
		森林資源学	1・2・3・4-①		2		○						1			兼1		
		環境資源論	1・2・3・4-④		2		○					1						
		環境科学実験	1・2-③		1				○	1		1				兼1		
		地域学（福山学）	1・2・3-②		2		○			2		1				オムニバス オムニバス		
		小計（9科目）			0	16	0	7	0	2	5	0	3	0	0	兼3		
		合計		開講 33科目	—	0	64	0	31	0	2	8	1	5	0	0		兼16
	スキル科目	外国語	英語	総合英語Ⅰ	1-①	1			○		1						兼1	
				総合英語Ⅱ	1-②	1			○		1						兼1	
				総合英語Ⅲ	1-③	1			○		1						兼1	
				総合英語Ⅳ	1-④	1			○		1						兼1	
				英語コミュニケーションA	2-①・②	1			○				1					
				英語コミュニケーションB	2-①・②	1			○								兼2	
				ビジネス英語Ⅰ	2-①～②		1		○		1							
				ビジネス英語Ⅱ	3・4-①～②		1		○		1							
				ビジネス英語Ⅲ	3・4-③～④		1		○		1							
				上級英語Ⅰ	3・4-①～②		1		○				1				兼3	
				上級英語Ⅱ	3・4-③～④		1		○				1				兼3	
				小計（11科目）			6	5	0	0	11	0	1	0	1	0	0	兼4

科目区分				授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員の配置					備考			
						必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
共通教育科目	スキル科目	外国語	中国語	入門中国語Ⅰ	1-①・②	1				○								兼3		
				入門中国語Ⅱ	1-③・④	1				○								兼3		
				初級中国語Ⅰ	2・3・4-①		1			○								兼1		
				初級中国語Ⅱ	2・3・4-②		1			○								兼1		
				中級中国語Ⅰ	2・3・4-③		1			○								兼1		
				中級中国語Ⅱ	2・3・4-④		1			○								兼1		
				小計（6科目）		2	4	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	兼3		
		ポルトガル語・	フランス語	フランス語Ⅰ	2・3・4-①～②		1			○								兼1		
				フランス語Ⅱ	2・3・4-③～④		1			○								兼1		
				ポルトガル語Ⅰ	2・3・4-①～②		1			○								兼1		
				ポルトガル語Ⅱ	2・3・4-③～④		1			○								兼1		
				小計（4科目）		0	4	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	兼2		
		タコン・スピー	コンピュー	情報演習Ⅰ	1-①～②	1				○		1							※講義	
				情報演習Ⅱ	1-③～④	1				○		1							兼1	※講義
				情報応用演習Ⅰ	2・3・4-①～②		1			○		1								
				情報応用演習Ⅱ	2・3・4-③～④		1			○		1								
				小計（4科目）		2	2	0	0	4	0	1	0	0	0	0	0	兼1		
	合計			開講 25科目	—	10	15	0	0	25	0	2	0	1	0	0	0	兼10		
	人間力科目	イアキンデヤザリ	キャリアデザインA	2-①		2			○								兼1			
			キャリアデザインB	3-①		2			○		1									
			小計（2科目）		0	4	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	兼1			
		体育・健康	健康・スポーツⅠ	1-③～④	1					○			1					兼2		
			健康・スポーツⅡA	1・2・3・4-①・②・③・④		1				○			1					兼3		
			健康・スポーツⅡB	1・2・3・4-②		1				○			1					兼1	集中	
			健康・スポーツⅡC	1・2・3・4-④		1				○			1						集中	
			健康科学	1・2・3-③		2			○			1								
			小計（5科目）		1	5	0	1	0	4	0	1	0	0	0	0	兼6			
	ゼ入ミ門	大学入門ゼミ	1-①～②	2				○		11	3	5								
		小計（1科目）		2	0	0	0	1	0	11	3	5	0	0	0					
	合計	開講 8科目	—	3	9	0	3	1	4	11	3	5	0	0	0	兼7				

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員の配置					備考	
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専門教育科目	学部基礎科目	都市経営入門	1-①	2			○			1						兼1
		都市デザイン入門	1-②	2			○			1						
		都市経営と社会学	1-③	2			○			1						
		経済学入門	1-④	2			○									
		地球環境入門	2-①	2			○			1						
		都市経営ゼミ	2-③～④	2				○		8	5	5				
		合計	開講 6科目	—	12	0	0	5	1	0	9	5	5	0	0	
	基幹科目	都市の歴史	1-③	2			○			1						兼1 兼1
		都市基盤施設論	2-④	2			○				1					
		都市計画論	2-②	2			○				1					
		都市生活学	2-④	2			○			1						
		ミクロ経済学	1-③	2			○									
		経営学原理	1-④	2			○			1						
		マクロ経済学	2-①	2			○									
		公共政策論	2-②	2			○			1						
地域経済論		2-③	2			○			1							
都市社会学		1-④	2			○			1							
多文化共生論		2-①	2			○					1					
国際関係論	2-③	2			○			1								
合計	開講 12科目	—	24	0	0	12	0	0	7	2	1	0	0	兼2		
展開科目	計画・デザイン	土地利用計画	2・3-③		2		○					1				※演習 オムニバス
		都市交通政策	2・3-③		2		○					1				
		都市水環境システム	3-①		2		○			1						
		建築の歴史	2・3-①		2		○			1						
		建築計画	2・3-④		2		○			1						
		都市景観論	3-③		2		○				1					
		建築都市計画法規	3・4-①		2		○				1					
		生活環境論	2・3-②		2		○					1				
		住宅政策論	3・4-②		2		○				1					
		生活空間学	3-④		2		○			1						
		環境人間工学	3・4-④		2		○				1					
		アーバンデザイン演習	3-③		2			○		1	1					
		まちづくり計画実践演習	3-②		2			○			2					
		まちづくり協働実践演習	3-①		2			○		1		1				
	小計 (14科目)		0	28	0	11	3	0	3	4	1	0	0	兼0		
	経済・経営	行政学	2・3-②		2		○									兼1
		地方財政論	2-④		2		○			1						
		金融システム論	3・4-②		2		○									兼1
		経営管理論	2-①		2		○				1					
マーケティング論		3-①		2		○			1							
起業論		3-①		2		○				1						
経営分析		3・4-③		2		○									兼1	
生活構造論		2・3-②		2		○									集中	
福祉開発論		3・4-④		2		○									集中	
異文化経営論		3・4-④		2		○									集中	
環境経営学		2-②		2		○					1					
環境保全論		3-④		2		○					1					
地域産業論		2・3-③		2		○			1							
産業創生実践演習		3-②		2			○		2		1					
小計 (14科目)		—	0	28	0	13	1	0	3	0	2	0	0	兼6		

科目区分			授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員の配置					備考					
					必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手						
専門教育科目	展開科目	共生・開発	市民自治論	2・3-④		2		○			1						兼1	集中			
			都市情報論	3・4-②		2		○													
			異文化コミュニケーション論	3-③		2		○					1								
			環境地理学	3・4-①		2		○					1								
			地域文化史	3・4-①		2		○					1								
			地域産業史	3・4-④		2		○					1								
			国際協力論	2-②		2		○			1										
			国際開発論	2-④		2		○			1										
			国際援助政策	3-④		2		○			1										
			アメリカ文化論	3・4-④		2		○			1										
			中国社会文化論	3・4-②		2		○								兼1					
			インド社会論	3・4-①		2		○			1										
			ラテンアメリカ社会論	3・4-②		2		○											兼1		
			ヨーロッパ社会論	3・4-③		2		○			1					集中					
			都市社会実践演習	3-③		2			○		1		1							オムニバス	
			小計（15科目）			—	0	30	0	14	1		5		3				0		0
			合計			開講 43科目	—	0	86	0	38	5	0	11	4	6			0		0
実習科目	企業・行政実習	3-②		2					○		1										
	環境開発実習	3-②		2					○	1		1									
	小計（2科目）	—	0	4	0				2	1	1	1	0	0		0					
専門演習	専門演習Ⅰ	3-①～②	2					○		12	4	6									
	専門演習Ⅱ	3-③～④	2					○		12	4	6									
	小計（2科目）	—	4	0	0			2		12	4	6	0	0		0					
卒業研究	卒業研究	4-通	6					○		12	4	6									
	小計（1科目）	—	6	0	0			1		12	4	6	0	0		0					
合計			開講 5科目	—	10	4	0	0	3	2	12	4	6	0	0	兼0					
自由科目	建築士科目	設計製図Ⅰ	2・3-②			1		○									兼1				
		設計製図Ⅱ	2・3-④			1		○									兼1				
		設計製図Ⅲ	3・4-①			1		○									兼1				
		設計製図Ⅳ	3・4-③			1		○									兼1				
		CAD演習Ⅰ	2・3-③			1		○									兼1				
		CAD演習Ⅱ	3・4-②			1		○									兼1				
		建築一般構造	2・3-③～④		2		○										兼1				
		建築構造力学	3・4-④		2		○										兼1				
		建築材料	4-①		2		○										兼1				
		建築設備	3・4-①～②		2		○										兼1				
		建築施工	3・4-③～④		2		○										兼1				
		小計（11科目）				0	0	16	5	6	0	0	0	0	0	0	0	兼11			
		合計			開講 11科目	—	0	0	16	5	6	0	0	0	0	0	0	兼11			
総計			開講 143科目	—	59	178	16	94	41	8	13	5	7	0	0	兼55					
学位又は称号			学士（都市経営学）			学位又は学科の分野			工学関係，経済学関係，社会学関係												
卒業要件及び履修方法										授業期間等											
・教養科目から18単位以上（人間と文化，社会と経済，人間と自然から各2単位以上，環境と生活から5単位以上） ・スキル科目から12単位以上（必修10単位を含む） ・人間力科目から6単位以上（必修3単位を含む） ・学部基礎科目から12単位（必修12単位） ・基幹科目から24単位（必修24単位） ・展開科目から34単位以上（3領域のいずれかから18単位以上，残りの2領域のそれぞれから6単位以上） ・専門演習4単位 ・卒業研究6単位 ・自由選択科目として，共通教育科目，専門教育科目，教育学部専門教育科目から8単位										1学年の学期区分				4学期							
										1学期の授業期間				8週							
										1時限の授業時間				90分							

授 業 科 目 の 概 要			
（教育学部児童教育学科）			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通 教育 科目	人間 と 文化	哲学的な思考は現状への批判を含む。しかし、その批判の基準や方法はかならずしも定かではない。時代や文化によっても異なる。また批判は時として現状擁護の議論にも転換しやすい。本講義ではそうした問題性を、古代ギリシアにおける哲学の発生、中世神学における哲学の役割、近代初頭における「人間の発見」、啓蒙主義における現状批判と宗教批判の結びつき、日本の近代における哲学と人生論の結合の意味、天皇制と哲学のあり方などに絞って考えて行く。「経済」「政治」「理性」「国家」など通常何気なく使用している概念の中に、非常に息の長い知的ダイナミズムが宿っていることも考えていきたい。	
	教育学	より善き次世代の育成という人類にとっての普遍的課題に対して、人々はいかなる「知恵」を集めてきたかについて講義する。そうした教育的営為は普遍的であるとともに、地域性、自然性、文化性にともなっており、各地域（国家）で個性的に展開したことを、欧米社会と日本社会の比較史的視点から説明する。とりわけ、日本の伝統社会から近代社会への変化にともなう教育的営為の歩みについて説明する。学生が自らの学校（教育）体験を相対化し、広い視点から教育問題を認識できる力の形成を目標とする。	
	心理学	初学者を対象とした心理学入門の授業である。人の心理機能の生物学的基礎と社会的基礎について、感覚知覚・学習・記憶・言語・思考・発達・性格・ストレス・病むところ・社会と個人・脳と心・こころの測定などをテーマに概説する。適時、現代心理学の成立史（主に諸学派）に言及し、人間の心性についての認識が時代の思潮やテクノロジーの影響を受けていることを論じる。特に、映像教材を活用して心理学の実証的アプローチについての理解を深める。	
	社会思想史	人間が自分の欲望を追求しだす（自己実現の追求といってもいい）と、時によっては互いの間に争いがおこる。人間は一人だけでは生存できないから、その争いを調整して世の中を成り立たせなければならない。このやり方を人類は模索してきた。その過程を近代社会思想史の軌跡から理解し、社会のなかでの自分の位置を客観的に把握し、社会生活を営むに必要な洞察力を身に付けることが目標である。	
	家族とジェンダー	かつて、地域共同体と一体となって生産と消費の生活全般を担っていた家族は、近代化の過程の中でその機能を外部化させていった。近代化のなかで一方では専業主婦化がおこり、一方では保育士、栄養士、看護師などの「ピンクカラー」といわれる女性職が登場する。さらに、ポストモダンのなかでは、女性のさらなる労働力化、「ピンクカラー」の脱ジェンダー化（男性加入）、ワーク・ライフ・バランス視点に立つ男女の労働観、生活観の変容、その中で起こっているセクハラ問題、DV問題など、社会的・歴史的視点で複数のパラダイムとして家族とジェンダーを概説する。そのうえで、現在を生きる我々にとって職業人・生活者とは何か、子どもを産み育てるとはどういうことか、講義と参加型学習を通して考える。	
	美術史	美術作品は自分の目で見て、自分の心で感じる事が重要である。しかし、少し考えながら見ることもまた大切である。どのようなテーマが描かれているか。作家はどうしてこのテーマを選んだか。なぜこのような描き方をしているか。訴えたい本当のことは何か。そういった見方をする事で、きっとこれまでと違った作品の見え方がするはずである。本授業では、初期ルネサンスから現代までのできるだけ様々な画家の作品を紹介する。そこから歴史的な時代背景や、美術史としての特徴的な様式や動向を理解し、美術作品に対して多様な見方ができることを目標とする。	
	瀬戸内の歴史と文化	日常私たちが何気なく暮らしている地域には、当然のように悠久の歴史があり、そこで育まれた文化がある。つまり、地域にはそれぞれに独特な歴史文化がある。本講義では、瀬戸内海地域を舞台に繰り広げられた歴史や文化の形成や展開について、具体的なテーマや史資料を挙げながら講義を行う。前近代における地域文化の特質について理解を深めるとともに、現在の地域社会に内包している諸問題や、将来の地域社会における課題について考える力を養うことを目標とする。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会と経済		法学概論	法学（法律学）は、社会における「問題」（トラブル）の解決をはかる学問である。時代ごとに解決すべき「問題」が動き、それに伴ってその解決手段の一つである「法」も発展してきた。「問題」の解決のあり様には、いろいろなものがあり、唯一の正しい答えがあるとは限らない。受講生一人一人が法的主体として、今後、社会における様々な問題について自分なりに考え判断することができるようになるよう、リーガル・マインド（legal mind）を身につけてもらうことが本講義のねらいである。	
			日本国憲法	この科目は、日本国憲法の全体像とその今日的意義について理解することを目的とする。授業は、講義形式を中心に初学者向けのテキストに沿ってすすめる。授業においては、憲法制定に至る過程と基本原理（国民主権、基本的人権の保障、平和主義）について説明したのち、人権（身体的自由、精神的自由、経済的自由、参政権）と統治機構（立法、行政、司法、地方自治）をめぐる諸規定の解釈を学説と判例の紹介を交えながら、わかりやすく解説する。また、「地方主権」や「国際貢献」など最近の議論についてもとりあげる。	
			行政法	行政に関する法の仕組みに関し、行政法の基本原則、行政作用及び行政救済の各分野にわたり講義を行う。行政法の基本原則の分野では、法治主義を中心に講義を行い、行政法の基本的な考え方や行政法の基礎知識の習得を図る。行政作用の分野では、行政計画、行政立法、行政行為、行政手続及び行政情報管理を中心に講義を行い、行政活動の特質について理解してもらう。そして、行政救済の分野では、実際の裁判例を素材として国家補償及び行政争訟について講義を行い、国民の権利救済に係る制度の意義及び重要性を認識してもらう。	
			現代の経済	この講義では、経済学の基本的な枠組みにもとづいて日本経済および世界経済で見られる諸現象の意味を理解することを目的とする。講義ではまず、戦後日本経済の動きおよび世界経済の現状を説明する。つづいて、消費や投資といった経済動態の基本要素にはじまり、最近の経済を理解する上で必要な金融や国際取引まで、マクロ経済学の基礎を解説しながら、それらを活用して現実の経済現象をどのように理解できるのかについて考察する。	
			現代の経営	企業経営のサステナビリティを考慮した場合、経営は単純に利益の極大化ではなく、それをとりまく環境、そこに働く人間ないしかかわるすべての利害関係者について理解することが不可欠となる非常に多面的な存在である。本講義では、経営学に初めて触れる学生に、できるだけ平易に解説し、経営学生成と展開の足跡を辿りながら、経営学を構成する「人間」、「組織」、「環境」等の諸概念、あるいは現代経営に直面する諸問題について考え、理解することを目的とする。	
			会計学概論	会計はビジネス社会での共通言語であり、社会人として活躍するために不可欠なコミュニケーションツールである。とくに国際財務報告基準（IFRS）のアドプション（採用）に伴い、会計の重要性は改めて取り立てられるであろう。本講義では、まず複式簿記の基本的な構造を理解した上で、財務会計、管理会計、会計監査、経営分析、そして税務会計など、会計学への興味を引き出すことを目的としている。受講者には、会計学に関する基本的な専門知識の修得と財務分析能力の向上、さらには国際会計基準への理解を深めることを目指してほしい。	
			都市・社会調査法	都市社会を構成する諸活動や都市の環境を扱う研究、業務において、対象とする様々な事象や現象、あるいはその主体である「人」「人々」の属性、意見や意識、行動実態等を客観的に把握しかつ分析する調査は最も基礎的な取り組みである。本科目では調査目的や調査原理、調査方法、分析とその結果の活用に至る一連の調査法についての基礎的な理解を得ること、および初歩的な調査の設計、実施を体験することにより、さらに専門的な調査法の学習やより実践的な応用、活用へのステップとすることを目指す。	講義 20 時間 演習 10 時間
			国際関係史	1989年、東西冷戦の象徴であるベルリンの壁が崩壊し、その45年の幕を閉じた。その後、ソ連邦の解体、東西ドイツの統一、コーカサス・中央アジア地域の独立などにより、世界の様相は一変した。冷戦は、地政学的な競争や核兵器の競争だけでなく、社会経済システムのありようについても多くの示唆を与える。講義では、冷戦の象徴的な事項をとり上げ、それらが過去のものであってもいかに現代につながっているのかを考える。あわせて、かつてソ連邦の一部であり、その後独立を遂げた中央アジアについても触れる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		平和学	本講義では直接的・物理的暴力である国際紛争の歴史的背景、経済的・文化的な原因を分析し、平和のための諸条件を考察する。また、戦争がないという意味での消極的平和はあっても、飢餓などのために人びとが大量に死んでいく社会状況や、武力紛争はなくても自由も平等も人権尊重もない苛酷な抑圧国家、すなわち構造的暴力といわれる社会状況もある。したがって、真の平和のためには直接的暴力も構造的暴力もない社会の構築が最大の課題であり、国連の取り組みや日本国憲法第九条の意義を参考にしながら、真の平和の可能性を探りたい。	
		メディア論	私たちはメディアを通して「現実」の多くを認識している。そのメディアはテレビ、新聞のようなマス・メディアから、インターネットまで多様である。とりわけ、IT（情報技術）は、メディア秩序を大きく変えようとしており、ブログのように個人に表現の可能性を開く一方で、無責任な情報の氾濫、既存メディアへの打撃などの症状をもたらしている。授業ではメディアの歴史的・現代的把握を通じてメディアリテラシーを高め、市民としてメディアをどう利用していくかを身につける。あわせてジャーナリズムの役割という視座も重視する。	
	人間と自然	数理の世界	自然や社会現象を理解する上で役に立つ数理の世界を探索し、数理的思考を用いた課題形成と解決に取り組む事が出来る力を養う。その中で、解析や代数、統計処理の基本と共に、都市のデザインやビジネスモデル、開発構想といった専門科目の学習や日常生活においても役立つ数学の基礎学習を通して、数学リテラシーを養う。公理や定理の体系を厳密に教授する事を目的とするのではなく、実例や応用例をその都度取り上げる事により、図形・デザインのみならず、環境・経済モデルの構築の基礎を成す数理の世界を分かりやすく学習する。	
		統計の世界	情報技術の発展につれて、自然科学のみならず、他の学問領域においても多くのデータが利用可能となると同時に、その活用法がさまざまな現象を理解する一つの手立てとして重要性を増している。この講義では、こうした観点から、統計学の基礎を解説する。その際、統計学の理論を学ぶことはもちろんであるが、データを実際に処理するための分析手法をマスターできるように、コンピュータを利用した実習も重視する。どのような場合にどんな集計法や検定法を利用するか、体験的に学習する。	
		生命科学	現在、遺伝子組換え作物の普及やiPS細胞による再生医療の展望、さらには生物多様性の保護など、生命科学に関する話題には事欠かない。そこで、本講義では、まず、生命の設計図である遺伝子DNAとその総体であるゲノムのはたらきを通して、細胞の仕組みを学ぶ。また、単細胞生物である微生物のいろいろな役割を俯瞰するとともに、多細胞生物の成り立ちについて講ずる。さらには、生命科学の進展の中で誕生したバイオテクノロジーについて、食糧問題の解決や新しい医療法の開発さらには環境浄化などへの幅広い応用性を解説する。	
		地球の進化	40億年前の原始地球からどのように大気組成が変化し、海陸が分化して来たかについて、変動する地球の姿について解説する。大気の組成が二酸化炭素から酸素へ変化する過程では、生命の進化が中心的な役割を演ずる。これが地球惑星のなかで他の火星や金星との相違に繋がる。こうした地球固有の生物進化を生み出す要因とその歴史について、平易に解説する。講義では理解を助けるための様々な工夫を凝らし、最新の研究成果について映像情報を駆使して行う。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		科学史・科学哲学	(概要) 中国では、古代以来、火薬・紙・羅針盤の発明と多くの技術革新がなされたが、近代科学は誕生しなかった。一方中世ヨーロッパではキリスト教会が学問の世界にも君臨し、大学が設立され、やがて近代科学への基礎を築いた。唯一神を信ずるキリスト教的世界観は、科学的な事実を説明する法則は唯一であるという近代科学の基本的考えと共通している。産業革命以降、生産現場での技術向上のために、近代科学は大いに貢献したが、現代では過度の進展で環境汚染などの問題を生みだし、科学のあり方が問われている。 (オムニバス方式／全15回) (28 福田 正己／9回) 「科学は魔物か神か」をテーマに、こうした科学の成立とその精神基盤について広範な見地で解説する。 (31 堀田 誠三／6回) ヨーロッパの自然観＝科学観の源泉をギリシアの自然哲学にみたのち、自然認識＝世界認識としての科学と宗教および社会制度との相互作用のあり方を、中世から近代の産業革命まで歴史的に解説する。	オムニバス方式
		近代哲学と技術	近代理性は自然と人間を支配する道具的理性であったという批判がドイツ哲学の底流にあり、フランクフルト学派が継承している。フランクフルト学派第二世代のハーバーマスは道具的理性に対抗し、人間性と民主主義を基礎付ける理性をコミュニケーション的理性として提唱した。このような理性概念の分節化のなかで、近代科学技術をどのように位置づけるかが問題となる。技術を道具的理性と同一視して批判に終始するのだけでは済まされない時代が現代である。このような視点から、技術をめぐるさまざまな事例を取り上げて考察する。	
		フィールド情報学	近年の温暖化のもとで、地球環境に様々な異変が多発している。これらの実体を正しく理解し、また将来予測と対応策を講ずることが急務となっている。その場合には対象とする課題や分野が多岐にわたり、単一の学問領域や思考では問題解決に至らない。そこで多領域の学問分野を統合する思考基準として、情報の共有と課題の一元化のための思考基準として、フィールド情報学が提示されている。この新たな学問領域を理解するための、知識ツールについて段階的に学習し、学生が自立的に問題解決するための重要な知識を体得させる。主要なテーマとして地球温暖化を取り上げ、その発生メカニズムから対応策までを示して、具体的な学習資料とする。	
	環境と生活	環境と物理	環境の様々な問題について、物理学の視点から解説する。環境汚染など科学の進歩が引き起こした負の側面を情緒的に論じるのではなく、物質やエネルギーを消費しながら人間が種々の活動を行うことで、環境はどのような影響を受けるのかを客観的に学ぶ。地球システムの中での物質やエネルギー循環の視点から人間活動を位置付けることで、環境問題の解決の糸口を見出す。そして、今後の都市や地域開発において、人間活動と自然環境の共存に役立て、更には、地球環境と生態系の維持につなげるための学習を行う。	
		化学と環境	有機化学や無機化学の基礎、環境関連の化学に関する講義を行う。内容は、有機物、無機物の構造や反応、分析などの一般知識を重点に講義し、環境と関連する水中有機物、水中無機物、そのような化学物質の毒性、環境関連の化学製品や技術など環境と関連する内容も一部含める。この講義で、社会に出た時や今後各専門分野へ進んでいく際に最低限必要な化学の基礎知識を持たせる。	
		生物生態学	生物界、特に陸域で最大の生物システムである森林生態系を対象に、その変異と成立メカニズムに加えて生態系機能に関する講義を行う。森林生態系の変異と成立については、地球上ならびに我が国の多様な森林タイプとその成立要因を気候学、土壌学、地形学、地史の視点から理解させ、同時に森林生態系を支える有機物とミネラルの循環について基本的知識を習得させる。さらに森林生態系の機能に関しては、その炭素吸収による温暖化防止や良質な水資源供給の機能に焦点を当て、森林生態系の重要性を科学的・明示的に認識させる。	

科目 区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
			自然誌概論	地域の自然と特性について、その成り立ちと歴史を多角的に理解するための視座を養う。自然を構成する要素（地形、地質、大気、植生、気候など）が相互に依存しながら構成する地域特性を、実地での学習を交えながら系統的に学習する。特に福山を中心とする地域の自然の成り立ちについて、地形図や衛星画像を用いながら、空間的な要素の配置が、時間経過とともにどのように変化したのか、大気や気候が陸域の環境要素にどのように作用しているのかについて、平易に解説する。地域の環境の成立を体系的に理解する力を養う。	
			自然誌実習	本講義では、自然環境を調査するための基礎的な知識と技能を習得する。最初に、地形図と空中写真から地形や土地利用を分類する方法や、地形の測量方法を学ぶ。次に、これらの技能をベースにして、福山周辺で野外実習を行う。実習では、地形計測や土地利用の記載を行い、その成果を地図にまとめる方法を学ぶ。最後に、気象の観測法やAMEDASデータの解析方法について学び、地域の自然環境の特徴を調査するための基礎技術への理解を深める。なお、現地実習は、土日を利用して1日かけて行う。	
			森林資源学	森林資源は物質資源と環境資源に大別される。人類は、元来、物質資源として森林を利用してきたが、地球規模の森林の減少にとともに、環境資源としての森林の重要性が認識されるとともに、その維持が喫緊の課題となっている。しかし現在でも、途上国では伝統的な物質資源として、先進諸国では工業原料や遺伝子資源などとして森林の物質的利用が不可欠とされる一方、生物多様性の維持や二酸化炭素の吸収源としての環境機能の強化も必須とされており、森林利用における物質資源と環境資源としての二側面の折衷が21世紀の課題となっている。こうした観点から、本講義では1)森林資源の定量的な評価法、2)世界の森林資源の現状、3)農耕開始以来の森林減少史、4)伝統的な森林利用、5)工業原料としての森林利用、地球環境の恒常性に果たす森林の機能と機構、6)森林の側から見た地球環境史、を講ずる。	
			環境資源論	現在、「環境問題」に対応する新しい社会システム「循環型社会」の構築に向けて、様々な取り組みが開始されている。その中で、「循環型社会」を構築するためには、従来は社会全体の中で「ごみ」として捉えていたモノを「資源の源泉」であると再認識し、有効に活用していく取り組みが求められている。そこで本講義では近年、主流となっている3Rの概念に基づき、いかに「ごみ」を資源やエネルギーとして転換し、有効活用していくのかを考察する。（3Rとは、Reduce, Reuse, Recycleを指す。）	
			環境科学実験	（概要） 持続可能な都市の設計のためには、水と河川の性質や、限りある水資源の有効な利用方法を知る必要がある。この講義では、水や河川に関連する室内実験と野外実習をグループで行い、水の性質、河川の地形や河川水の利用について理解を深める。野外実習の実施にあたっては、学生自らが計画を立案し、グループごとに結果をまとめ、発表と議論を行い、実験結果についての理解を深める。これにより、データの取り方やまとめ方の基礎を学び、科学的方法の基礎を習得する。芦田川の実習は、土日を利用して行う。 （オムニバス方式／全15回） （17 平松 和彦／3回）水の相変化や気象に関する講義と実験 （41 澤田 結基／3回）河川の地形形成に関する講義と実験 （35 堤 行彦／3回）河川水の水質変換に関する講義と実験 （澤田・平松・堤共同／6回）ガイダンス、および芦田川河川敷での実習	オムニバス方式

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
			地域学（福山学）	（概要） 福山とはどのようなまちであるのか？福山のまちはどのように成立し発展してきたか？福山のまちは今日どのような課題に向き合い、その解決にむけて何をしてゆくべきか？福山で学び生活してゆく上で基本的な教養として身につけて欲しい知識・情報について学ぶ。 （オムニバス方式／全15回） （32 藤井 輝明／5回） 今日の福山の中心部は、江戸時代初期、芦田川のデルタ地帯の開拓によって形成された。以降、さまざまな殖産興業、明治大正期の近代化、戦災復興、大企業誘致を経て今日に至っている。この福山の形成、変遷、今日の状況と課題を理解する。 （36 西川 龍也／5回） 福山というまちのもつ特色について、産業・社会・空間・文化など様々な視点から基本的な知識・情報を紹介・分析し、学んでゆく。さらに、福山というまちが、今日どのような課題に向き合い、その解決にむけて何をしてゆくべきかについても考察を進める。 （42 八幡 浩二／5回） 備後地域の歴史は、江戸初期の福山城下町の形成により大きく転換する。まず城下町形成以前の古代から中世にかけての備後地域の地勢・交通・社会などを紹介する。さらに近世に至り、城下町形成の背景・理念と、江戸期福山の生活・文化についても学ぶ。	オムニバス方式
スキル科目	外国語	英語	総合英語Ⅰ	英語コミュニケーションの基礎となる語彙力、文法力の徹底習得を行う。英語学習ソフト『ALC NetAcademy 2』を主教材とするパソコンを用いた学習スタイルによって、語彙、文法の継続学習と定着を目指す。英語教員と英語学習アドバイザーの指導のもと、週2回の授業とともに、受講生が各自の英語の能力に応じて、段階的に自学自習を行うよう指導する。「総合英語Ⅰ」における語彙学習（PowerWordsコース）の到達目標をレベル3とし、文法学習（英文法コース）は、レベル1とする。	
			総合英語Ⅱ	英語コミュニケーションの基礎となる語彙力、文法力の徹底習得を行う。英語学習ソフト『ALC NetAcademy 2』を主教材とするパソコンを用いた学習スタイルによって、語彙、文法の継続学習と定着を目指す。英語教員と英語学習アドバイザーの指導のもと、週2回の授業とともに、受講生が各自の英語の能力に応じて、段階的に自学自習を行うよう指導する。「総合英語Ⅱ」における語彙学習（PowerWordsコース）の到達目標をレベル4とし、文法学習（英文法コース）は、レベル2とする。	
			総合英語Ⅲ	I・II期で習得した語彙、文法力を土台に、リーディング、リスニング能力の向上を目指す。英語学習ソフト『ALC NetAcademy 2』を主教材とするパソコンを用いた学習スタイルによって、様々なリスニング、リーディング演習を繰り返し行う。英語教員と英語学習アドバイザーの指導のもと、週2回の授業とともに、受講生が各自の英語の能力に応じて、段階的に自学自習を行うよう指導する。「総合英語Ⅲ」におけるリスニング、リーディング学習（スーパースタンダードコース）の到達目標をレベル2とする。	
			総合英語Ⅳ	I・II期で習得した語彙、文法力を土台に、リーディング、リスニング能力の向上を目指す。英語学習ソフト『ALC NetAcademy 2』を主教材とするパソコンを用いた学習スタイルによって、様々なリスニング、リーディング演習を繰り返し行う。TOEICテストやビジネスシーンで求められるスキルにも対応。英語教員と英語学習アドバイザーの指導のもと、週2回の授業とともに、受講生が各自の英語の能力に応じて、段階的に自学自習を行うよう指導する。「総合英語Ⅳ」におけるリスニング、リーディング学習（スーパースタンダードコース）の到達目標をレベル4とする。学期末にTOEIC-IPテストで1年間の英語力の伸張を測定する。	

科目区分				授業科目の名称	講義等の内容	備考
				英語コミュニケーションA	(英文) This is an introductory English communication course. The main aim is to help students develop confidence and competence in `everyday` spoken English in a challenging and enjoyable learning environment. The emphasis is on speaking, listening, pronunciation and vocabulary building although some elements of reading and writing skills are built into the course. Students are encouraged to put the English language 'into action' through a wide variety of communicative task-based activities such as pair work information exchanges, team activities and role-plays. (和訳) 入門的な英語コミュニケーションを学ぶ科目である。本科目は、学生が、日常に話される英語を運用する自信と能力を身につけることができるように手助けすることを目的としている。それらは、学生にとって挑戦しようという気持ちになれるような、かつ、それを楽しむことができるような学習環境で行われる。読み書き技術も、ある程度は学習するが、主として、話すこと、聴くこと、発音、語彙構築に重点が置かれる。学生たちは、二人一組になったの情報交換、グループ活動、ロール・プレイなどのコミュニケーションを実地で試みる様々な活動を通して、英語を「実践」する。	
				英語コミュニケーションB	総合英語で獲得した語彙と文法力と聴解能力を活かして、英作文力とスピーキングの力を養成する。演習は週に2回あり、1回の演習の前半分45分において英作文を学び、後半45分においてオーラル・イングリッシュを学ぶ。英作文では、自己紹介などの英文からビジネスレターなどを大量に書いて、英文の仕組みを自分のものにする。オーラル・イングリッシュでは、日常生活や時事問題に関する基礎的な教材を使用し、自分の考えを論理的に伝える能力を発展させ、総じてライティングとスピーキングの基礎を習得する。	
				ビジネス英語 I	日常英会話からビジネスシーンまで、幅広い範囲における英語の実践的な運用能力の習得を目指す。講義はリスニング強化（前半）とリーディング強化（後半）で構成し、リスニングでは、慣用的表現や短い会話文の聞き取り等を行い、リーディングでは文法やビジネス文書の読解を行う。教員と英語学習アドバイザーによる週1回の講義と、英語学習ソフト『ALC NetAcademy 2』を用いたパソコンでの自学自習による語彙力の強化を同時に進め、到達目標はTOEIC試験の470点を超える程度とする。	
				ビジネス英語 II	日常英会話からビジネスシーンまで、幅広い範囲における英語の実践的な運用能力の習得を目指す。講義はリスニング強化（前半）とリーディング強化（後半）で構成し、リスニングでは、紛らわしい音の聞き分けや会話の概要と詳細をつかむ練習等を行い、リーディングでは重要な文法や目的に応じたリーディング法等を習得する。教員と英語学習アドバイザーによる的確な自己学習指導を受けながら、英語学習ソフト『ALC NetAcademy 2』を用いたパソコンでの自学自習による文法力の強化を進め、到達目標はTOEIC試験の600点程度とする。	
				ビジネス英語 III	日常英会話からビジネスシーンまで、幅広い範囲における英語の実践的な運用能力の底上げを図る。講義はリスニング強化（前半）とリーディング強化（後半）で構成し、リスニングでは、自然な応答練習や状況別の説明文の理解等を目指し、リーディングでは重要な文法やビジネス文書の読解を行う。毎回の小テストや復習テストとともに、英語学習ソフト『ALC NetAcademy 2』を用いたパソコンでの自学自習により、リスニング力、リーディング力の増強を図り、到達目標はTOEIC試験の600点程度とする。	

科目区分				授業科目の名称	講義等の内容	備考
				上級英語 I	(英文) This course aims to help students develop more advanced communication skills by building on what they learned in the introductory English Communication Course. While speaking, listening and vocabulary building remain a key part of this course, students will also be expected to read extensively choosing from a selection of graded reading books and then give a short presentation to the class on one of the books they have read. In addition students will be required to write a weekly diary. The course will also include some project work through which students are encouraged to research and prepare presentations both individually and as a part of a group. (和訳) 「上級英語 I」は、「英語コミュニケーション」で学んだことを土台に、さらに高度な英語コミュニケーションの技術を学ぶことを目的としている。話すこと、聴くこと、語彙力増強が主たる部分を占めるが、さらに、受講生は、自分の読解力にあった英語文献を選び読み、その内容について報告発表することが求められる。英語で記述した日誌は毎週提出しなければならない。各自が設定したテーマで調査して、それについて発表することも奨励されるが、この調査と発表は、個人又はグループで行う。	
				上級英語 II	(英文) In this level 2 advanced communication course, along side providing plenty of opportunities for developing speaking and listening skills, we also take a closer look at grammar and how to talk about it in English. In addition students on this course will be expected to take part in an extensive reading program, write a book review and talk about an English book of their choice to their classmates. They will also have to complete weekly diary entries and submit these for marking. Ideas and guidance will be given to students with regard to diary work along with plenty of opportunities for more 'free writing'. Students will be encouraged to include recently introduced language ideas and vocabulary into their writing. (和訳) この「上級英語 II」においては、話し聴く技術を向上させる機会を豊富に提供すると同時に、単に話し聴くことに慣れるのではなく、より文法面に留意して話すことに習熟する機会を提供する。受講生には、より幅広く英語文献に触れ、その内容を報告発表することが期待される。より自由に、より多く書くためのアイデアや方法が、この科目において提供されるので、受講生は、クラスで紹介されたアイデアや語彙を活用して、週毎に英語日誌を提出する。	
				中国語 入門中国語 I	この授業は「入門中国語 I」というテーマで、初めて中国語を勉強する学生を対象に行うものである。本授業では、学生一人ひとりが持っている「外国語の学習能力」を最大限に伸ばすために、中国語（標準語）の基礎的な知識を講義するだけでなく、基礎中国語を応用できるように、段階ごとに「聴く、話す、読む、書く、対訳」という総合的な技能訓練を行う。「入門中国語 I」の段階では、テキストに沿って中国語の表音記号～第5課を中心に学習し、中国語「基本語彙 I・基本文法 I・基本表現 I」の習得を到達目標とする。	
				入門中国語 II	この授業は「入門中国語 II」というテーマで、「入門中国語 I」を修了した学生を対象に行うものである。本授業では、引き続き「入門中国語 I」のテキストを使い、第6課～第12課を中心に学習し、「聴く、話す、読む、書く、対訳」という総合的な技能訓練を通して、相応レベルの中国語運用能力を育成する。「入門中国語 II」の段階では、中国語の「基本語彙 II・基本文法 II・基本表現 II」の習得を到達目標とする。この段階の学習を通して、「中国語検定試験準4級」レベルに到達することを目指す。	
				初級中国語 I	この授業は「初級中国語 I」というテーマで、「入門中国語 II」を修了した学生を対象に行うものである。本授業では、さらにステップアップして、テキストに沿って「聴く、話す、読む、書く、対訳」という総合的な技能訓練を通して、相応レベルの中国語運用能力を育成する。「初級中国語 I」の段階では、日常に使えるような平易な文章を聴いたり、中国語の表現や、文法、文型などの練習をしたりして、「基本語彙 III・基本文法 III・基本表現 III」の習得を到達目標とする。	

科目区分				授業科目の名称	講義等の内容	備考
			初級中国語Ⅱ	この授業は「初級中国語Ⅱ」というテーマで、「初級中国語Ⅰ」を修了した学生を対象に行うものである。本授業では引き続き、「初級中国語Ⅰ」のテキストを使い、第7課～第12課を中心に学習し、「聴く、話す、読む、書く、対訳」という総合的な技能訓練を通して、相応レベルの中国語運用能力を育成する。「初級中国語Ⅱ」の段階では、中国語「基本語彙Ⅳ・基本文法Ⅳ・基本表現Ⅳ」の習得を到達目標とする。この段階の学習を通して、「中国語検定試験4級」レベルに到達することを目指す。		
			中級中国語Ⅰ	この授業は「中級中国語Ⅰ」というテーマで、「初級中国語Ⅱ」を修了した学生を対象に行うものである。本授業では、主としてテキストに沿って「聴く、話す、読む、書く、対訳」という総合的な技能訓練を通して、相応レベルの中国語運用能力を育成する。「中級中国語Ⅰ」の段階では、主としてテキストの第1課～第6課の内容を中心に学習し、学生自身の日本での生活の場面を想定して、それぞれの場面で中国語の各技能で自由自在に表現できることを到達目標とする。		
			中級中国語Ⅱ	この授業は「中級中国語Ⅱ」というテーマで、「中級中国語Ⅰ」を修了した学生を対象に行うものである。本授業では、引き続き「中級中国語Ⅰ」のテキストを使い、第7課～第12課を中心に学習し、「聴く、話す、読む、書く、対訳」という総合的な技能訓練を通して、相応レベルの中国語運用能力を育成する。「中級中国語Ⅱ」の段階では、学生の中国での留学生活の場面を想定して、それぞれの場面において中国語の各技能で自由自在に表現できることを到達目標とする。この段階の学習を通して、「中国語検定試験3級」レベルに到達することを目指す。		
		フランス語・ポルトガル語	フランス語Ⅰ	自己および身近な状況など日常的な事柄に関する基礎的な聴解力・会話力・読解力・文書作成力の4分野にわたるフランス語能力を身につける。社会言語として実践的な場面における意思疎通を可能とする語学力を身につけるため、フランス語成立の背景となっている生活・社会文化や地理歴史などを映像を交えて学習しながら、基本的な語彙・文法・表現（口頭・文書）を反復練習する。使えるフランス語習得を目指すし、日本人が苦手とする聴解力・口答表現力を重点的に鍛える。		
			フランス語Ⅱ	フランス語Ⅰに引き続き、日常的な事柄に関するやや発展した聴解力・会話力・読解力・文書作成力の4分野にわたるフランス語能力を身につける。フランス語成立の背景となっている生活・社会文化や地理歴史・社会問題・教育制度・文学などを学習しながら、社会言語として実践的な場面における意思疎通を可能とする語学力を身につける。礼儀正しい表現など日常生活を円滑に行うためのやや発展した語彙・文法・表現（口頭・文書）を反復練習する。DELFA1と並行して、文部科学省認定実用フランス語技能検定4級相当のフランス語運用能力を習得する。		
			ポルトガル語Ⅰ	福山市におけるブラジル人の外国人登録人口は約800人と、中国、韓国・朝鮮に次いで3番目に多く、福山市ではポルトガル語訳の転入ガイドの作成や、ポルトガル語を話せる専門アドバイザーを配置している。本授業では、ポルトガル語の基礎的な文法・表現・語彙などを丁寧に学習し、身近な状況など日常的な事柄に関する会話・読解・作文などのポルトガル語の基礎的能力を身につける。また、ブラジル人住民と実際にかかわる様々な場面において、意思疎通を可能にする初歩的なコミュニケーション能力を身につけることを目標とする。		
			ポルトガル語Ⅱ	「ポルトガル語Ⅰ」に引き続き、基礎的な文法・表現・語彙を復習しつつさらに学習を発展させ、身近な状況など日常的な事柄に関する会話・読解・作文などのポルトガル語の基礎的能力を身につける。また、ブラジルの歴史・文化、教育制度、生活などを学びながら、実践的なコミュニケーション能力を身につける。受講生の要望やニーズを把握しつつ、使用教材や参考書も随時紹介する。文法の学習にかたよらないよう、毎講義に会話の練習を行い、基本的な時制表現（現在・過去・未来）ができること到達目標とする。		
	コンピュータ・スキル	情報演習Ⅰ	情報化社会で活躍する為に最低限身に付けておくべき情報リテラシーとして、パソコンを使用する際の基本操作やワープロ・表計算、ネットワークの活用の上で求められるマルチメディア情報通信の応用ソフトウェア（電子メールや情報検索）に関するスキルや情報倫理等を学ぶ。この科目は、必要なアプリケーションソフトを活用する為の基礎的知識の習得が主体の授業である為、更なる情報コミュニケーションスキル向上の為に情報演習Ⅱと併せて受講する事が想定されている。	演習 24時間 講義 6時間		

科目 区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
			情報演習Ⅱ	情報に対する合理的な判断力を身に付け、正確な情報を活用して、自らの意見を他人に分かりやすく伝える為の情報コミュニケーションスキルの向上を図る。その為に、インターネットで公開されている多様なデータなどから必要な情報を探し出し、得られた情報の真偽を正しく判断し、吟味した内容に自らの意見を加えて、プレゼンテーションソフト（PowerPoint）やWeb（HTML）による情報発信を行う。この演習を通して、各自が逐次作成した情報の管理や他人の権利を侵害しない重要性についても習得する。	演習 2 8 時間 講義 2 時間
			情報応用演習Ⅰ	コンピュータの情報処理の為のプログラミング（BASIC, FORTRAN, 又はC）の基本的スキルを学ぶ。多様化した複雑な情報化社会の中で直面する様々な問題を柔軟に解決する為には、少なくとも簡単な数値計算やデータ処理を自ら行うことが出来る能力を身に付ける必要がある。そこで、テーマ毎の説明と演習によって、プログラミングに必要なアルゴリズム、データの種類や構造、各種処理の流れ等の基礎概念を習得しながら、最後の問題演習を通して、最終的には簡単なプログラムが自由に書けるようになることを目的とする。	
			情報応用演習Ⅱ	パソコンや各種サーバを安全かつ快適に使えるスキルを身に付ける。特に、Linux（UNIX）上で、（１）Xウィンドウシステムの操作、（２）ファイルシステムやシェルの理解、（３）データ圧縮、（４）ソフトウェアのインストールやアンインストール、（５）各種環境の設定、（６）ネットワーク通信（SSHやFTP等）、（７）ウェブサイトの仕組み等、システム管理の基礎を学ぶ。その過程で、テキストエディタEmacsや綺麗なレポートを作成する為のLaTeX、作図の為のGnuplot、シェルプログラミングについても学ぶ。	
	人間 力 科 目	キ ャ リ ア デ ザ イ ン	キャリアデザインA	本科目は学生が自らの将来を展望し、社会の一員として生活する基礎を養うことを目標とする。その将来を展望するために、まずこれまでの学びや生活について振り返ることを基礎とする。次に、地域で働く人たちの声を聴くことで、社会の現実を知るとともにこれからの自分に何が必要であるかを考えさせる。そして、これらの振り返りやディスカッションなどを通して今後の将来展望につなげるとともに、大学や社会における学びに何が必要であるかを見極め、大人として生きる力を養成する。	
			キャリアデザインB	受講生それぞれの特性に合わせ、独自のキャリアデザインの形成を啓発・促進・支援という3つの手法を活用し、潜在能力を喚起することを目標とする。啓発面では、学習した専門知識に沿って、職業観の育成、職業選択能力の開発を行う。促進面では、自己能力の徹底分析により、自分にふさわしい職業観、明確な自己の役割意識が形成できるように教育する。支援面においては、学生の動向を随時に把握しながら、学内CDCとの連携を強化するとともに、学外の変化を絶えずフィードバックし、キャリアデザインの形成を図る。	
		体 育 ・ 健 康	健康・スポーツⅠ	本実技では、自らの健康問題について、体を動かすことを通して、主体的に考える力を養うことを目的とする。毎回のストレッチや準備運動からは、主運動を行うまでの準備（レディネス）の重要性を、主運動であるスポーツ種目（バレーボール、バドミントン、ソフトボール、テニス）では、集団のなかの一員としての役割等から協調性を身につける。更には種々の運動を通して、体を動かすことの重要性を総合的に学び、生涯スポーツへと展開する。	
			健康・スポーツⅡA	生涯スポーツとして、また社会人として関わりを持つ可能性の多い種目や福山市の公共施設を有効利用した、複数のコースの中からひとつを選択し、その競技特性について、実践を通してより専門的に学ぶ。健康スポーツⅡAでは、放課後・土曜日コースとし、フィットネスやエアロビクス、ダンス、ゴルフ、ヨガの中からいずれかを選択する。講師や施設の人と接する中で、社会の一員としての立場を理解し、マナーや規則の重要性について、理解することも目的とする。	
			健康・スポーツⅡB	生涯スポーツとして、また社会人として関わりを持つ可能性の多い種目や福山市の公共施設を有効利用した、複数のコースの中からひとつを選択し、その競技特性について、実践を通してより専門的に学ぶ。健康スポーツⅡBでは、集中コースとし、夏季の二上りおどりや漕艇、スクーバダイビングの中からいずれかを選択する。二上りおどりでは、福山の伝統や歴史について複合的に学び、漕艇、スクーバでは河川や海域の汚染といった環境問題についても学ぶ。講師や地域の人と接する中で、社会の一員としての立場を理解し、マナーや規則の重要性について、理解することも目的とする。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
			健康・スポーツⅡC	生涯スポーツとして、また社会人として関わりを持つ可能性の多い種目や福山市の公共施設を有効利用した、複数のコースの中からひとつを選択し、その競技特性について、実践を通してより専門的に学ぶ。健康スポーツⅡCでは、集中コースとし、冬季のスキーを実施する。更には地球温暖化がスキー場の経営に与えた影響などを総合的に学ぶ。また講師や地域の人と接する中で、社会の一員としての立場を理解し、マナーや規則の重要性について、理解することも目的とする。	
			健康科学	成長期から成人期に移行するこの時期に、正しい健康リテラシーを身につけるとともに、今後起こりうる健康問題について理解することで、その予防としての運動、食事、休養の重要性と、それをサポートする社会的なシステムについて理解する。またこれらを主体的かつ科学的に捉え、行動変容を意識した実践力と、その基盤となるエビデンスに基づいた健康づくりについて考察する。また健康・スポーツIおよび健康・スポーツIIA～Cやコンピュータスキル科目との関連から体力の評価と分析に関する基礎的能力を身につける。	
		入門ゼミ	大学入門ゼミ	大学における学習・研究に必要な種々のアカデミック・スキルを養うため、文献や資料検索の方法、フィールドワークの方法、文献レビューの方法、レポートの作成方法、発表資料作成の方法等について学習する。また、2年次以降のゼミ選択に必要な知識と研究方法を学ぶとともに、教育・保育現場での実地体験に必要な教職・保育職の意義や実践的指導力に関する基本的な認識や態度について学習する。	
			教育入門ゼミ	「大学入門ゼミ」での学習を踏まえて、教育・保育について関心のあるテーマを設定し、テーマを探究しつつ成果を発表する活動に取り組むことによって、教育・保育に関する基本的な理解を養う。また「大学入門ゼミ」に引き続き、2年次以降のゼミ選択に必要な知識と研究方法を学ぶとともに、教育・保育現場での実地体験に関わって、教職・保育職の意義や実践的指導力に関する基本的な認識や態度についても学習する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		文化と教育	(概要) 「文化と教育」のテーマは、幼稚園・保育所・小学校において、教育内容となる様々な文化的コンテンツについて、教育者としての理解を深めることである。 また、到達目標は、子どもの教育において、言葉、数、自然・社会についての知識、生活・音楽・美術という7つの文化的コンテンツが子どもの発達に対して持つ意義、及びそうしたコンテンツが学ばれる過程について基本的な概念を学修し、幼稚園・保育所・小学校における教育者としての基礎的素養を形成することである。 (オムニバス方式／全15回) (15 齋木 喜美子／8回) 主要な児童文化財である絵本を手掛かりとしながら、子どもの言葉、数や量の概念の形成、社会的・科学的認識の発達過程について学び、理解を深める。 (16 渋谷 清／6回) 子どもを取り巻く文化や芸術の見地から、身近な生活の中の美術、子どもの表現や造形、地域的美術文化や芸術、美術館などの教育文化施設との連携について学び、それぞれの認識を深める。 (齋木・渋谷共同 1回) 授業の趣旨と授業計画、評価方法等についてのガイダンスを行う。	オムニバス方式
		子ども論	21世紀の今日、世界はグローバル化の新時代に突入した。本講義は、「グローバル化時代における子どもの生活と教育の実態に関する国際比較」をテーマとし、とりわけ東アジア諸国（日本、中国（香港）、韓国、台湾）における子どもの生活と教育の実態と今後の課題を展望することを目標とする。具体的に次の内容を中心に展開する。(1) 各国における子どもの生活環境とその社会的背景、(2) 子ども観、育児観と教育観、(3) 育児と教育の実態、(4) 子どもの生活の実態、(5) 子ども文化の実態。本講義は、比較を通して、新時代における東アジアの子どもたちの生活と教育に関する共通の課題を見出すことを目指す。	
		発達心理学	発達心理学の礎を築いたピアジェ、ゲゼル、ピアジェ、ヴィゴツキー、ワロンらの研究を解説しながら、「発達期」や「発達段階」、「発達の危機」など発達の考え方の基本について講義する。最近の研究をふまえて、乳児・幼児・児童・青年・成人それぞれの年齢の心理的特徴と意義について明らかにし、変化の過程に関わる環境（家族・学校園・地域など）の役割について検討する。それらを通じて、子どもらしさの固有の価値と教育の意義について認識を深めてもらう。	
		教育心理学	幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程（障害のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程を含む。）について講義し、この分野の基本的な考え方や概念を形成する。まず、(1) 発達とは何かを論じた後、幼児期から児童期及び青年期に至る心身の発達、次いで、(2) この時期の記憶、認知、思考、学習及び動機づけの特徴を学ぶ。その上で、(3) 学校での学習指導と学習意欲、(4) 学級集団と人間関係、(5) 教育の評価について、展開する。各内容において、特別な支援が必要な幼児、児童及び生徒を取り上げる。	
	家族	家族の歴史	現代日本において家族が大きな変動の中にあることは確かであるが、それは「家族の危機」とか「家族崩壊」と一括して論じられるような単純な問題ではない。この授業では、家族と社会の関係が時代によって大きく変化し、それによって家族がもつ機能も、人々の家族に対する意味づけもまた変化することを、歴史的文脈に即して講義する。そして授業を通して、ごく限られた家族に関する自分の経験を相対化し、現代の家族にまつわる多様な問題にアプローチする際に必要となる基本的な視点を身につけることを目指す。	
		家族臨床	家族関係・親子関係は人と絆を結ぶ力の土台をつくり、また自己肯定感など自己概念の基盤をつくる。しかし心理臨床場面では、家族・親子関係に葛藤し苦悩している人と出会うことが少なくない。関係の密度が濃い人間関係はその分だけ葛藤も深いとも言え、その意味で親子関係ほどむずかしい人間関係はないともいえる。人間関係の希薄化・孤立化が指摘される現代の中で、子どもの発達にとって適切な親子・家族関係や、親が親として成熟していくために必要な人間関係などについて、臨床事例や深層心理の立場を踏まえながら考えていく。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		地域福祉論	社会福祉問題は特殊な人々に生ずる特別な問題ではなく、日常生活を送る上で誰もが抱える問題である。子育て支援においても、子育てを地域全体の問題としてとらえ、子どもと親たちを見守ることが求められている。住み慣れた地域社会の中で、社会関係を保ちながら、自分らしく生活が送れるよう、様々な機関・施設が、また様々な専門職が連携して、福祉サービスを必要としている人の生活を支えていることを知る。地域にある機関・施設の意義を理解し、また住民、行政機関や福祉専門職の連携の必要性について考える。福山市社会福祉協議会の活動を紹介したり、福山市の保健・医療・福祉の拠点施設である福山すこやかセンターの見学をする予定である。	
		家族援助論	保育者としてなぜ家族援助が求められているか理解するために、保育という行為を子育ての営みという大きな視野から捉えなおし、家族援助の枠組みを明らかにする。社会学、心理学、福祉論を通して、家族の機能とその変遷や家族の発達と個人のライフサイクルについて学ぶ。 児童の最善の利益にたった家族援助を追求するために保育者に求められるスキルとして、子どもと家族のアセスメント、援助計画、援助の実際と評価等、実践事例を通して学ぶ。	
		障害 障害者の福祉と教育	障害児の支援は、まず障害の早期発見と早期対策の課題から始まり、療育の開始、就学指導、学校教育、卒業後の就労・生活支援と繋がっていく。本授業では、障害児者の生涯発達を見通し、そのライフステージごとの支援の現状と課題を理解するとともに、教育と福祉の連携の在り方について考察する。そして、家族も含めた教育、福祉、医療、保健の関係者とも連携した個別支援計画を立てていく力の基本的事項を身につけることを目標とする。	
		インクルージョンの歴史	インクルージョンは広義ではsocial inclusionであり、狭義にはinclusive educationを指す。インクルーシブ教育の場合も、社会的排除の解消をめざす。障害、ジェンダー、エスニシティ、文化、宗教、貧困、格差等のさまざまな差異（differences）に対する相互の尊重により差別の発生を軽減・解消するのがインクルージョンである。この講義では、差異の典型としての障害を例示し、社会がどのような障害観をもち、障害者に対処してきたのか、その理由はどこにあるのかを、欧米、日本、途上国において比較検討することで、インクルージョンについての理解を深めたい。	
		障害者教育指導論	特別支援学校学習指導要領を概説するとともに、その基盤にある指導原理について考えるための講義である。原理的な問題としては、「一人ひとりのニーズに応じた指導」の意味と意義、「知的障害」のある場合の指導上の配慮、ICFモデルをふまえた障害概念と「自立活動」の意味、子どもを「理解すること」の意味と必要性、「障害の受容」と交流教育の問題をとりあげ考察する。その上で、教育現場で子どもの声を聴き、これに根ざして模索されている実践を例示しながら、「個に応じた指導」の具体的な展開について学生の問題意識を育てたい。	
	展開科目	教育 学 関 連 科 目 初等国語	小学校において国語の学習指導を行うための基礎となる知識、理解、技能（書写を含む）を習得することを目的とする。そのために、まず、国語科教育における目標論、評価論、教育方法論、教育課程論、教材論を概観し、授業づくりのための構造図を描けるようにする。理論的知識とともに実践的知識を養うために、プレゼンテーションを計画、実施し、受講者自らが課題を見出し、乗り越えた結果として、本授業における学びを自ら位置づけることができるようになることをめざす。	
		書写演習	国語教育のために必要な書写の基礎的研究を行う。実習を中心として、特に、楷書と用筆法・結構など、表現技法の練習を充実させ、書写指導法の習得を図る。後半は、古典臨書を行い、線質・用筆法など、細かい分析をし、書写技能を高める。	

科目 区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		初等社会	この講義では、次の2点を中心にして、参加型講義を取り入れて、学習者が自分なりの社会科教育観を確立することを旨とする。 (1) 社会科がどのような経緯で誕生し、どのような目標が掲げられ、どのような教育内容（カリキュラム）になっているのかを理解する。また、どのような教授＝学習過程を組織するか、いわゆる教育方法も含めて、自分なりの社会科教育観を確立する。 (2) 小学校社会科の教育内容は、3・4年での地域学習、5年生での産業学習、6年生での歴史学習と「世界の中の日本」学習にサブカテゴライズできる。それぞれの内容について、具体的な典型事例を取り上げ、教科書の背後にある事象、事象間の関係、それらの構造について認識を深め、社会を意識的に見つめる態度を育成する。	
		算数	小学校算数科で扱う内容のなかで、特に重要な内容にも力点を置きながら小学校教員として必要な資質を養う。授業では、「数と計算」「量と測定」「図形」「数量関係」各領域を概観すると共に、各領域において算数科として重要な教育内容を提示する。 特に、異分母の分数の考え、台形の面積の求め方の考え方、四角形の内角の和の求め方、文字を用いた計算の内容について理解してもらう。特に、新学習指導要領の新しい内容である統計教育について、平均の色々について解説し、算術平均だけではなくサンプリング平均の考えも提示する。	
		初等理科	小学校理科の授業に必要な科学的な知識および科学の方法の基礎基本を学ぶ。理科の授業では日常的にみられる自然現象の観察を行うことを出発点にすることが肝要である。また、科学を教えるためには、将来教員を目指す学生自身が自然現象に興味関心をもっていることが大切である。学生自身が科学に親しみをもち、体験的な学習の重要性や問題解決の面白さを知っていることが、児童に理科を指導するときの必要条件であることを十分認識したうえで、基礎知識の大切さを再認識させ、学習指導要領にそって児童の実態にあった楽しい授業を行える教師を育てることを目標とする。	
		生活	教育・子育ての原点について考え、子どもたちを取り巻く環境である家庭・学校・地域社会のそれぞれが果たす役割を明確にした上で、生活科という教科をとらえていく。生活科の目標、生活科の内容については、基本的な視点を学生の意見を求めながら明確にしていく。指導計画の作成と内容の取扱い、年間指導計画、単元計画、学習指導の進め方などについては、現場の実体をふまえ、家庭や地域社会を巻き込んだり、教科の枠を超え、子どもたちの喜々として意欲的な生活を目指す指導のあり方を具体的な事例を話しながら指導していく。	
		初等音楽	小学校の教師として、児童の音楽的心情、感性、能力を養うことができる授業を行うため、音楽を正しく理解し、表現できる力を学習する。 歌唱やキーボードの基礎を学習すると同時に、音楽が表現していることについて、音探しや音遊びで体感し、誰でも表現可能な音楽へのアプローチを実践する。毎時間の使用教材から楽曲についての知識を学び、それらを表現することにより、音楽が表すものを感じ取り他に伝える表現の手立てを獲得する。	
		図画工作	図画工作科で扱う「表現」と「鑑賞」の各領域に関する基本的な内容について理解する。授業での具体的な造形活動を通して、指導能力の基礎となる用具・材料の扱いも含めた表現技術としての実技能力を高める。同時に鑑賞活動として、出来上がった各自の授業作品をふり返りながら、その中に特徴や良さを相互に見つけたり、美術作品や日常生活の中にも美しさが見いだせるような、鑑賞能力を身につけていく。	
		初等家庭	小学校の家庭科指導に当たって、家庭科で教えるべき内容について理解し、そのうえで教材開発を行う。先行授業分析を行うとともに適切な指導方法のもとに内容を生かす実践能力を身につける。具体的内容としては、家族など身近な人間関係におけるコミュニケーション、食育を踏まえた家事技術、衣や住などの環境に配慮した製作などである。指導要領を踏まえながら家庭科の目指すものと、広さ奥深さの自覚の中で先行授業分析を行う。その後、それぞれの内容について効果的に教えるための指導方法と授業効果を学び、具体的な内容についての教材開発と実践を行う。	

科目 区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		初等体育	本授業の内容は、体育科の目標－内容－方法－実施－評価の過程に基づいて、教授－学習計画の作成を目ざして、以下のような構成で講義を行う。 (1) 授業の本質的過程と授業目標の明確化について (2) 体育科の授業目標設定と授業計画案作成の必要性について (3) 授業計画案作成における運動課題の配列や教示方法について (4) 授業における学習過程の活動と学習結果の評価について (5) 体育科の授業計画作成と他教科の授業計画作成との関連性や共通性について	
		教職論	「教職に関する科目（教職の意義等に関する科目）」である「教職論」では、社会の中で生きて働く学校教師に関わった基本概念を形成する。この授業では、学校教師とは社会の中でどのような存在なのか、子どもを対象とした教師の仕事にはどのような側面があるのか、学校教師はどのような過程を経て教師として成長していくのか、教職はどのような制度的基盤を持つものなのか、という点について学習する。その際、これら教師に関わった存在論、実践論、成長論、制度論について、具体的な事例を検討する活動に取り組む。	
		教育原理	この授業では教職を目ざす学生を対象に、教育の基本的な原理と制度について、歴史や思想と現代的な諸課題を関連づけながら講義する。授業の導入として、学生にはまず自らが経験してきた「教育」を相対化し、「教育」に対する先入観を疑ってみる作業を求める。そうして自らの教育観・学校観を問い直した上で、改めて教育に関する基礎知識を体系的に習得し、現代社会において学校や幼児教育が果たす役割や、現代の学校と教師が直面している問題について歴史的、社会構造的に理解し、考察できる力を身につけることを目指す。	
		教育史	日本の教育の歴史を対外的交流の視点から概説的に講義する。中国モデルをめざした古代から近世の教育、欧米モデルをめざした近代の教育への歩みを説明する。とりわけ近世社会における豊かな文字文化と教育システムの展開、近代における欧米モデルの近代学校の急速な普及の要因について、また急速な普及のために抱えこまざるをえなかった課題について説明する。今日の学校教育の問題を歴史的視点から相対化しうる認識力の形成を目標とする。	
		教育制度論	教育は、人間の成長・発達を保障するため運営される社会的な取り組みである。これは日本国憲法や教育基本法、学校教育法などといった多数の法規や教育制度を通じて具体化されている。法規や制度は、いわば教育の現場を下支えする役割を負っている。この観点に基づき、授業では、教育の具体的な運営に教育制度や法がどうかかわっているかを講義する。	
		教育社会学	教育社会学とは「教育の社会性の社会的解明」。その立場から次の3点を考える。 (1) 今日我々になじみ深い「学校」という存在は、いつ人類史にどういう社会背景を負って登場し、どういう社会的役割を果たすことで、世界中に広がったのか。 (2) またそういう学校制度の内部には、どういう要素が存在しているか。学校知識、学校文化、学校の生活秩序、教師・生徒関係、生徒集団と生徒文化、それらはどのような姿で学校の日常や「当たり前」を形成しているか。 (3) そういう学校の内・外関係が、今日さまざまな問題状況（不登校、いじめ、学級崩壊、学力低下、父母との関係の難しさ、など）に見舞われているのはどうしてか。	
		教育課程論A (小)	「教職に関する科目（教育課程及び指導法に関する科目）」である「教育課程論」では、小学校教師に必要な教育課程に関する基本概念を形成する。この授業では、小学校教育課程編成の原理、戦後の学習指導要領を軸とした教育課程政策の展開過程、教育課程の編成主体としての学校・教師のあり方、各教科・道徳・外国語（英語）活動・総合的な学習の時間・特別活動という諸領域からなる小学校教育課程の構造について学習する。その際、教育課程に関する理論をふまえて、教育課程の一部分となる指導計画を作成する活動に取り組む。	

科目 区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
			国語科指導法	(概要) 小学校国語科教育に関する理論的な基礎知識とその実践的展開力を養うことを主な目的とする。まず国語科教育の歴史と変遷について学び、学習指導要領に示された国語科教育の内容と方法を正しく理解することができるようにする。さらに「読むこと」「書くこと」「話すこと」「言語事項」の授業展開事例を具体的に学び、教材開発と教材研究に取り組む。最終的には自ら学習指導案を作成し、模擬授業を行うことによって実践力を高め、授業づくりについての自分の考えをまとめられるようにする。 (オムニバス方式／全15回) (23 森 美智代／13回) 国語科教育の歴史、学習指導要領に示された国語科の内容と方法について理解を深めるとともに、授業実践の基礎と展開の方法について、学習指導案作成や模擬授業などを通して具体的に学んでいく。 (67 矢原 徳子／2回) 書写実技	オムニバス方式
			社会科指導法	この講義において、以下の3つがねらいである。一つは、「小学校学習指導要領 社会」について理解を深める。二つは、小学校社会科を指導する上での基礎的知識を学び、具体的に指導案づくりを行い、グループ間で模擬（マイクロ）授業を行うことができることをめざす。三つは、授業を活性化するための、学習者主体の授業方法についても学ぶことである。特に、学習集団の組織の仕方を学びフィールドワークを実際に体験することを通して、社会科教育における体験活動の意義について理解を深めたい。	
			算数科指導法	小学校算数科について、学習指導上の諸問題を踏まえて、算数教育の目標、内容、方法、評価についての基礎的な事柄を身につけるとともに、実践的な指導に必要な資質や能力を養うことを目的とする。 授業は次の内容で構成する。算数教育の目標、「数と計算」領域の内容と方法、「量と測定」領域の内容と方法、「図形」領域の内容と方法、「数量関係」領域の内容と方法、算数科の指導法と評価。小学校学習指導要領解説算数編に述べられた内容について、その背景や事例を含めて講義形式で解説を行い、算数指導に必須の知識や能力を身につけていく。毎回の授業では演習を取り入れ、適宜ビデオ教材を用いて、講義内容と実践との関連づけを図る。	
			理科指導法	本講義では、小学校理科の指導法について概説する。具体的には、実際の授業映像を用いて授業分析を行ったり、一単元を取りあげて学習指導案を作成し模擬授業を行ったりし、理科の授業づくりについて検討していく。 このように、講義のみでなく演習も含めた授業を通して、指導計画（年間、単元、一単位時間）や学習指導案の作成、指導の方法、評価の方法など実践的な知識・能力を習得できるようにする。	
			生活科指導法	生活科の創設及び改訂の趣旨や経緯、目標や内容を理解した上で、年間指導計画・単元計画・学習指導案の立て方、地域や学校、子どもの実態を踏まえた教材の開発、教科書の効果的な活用方法、保護者・地域の人との連携・協力による活動支援、子ども理解と評価等について理解する。子どもと自然、子どもと社会、子どもと生活、子どもと自己の4つの視点から具体的な授業づくり及び指導・支援のあり方を考える。学生自身による体験的活動・作業的活動を通して、生活科における授業実践力を育成する。	

科目 区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		音楽科指導法	(概要) 小学校の音楽科を指導する上で必要となる目標や指導内容及び児童の音楽表現について理解を深め、教材を新しい視点から開発でき指導できる能力を獲得する。 児童が音楽に対する欲求や思いを表現でき、楽しむことができる授業をめざし、音楽のもつ特質を理解し、音楽の楽しさを全面に感じさせながら、同時に音楽的能力の獲得ができる授業実践について、自己評価、相互評価を繰り返しながら実践の応用力を身につけていく。音楽は自己表現しながら同時に他者と協同が可能であるということを、自ら体験しそれを指導できる能力を獲得する。 (オムニバス方式／全15回) (10 村山 ひろみ／9回) 学習内容と到達目標、学習指導要領、音楽づくり、まとめ (74 神原 雅之／3回) リトミックと音楽授業づくり (村山・神原共同／3回) 模擬授業の実施と分析	オムニバス方式
		図画工作科指導法	学習指導要領に示されている「小学校図画工作科」の目標や内容をふまえた上で、教材研究を主体とした制作体験を通して、図画工作科教育についての理解を深める。本授業では、教科書題材例の学年別図画工作教材を実際に体験する。それにより、教諭として「図画工作」の授業をする上で必要な知識及び技能を習得し、児童の感じ方や思いを、造形表現活動につなぐことができる実践的指導方法を身につけていく。	講義18時間 演習12時間
		家庭科指導法	家庭科という教科は、大きな社会変動の中で様々な変更を迫られてきた教科であるが、21世紀の共生の時代において、環境と人権を意識した内容と方法を実践を通して学び、家庭科の授業を構成していく力を養う。家庭科はどのような教科なのか、歴史と現在、教育目的と内容について概説し、授業の流れを構成する方法、評価等を学んだ後、指導案を書き、模擬授業を行い、相互評価をする。具体的には、現代社会において必要とされる生活に関わる理論と実践のテーマは、家族など身近な人間関係におけるコミュニケーション能力と家庭生活を大切にすること、生活に関する科学的な知識と食育を踏まえた簡単な家事能力、衣や住などの身近な問題から地球環境への配慮などに集約される。	
		体育科指導法	本授業の内容は、「小学校学習指導要領」(文科省)に基づいて、運動の内容や指導方法について、以下のような構成で講義と演習形式により授業を行う。 (1) 小学校体育科の基本的性格と体育目標の理解について (2) 各学年の体育科の目標と子どもの運動発達との関連性について (3) 各学年で学習する運動の内容と指導方法について (4) 運動の分類による運動特性と教材選択の意味について (5) 授業計画案を作成し、その授業計画案に基づいてお互いに討論を行うとともに、修正・改善を行いながら、実施可能な授業計画を作成する。	
		道徳教育論	現代社会における道徳教育の問題点を整理し、道徳とは何か、学校教育における道徳教育の役割と意義について講義する。日本の前近代社会における道徳的価値の形成と近代社会におけるそれとの比較から、近代社会・学校における道徳(修身)教育の展開と課題について説明する。次に戦後教育(学校)の中での道徳教育の展開を説明し、「道徳の時間」の意味、学習指導要領に沿って、道徳教育の目標と内容及び方法と評価について説明する。道徳とは何かを考える力、広い視野に立って自らの道徳教育体験を相対化し、創造的な道徳教育を考える力の養成を目標とする。	
		特別活動論	この授業の目的は、特別活動の目標や内容を、具体的な実践を参照しながら解説することである。そしてこれが学校教育の中で、子どもの成長・発達で期待されている役割を考えることである。 特別活動は、学習指導要領にある「学校行事」や「学級活動」等の項目から分かるように、学校や学級等を単位とし、子ども同士の関係や教師と子どもの関係を通じた営みとして考えられている。これはなぜ・いつ学校教育の中に位置づけられたのか。まずこれについて、特別活動の経験を振り返り、学習指導要領を読んで考える。これを踏まえ、特別活動の実践や方法と意義、そしてあるべき姿について考える。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		教育方法論 A (小)	「教職に関する科目（教育課程及び指導法に関する科目）」である「教育方法論」では、小学校教師に必要な教育方法に関する基本概念を形成する。この授業では、学習を支援するためのコミュニケーションのあり方、子どもたちの関係づくりのための方法、授業を分析し実践をしていくための方法（情報機器・教材の活用を含む）について学習する。その際、これら教育関係、子ども集団の指導、授業分析・実践の方法について、具体的な実践事例を検討する活動に取り組む。	
		生徒指導論（進路指導を含む。）	児童期と青年期における生徒指導及び進路指導の理論と方法を講義する。講義を通して、生徒指導及び進路指導の基本的概念や考え方を形成する。その上で、現代社会と家庭の変化の中で困難に立ち向かいつつ生きる児童・生徒の「自分づくり」を援助する方途、及び、今日の進路指導の実践について展開する。事例をもとに、 （1）非行、校内暴力、いじめ、不登校などの問題行動の実践、 （2）その基底にある問題の克服過程、（3）個々の児童・生徒が、希望を持って、人生を設計し、進路を切り拓いていくための支援なども検討する。	
		教育相談	子どもの問題行動は傷ついた心のSOSであり、そうしたSOSが満ちあふれている現代は、教育現場でさまざまな心の問題に対応しなければならない機会が増えてきている。本講では子どもの問題行動について、その心理の理解と対応の仕方、保護者や他の専門領域との連携の仕方、教師自身のメンタルヘルスなど、教育現場で問題行動を示す子どもの心を支援するためのさまざまな問題について心理臨床の立場から実践的な理解を深める。	
		教職実践演習 (小・幼)	（概要） 「教職に関する科目」である「教職実践演習」では、（1）教師としての使命感や責任感・教育的愛情、（2）教師としての社会性や対人関係能力、（3）子ども理解や子どもたちの関係づくりの方法、（4）教科等の指導力をテーマとしながら、教師として必要な資質能力を自己評価しつつ、養成段階におけるその最終的な形成を目指す。この演習では、上記（1）から（4）のテーマに即して、これまでの学修をふり返り統合しつつ、必要に応じて補足的な学習を行う。その際、「教師としての使命感」等についての講話の聴取、事例の検討、ロールプレイング、グループ討議、模擬授業、学校におけるフィールドワーク、現職教員との対話等の活動に取り組む。 （13 藤原 顕）事例の検討・ロールプレイング・グループ討議・模擬授業の指導、学校におけるフィールドワークの引率指導 （101 濱原 泉）「教師としての使命感」等についての講話、上記事例の検討等の指導補助、学校におけるフィールドワークの引率指導補助	共同で担当
		英語活動論	小学校学習指導要領で5・6年生での「外国語（英語）活動」の時間が新設されたことを受け、その時間の目標や内容について系統的に理解すると同時に、小学校教育現場での実践に役立つような具体的な教材を通して、英語活動の指導のあり方について学ぶ。加えて、英語の音声や基本的な表現等、指導に必要な知識や技能を身につけ、英語を通じて日本や外国の言語や文化に関心を持ち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養う活動を編成し指導する技術を習得する。	
		科学実験法	科学的な知識や背景の修得には、机上で理論を学ぶことも大切だが、同時に、実験や実習を体験しながら科学の本質に迫る必要がある。この授業では小学校段階で教えるべき単元項目の中でも本質的かつ簡単な実験や実習を行いながら、理科実験の方法や器材の取扱の基礎基本を学び、将来児童を対象に自信をもって指導できるようノウハウを修得するのが第一の目標である。また古くから教科書に採用されているような古典的な実験については、科学史上の経過や位置づけについて学び、個々の実験がもつ意味や価値についても学ぶ。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		心理学実験演習	(概要) 心理学の実証的アプローチ（実験法、観察法、内観法、検査法、統計）の基本を学ぶ。受講生は自ら実験者および実験参加者（被験者）となって実習を行い、目的、手続き、資料の収集と分析、結果の整理と考察から構成される心理学研究の基本的な流れを体得すると同時に、それらを文章化してレポートにまとめる。特に、レポート作成についてはデータ分析と添削の指導を受けて執筆要領についての理解を深める。 (オムニバス方式／全30回) (9 廣重 佳治／10回) 視知覚の錯視、学習の転移、意識水準と脳波記録の実験及びレポート作成指導を行う。 (26 高澤 健司／10回) 性格検査と心理尺度の構成、社会的行動の観察及びレポート作成指導を行う。 (27 田中 浩司／10回) 遊びの観察、インタビュー分析及びレポート作成指導を行う。	オムニバス方式
		子どもと法律	教育・福祉に関するものは、法律を土台・柱とする、子どもに関する制度の大枠を理解していなければならない。同時に、(1) 教育・福祉の対象者である「子どもの人権」についての深い理解と感覚をもつこと、(2) 日々の仕事を遂行するなかで出会うところの、子ども・子どもの周りにおいて起きうるさまざまな問題に対処するために、自らがどのような法的役割を与えられているのか、を知っていなければならない。この授業は、事例を題材にしつつ、以上の目的をもって行うものである。	
		教育統計	教育現場や心理学研究において用いる統計についての基礎的な知識や方法を身につけるとともに、統計を通して現代における教育上の問題に対する科学的・客観的視点を養うことをテーマとする。 平均値や相関といった教育現場や心理学研究で必要とされる統計に関する基礎的な知識を身につけるとともに、t検定や分散分析などの適切な統計手段の選択や、実際において統計ソフトなどを用いた統計分析の方法を身につけることを到達目標とする。	
	保育学関連科目	社会福祉	児童福祉を考えるにあたり、その基盤となる社会福祉をどのようにとらえるか、福祉サービスを必要とする人たちの暮らしに対して社会福祉がどのような役割を果たしているのかを学ぶ。海外と日本の福祉の歴史を学び、どのように現在の社会福祉の思想や制度ができあがってきたか理解を深める。社会福祉制度の全体像を構造的、歴史的にとらえ、社会福祉制度の概要を理解する。児童、障害、高齢者等の各分野の福祉の概要を理解し、現状と課題を視聴覚教材を取り入れながら把握する。また、社会福祉の基盤としての所得、医療、雇用等の社会保障制度の概要を把握する。	
		社会福祉援助技術	社会福祉で学んだ社会福祉学の基本理念を保育所や児童養護施設、障害児施設等での日々の実践場面で活かしていくため、子供や家族のニーズに応じた福祉的支援の方法と技術を学ぶ。社会福祉援助活動の原則を踏まえ、対人サービスの基本となるコミュニケーションや人間関係形成などの方法を学び、実践的な力をつける。専門的援助関係を築く上で重要となるコミュニケーション技法や受容、傾聴、共感的理解等についての演習を行い、基礎的な援助技術を習得する。そして児童福祉の専門家として、地域の児童福祉の向上にも貢献する視点とそのための力量を養うため、育児相談や保護者懇談会、地域支援等の場面を設定して演習を行う。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
			児童福祉論	(概要) まず、現代社会の子どもと家庭の現状を理解する。そして、子どもの権利擁護の歴史と児童の権利条約の内容を理解して子どもの最善の利益の保障の意義と責務について考察する。そして子ども家庭福祉の法律、実施体制、サービスの概要を理解する。さらに、健全育成、子育て支援、養護問題、ひとり親家庭問題、障害児支援、非行の問題、母子保健の問題などの個別の問題について考察し、これからの子ども家庭福祉の課題を展望する。 (オムニバス方式／全15回) (12 高橋 実 /11回) 現代社会の子どもと家庭、子ども家庭福祉のしくみ、児童福祉サービスの現状と課題、次世代育成の現状と課題、保育所・子育て支援の現状と課題、養護問題の現状と課題、母子保健、障害児・家族支援の現状と課題、これからの子ども家庭福祉の展望と課題 (77 森田 明美/4回) 子どもの権利と子ども家庭福祉のあゆみ、児童の権利に関する条約の意義と特徴、児童の権利条約を実現する取り組み、ひとり親家庭支援の現状と課題	オムニバス方式
			保育原理Ⅰ	保育の学習・研究の第一歩として、保育に関する基本的な知識や考え方を学ぶことが、本講義のテーマである。具体的には、次のことを目標とする。 (1) 保育の本質・目的(保育とはどういうことか)を理解する。 (2) 現在の保育・子ども(とくに乳幼児)をめぐる社会的状況を理解する。 (3) 現代保育の実践的課題の基本(保育実践の内容・方法の原理など)について理解する。	
			保育原理Ⅱ	保育の本質や乳幼児の生活の特質について理解し、乳幼児の保育のあり方について考える。そして、歴史的観点から、日本の幼児教育・保育の実践と諸理論について学び、現在の保育所保育指針および幼稚園教育要領について理解を深める。さらに、現代社会における保育の諸問題を明確にし、今保育現場に求められている保育実践(内容・方法)について具体的に考え、保育ニーズと新たな取り組みについて理解を深める。	
			養護原理	(1) 児童養護の概念と児童を育む家庭の役割、(2) 社会的養護が必要となる養護問題の現状とその背景、児童養護の体系：家庭、施設、里親、(3) 児童養護の歴史と理論の流れ、(4) 施設養護の特質と基本原理、(5) 施設養護の実践：日常生活と自立支援、治療的支援、家族支援、(6) 児童福祉に携わる援助者としての資質、役割、専門性とその向上等について学び、児童観、施設養護観確立に向けて努力する。	
			小児保健Ⅰ	小児保健は、子どもたちの心身の健康を保持し、増進するための分野で、保育活動のなかで重要な基本のひとつである。この講義では、小児の発育・発達、生理、運動機能、栄養、生活をはじめ新生児、思春期、母子保健、学校保健、障害児保育などについて必要な知識と理解を深める。そして、発育、発達途上の小児の健康を守り、乳幼児が、健康・安全に生活できる保育所・幼稚園の在り方及び保育者としての役割を認識する。	
			小児保健Ⅱ	小児保健は、子どもたちの心身の健康を保持し増進するための分野で、保育活動のなかで重要な基本のひとつである。この講義では、小児保健Ⅰで学んだ子どもの発育・発達の知識をもとに、分野別の小児科疾患、事故、予防接種、感染症、発達障害、児童虐待などについて、必要な医学的知識と理解を深めるとともに、それぞれの対応や援助の方法だけではなく、予防策や家庭、地域社会、関係機関との連携についても考える。	
			小児保健実習	「小児保健」で学習した「子ども」の基本的特性としての成長・発達の過程と、心身の特徴の理解のもとに、日常の保育の場において、心身の順調な発育・発達を促すために適切な援助ができるよう必要な養護の知識と技術の習得を目指す。 必要な養護の知識と技術の習得とは、健康状態の把握、異常の早期発見、疾病予防及び救急処置、事故防止及び安全教育、看護などである。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		小児栄養Ⅰ	乳児期は心と体の健やかな発育に最も重要な時期である。栄養はその身体発育の材料となり、食生活は健全な精神発達に影響する。そこで講義では小児の発育・発達状況をとらえた上で、発達段階別の栄養の特徴、食生活の実践を学ぶ。さらに、各発達段階に応じた食指導のあり方や、健康と食の関係などを学んでいく。 また、平成17年食育基本法が施行され、保育所での「食を営む力」の育成を目標としている中、保育現場での食教育に対応できる力を養う。	
		小児栄養Ⅱ	小児栄養Ⅰで学習した栄養学の基礎的知識をもとに、小児栄養Ⅱでは保育者としての立場や役割を理解し、食指導と食を提供できる実践力を養う。小児の食事では調理形態、栄養配分、食習慣や嗜好の観点から、発達段階に合わせたよりよい食環境の定着をはかることが重要になる。子供達の生活は保育者や養育者の認識に大きく影響される。そのため保育士を目指す学生は自身の食生活の重要性を理解した上で、子供達のよりよい「食」の力を育む能力を実習によって身につけていく。	
		精神保健	心の健康を保つための知識を広く学ぶ。具体的には乳幼児期の精神発達、問題行動、社会的問題、障害を持つ子どもの心理等について理解を深めると同時に、保護者の精神保健についても考える。また、実際の保育・療育場面での事例を多く取り上げ、将来現場に出たときに保育士として、どのように子どもや保護者の課題を見極め、どのように援助していくべきかを常に自問しながら講義に望むことで、より実践的な力を身につけていくことを目的とする。	
		保育内容（健康）	成長の著しい乳幼児期は、一生の健康の基礎を形作る大切な時期であることを踏まえ、保育者として、子どもの発育・発達や運動・安全に関する基礎的知識や基本的態度を習得する。 特に、幼稚園教育要領や保育所保育指針の示す保育内容・健康の位置付け、目標・ねらいや内容をよく理解し、心身の発達と運動、生活習慣の形成に関する知識を得る。 また、運動遊びや体育的行事における具体的な指導・援助の方法、保育環境の安全管理、遊びや生活における安全指導の内容・方法について具体的に演習する。	
		保育内容（人間関係）	（概要） 「ヒト」は人と人との間の豊かな関わりがもてるようになって、初めて「人間」となる。これまで、家庭や地域社会がそのような役割を担ってきたが、今では保育所や幼稚園といった集団保育の場が重要な役割を担うようになった。保育者は、子どもだけでなく、保護者や地域社会と深くつながりながら、子ども達を育てなくてはならない。 本授業では、人と人との深く結びつき、豊かな関わりが持てるように援助する、保育の専門職として必要な知識を学ぶ。 （オムニバス方式／全15回） （27 田中 浩司／10回） 「人間関係の科目の位置づけ」、「人との関わりを育む保育者の役割」、「遊びの中で育つ人との関わり」を担当。 （2 渡邊 弘純／5回） 「保育を支える人間関係」を担当。	オムニバス方式
		保育内容（環境）	子どもの教育に身近な環境がいかに大切なものであるかを、教育の目的から自分の言葉で導き出す。また、子どもにとっての環境とは、どのようなものであるかを、発達を踏まえて、子どもの視点で明らかにする。子どもが、環境に好奇心や探究心を持って関わり、活動に熱中するには、どうすればよいのかを体験しながら発見する。動植物の見方・接し方の基本を、野外で体験的に指導し、観察力を養成する。身近な素材や物を使って実際に遊び、どのような観点が大切なかを整理する。天気、季節、天体などについては、日常的に接し、感じ楽しむ習慣を意図的につける。地域に出かけ、何をどのように見つけ、関わればよいのか、また、保護者・地域の方を活動に巻き込む方法についても実践的に指導する。	
		保育内容（言葉）	乳幼児の言葉の発達過程、言葉の環境について理解するとともに、具体的な保育現場での指導法を学ぶ。保育所保育指針や幼稚園教育要領の「言葉」領域のねらいと内容をよく理解した上で、保育者の言葉かけを中心とした援助や関わり方、児童文化財を活用した援助と関わり方を具体的に学ぶ。領域「言葉」の内容理解はもとより、絵本や紙芝居の選書・選択の視点、読み聞かせやお話の実践法を学び、実際に取り組んでみる。また絵本教材を作成して発表するなど実践の基礎を養い、実習等で活用できる力をつける。	

科目 区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		保育内容 A (表現)	(概要) 豊かな自己表現ができる子を育てるために、保育者として幼児の表現発達段階を理解し、心の動きを柔軟に感じ取り共感できる感性を身につける。学生自身も表現者として、保育現場で豊かなコミュニケーションが図れるような身体技能(姿勢、歩き方、手話など)と表現技術(発声、歌、紙芝居、劇など)を習得する。協同的作業を通じて仲間との連携、報告・連絡・相談・確認といった組織的活動を円滑に進めるための基本的な行動を身につける。相互評価方法と学外実践を活用し、切磋琢磨しながら自身の表現力を向上させる。 (オムニバス方式／全15回) (20 大庭 三枝／9回)身体技能(手話など)、表現技術(発声、歌、紙芝居、劇、模倣など)、リズム表現、表現指導技術と教育技術 (83 片山 啓子／3回)身体技能(姿勢、歩き方)、身体表現の技法、表現創作の技法 (大庭・片山共同／3回)表現技術の構造化による相互評価の実施と講評、集団表現の技法	オムニバス方式
		保育内容 B (表現)	保育者としての感性と表現力を豊かに育て、音楽的視点から子どもの表現活動について指導・援助が行える実践力を修得する。音楽の果たす役割について子どもの日常生活のさまざまな経験から探り、子どもの音楽的発達と成長について理解した上で、子どもたちの自由な表現に共感しともに表現できるいろいろな方途について学ぶ。自己表現の楽しさと他者との協同を同時に経験できるさまざまな音楽表現活動により、子どもの音楽的能力と全人的な発達を考える。	
		保育内容 C (表現)	幼稚園教育要領並びに保育所保育指針における領域「表現」の理解をもとに、幼児の造形表現教育について、次のことを目標として授業を進める。 (1)幼児期の特性を理解し、成長発達の過程を捉えながら、表現の意味や必要性を知り、子どもたちが絵画表現や造形活動において関わる素材についての理解を深めること。 (2)実際に保育の現場で扱われる造形素材体験や、その教材研究を通して、様々な素材・用具の扱いに習熟し、保育者として子どもたちの可能性を十分にのばしてあげられるような実践的援助力を身につけること。	
		乳児保育 I	保育所や乳児院で乳児保育を担当する保育士として必要な理論、知識、技術の基本を学ぶ授業である。とくに「乳児保育 I」の内容は、次の2点に重点を置く。①日本の乳児保育の変遷を知り、乳児を育てる家庭及び保育所を中心とする児童福祉施設の現状を確認しながら、現代社会の実態に即した乳児保育の意義と役割について理解する。②乳児期(3歳未満児)の発達過程を理解した上で、乳児保育に関わる配慮事項についての認識を深める。	
		乳児保育 II	乳児期(3歳未満)の生活と遊びについて理解する。そして、乳児期の発達と保育環境(室内外)について学び、保育内容を構造的に理解する。実際に指導計画を立案し、保育記録を書くことによって、乳児理解や乳児保育実践のあり方について理解を深める。また、実際に手作りおもちゃを製作することによって、乳児の興味関心のある環境を構成することを具体的に学ぶ。さらに、保育を省察・評価することによって保育を構築することの重要性を理解する。	
		障害児保育	障害を持つ子どもについての基礎知識やそれぞれの障害が子どもの発達に及ぼす影響についてまなび、保育上の留意点について学習する。さらに障害を持つ人たちや子どもたちの現状や障害福祉の理念、国際的な動向を学ぶ中で、障害児保育の果たすべき役割や意義について学習していく。また、障害をもつ子どもを持つ家族への支援や関連施設や関連職種との連携についても学んでいく。 保育現場では、「ちょっと気になる子」が増えているといわれている。これらの子供たちを含む、特別なニーズを持つ子どもたちへの適切な対応ができる保育士としての基礎的な学習を進める。	

科目 区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		養護内容	まず、子どもを社会的に養育していく上で保育者に必要な養護方法、養護技術の具体的内容を学習することにより、児童の生活や援助者の援助を理解する。 次に、実践記録を読んだり、ディスカッションの演習を通して、児童の心身の成長や発達を保障し、援助するために必要な知識や技能を習得する。そして児童の権利を保障し、問題を解決できる児童観や社会的養護観を養う。	
		音楽表現活動Ⅰ (基礎)	(概要) 保育者として必要な感性と表現力を豊かにするため、幼児の音楽教材に対する理解を深め、保育者に必要な基礎的音楽能力の修得を図る。 歌唱、ピアノ伴奏・簡易伴奏、音楽理論、音楽あそびについて、幼児の生活における音楽と関わり方や、実際の保育・教育活動の展開に必要な能力を修得する。 ピアノ表現については伴奏としての技術修得を、歌唱については正しい呼吸法と発声法の基礎修得を、ソルフェージュや楽典、音楽あそびについては幼児音楽の理解と教材の展開に向けた能力獲得を目指す。 (オムニバス方式／全15回) (10 村山ひろみ・86 平田弘子共同／8回)歌唱と基礎的音楽表現 (85 佐分利小夜子・87 神古麻弥・88 宮久恵共同／7回)ピアノ個人レッスン	オムニバス方式
		音楽表現活動Ⅱ (応用)	保育者に必要な音楽的能力の獲得とともに、幼児の音楽実践に対応し保育・教育の場で展開できる表現力、実践力を獲得する。 子どもの歌唱教材や音楽あそびの選択や指導についての理解を深め、指導者や指揮者、伴奏者としての立場を経験しながらそれらを実践できる能力を獲得していく。また、幼児の歌唱指導に必要な簡易伴奏や簡単な移調、言葉の持つリズムを応用したボディパーカッションや簡易合奏の実践、さらにピアノを媒介としたストーリー性のある音楽表現を行うことで、子どもの音楽表現活動について学ぶ。	
		音楽表現A (ピアノ)	音楽表現活動Ⅰ(基礎)で習得した音楽表現の技術や知識を生かし、ピアノを媒介とした表現力の向上を目標とする。 (1) 伴奏パートの持つ音楽的な内容を的確に把握し、曲のイメージに合わせて表現を工夫することが出来るようにする。 (2) 保育現場において役立つよう、各自の技術的レベルに応じて、オリジナルのよさを生かした簡易伴奏が弾けるようにする。 (3) 保育者として求められる音楽的感性を養うため、新しく発表された童謡にも目を向け、柔軟な取り組みが出来るようにする。	
		音楽表現B (声楽)	保育・教育の場で展開できる表現力・実践力のうち、特に歌唱について能力を深める。更に歌唱の応用力をも獲得する。 指導者としての歌唱力を身につけるために、一人ひとりが正しい発声法、日本語の明確な発音法・歌唱表現能力を獲得し、歌唱教材を音楽的にも詩の理解においても深く理解できる能力などを身につける。 次に、それらの応用として、コーラスで他者とのコミュニケーションを学ぶ。特にオペレッタの体験を通して、音楽と演劇を総合的に包括する中で、他者を演じる経験を通して、生き物の様子や人間の心の動きなど、命の観察をする能力を養う。	
		図画工作表現活動Ⅰ (基礎)	子どもの柔軟な感性に対応していくためには、保育者の豊富な表現経験が必要である。自らが造形表現について、より多くの技法体験をすることによって、様々な表現材料の的確な扱い方と、保育活動における造形表現援助に必要な基礎技能の習得を目的とする。授業は子どもの感覚を追体験しながら、制作中心に展開する。同時に制作の様子や教材展開の方法、留意点などを記入する《造形ノート》という授業レポートを課し、振り返りの時間を設ける。なお、授業での教材については、実際に保育場面で活用できるような、実践的なものを取り上げていく。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		図画工作表現活動Ⅱ（応用）	『図画工作表現活動Ⅰ（基礎）』での内容をふまえて、本授業では保育者としての、造形表現技能の発展的な習得を目標とする。保育実習等で役立つよう想定した絵画表現による紙芝居の共同制作と、構成計画のみならず、実際の壁面を使用して行う壁面構成などを中心に授業展開をする。制作の様子や留意点などを記入する《造形ノート》という授業レポートも同時に課し、これらの課題制作とその発表を通して、共同で作り上げる楽しさを体験すると共に、実践的な保育現場での造形表現力が身につくようにする。	
		運動・身体表現活動Ⅰ（基礎）	身体運動の基本となる姿勢・歩き方など生活動作の正しい形を身につける。幼児の発育・発達に応じた様々なオリジナル運動・身体表現あそび教材を実践し、季節や年間行事等を反映した教材展開と教材開発、具体的な指導・援助の方法を習得する。また、身近な素材からあそびを発展させる工夫（ペットボトルから「カッチンくん」）や地域の伝統芸能活用法（二上りリズム）を学ぶ。運動あそび指導技術を構造化した相互評価方法や学外実践を活用し、学生相互が切磋琢磨しながら主体的・協同的問題解決スキルを向上させる。	
		運動・身体表現活動Ⅱ（応用）	幼児の心身の総合的な発達に寄与する発展した運動・表現あそびについて、発達段階や運動要素に応じて学習し、小学校との接続を見通した運動・表現活動を保育に織り込む技術および、子どもが主体的に取り組むための適切な指導や環境作りができる保育構想力を身につける。豊かに自己表現ができ運動が大好きな子を育て、体を使って遊ぶ力を子どもたちに保障するための保育・教育技術を習得する。相互評価方法や学外実践を活用し、学生相互が切磋琢磨しながら主体的・協同的問題解決スキルを向上させる。	
		保育・教職実践演習（幼）	（概要） 個々の学生が作成してきた「履修カルテ」により、これまでの学習全体を振り返り、討議するとともに、教職の意義、人間関係、幼児理解、学級経営、保育内容の指導力などのテーマで事例検討、討議をして理解を深める。そして、小学校の生活科の授業を見学し、幼・小の連携のあり方についても考察する。さらに、市教育委員会及び市内幼稚園・保育所の協力の下、地域に開かれた保育実践をするために、地域を題材として研究・開発した教材を作成する。そして、その教材に基づいた指導計画を立案して、学生たちが協働して保育実践を行うことにより、現場に出て通用する多様な教育実践力を養う。 （１１ 秋川 陽一） これまでの学修の振り返り、教職の意義、学級経営についての講義とグループ討議、小学校見学の引率 （１０２ 青江 知子） 幼児理解、保育内容の指導力、地域に開かれた保育実践の講義とグループ討議の補助および小学校見学実施計画における補助 （１０３ 岡崎 眞智子） 幼児理解、保育内容の指導力、地域に開かれた保育実践の講義とグループ討議の補助および小学校見学の実施計画における補助	共同で担当
		保育者論	保育実践の成否が「保育者の力量」に大きく左右されることは言うまでもない。この「保育者の力量」という場合、個々の保育者の力量と同時に、組織としての保育者集団の力量も含まれる。本講義では、この両側面から「保育者の力量」を高める基盤づくりをテーマとし、次の３つの目標を設定する。 （１）保育職の意義・役割を理解する。 （２）保育者の職務内容および教員組織等について理解を深める。 （３）保育職への進路選択に資する最新情報等も適宜提供する。	
		教育課程論Ｂ（幼・保）	教育課程を歴史的流れの中で捉めることによって、今求められている保育について考える。幼稚園・保育所において計画を立てることの意義と必要性について学び、教育課程編成や指導計画立案について理解し、教育課程・保育課程の意義および基本概念について理解を深める。さらに、実際に指導計画を立案することによって、幼児にとっての効果的な保育活動展開について研究し、創意工夫して教育課程を編成する資質を養う。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
			乳幼児心理学	(概要) 子どもの心に寄り添う保育・教育を行うためには、子どもの育ちの過程を理解することが重要である。何気ない子どもの仕草やつぶやきには、子どもの育ちへの願いが込められている。 本講義では、乳幼児期の発達の標準的な道筋を学ぶだけでなく、発達障害を含めた育ちの個人差に触れながら、このような発達を保障するための保育士の役割についても考える。 (オムニバス方式／全15回) (27 田中 浩司／10回) 発達の原理と幼児期を担当。 (65 田丸 尚美／5回) 乳児期を担当。	オムニバス方式
			青年心理学	生涯発達の視点から青年期を概観し、現代の社会環境の中で生きる青年を客観的視点で検討することをテーマとする。 生涯における青年期の位置づけと意味を理解し、現代の環境が青年の発達に及ぼす影響を客観的にとらえるとともに、自身の自己形成への具体的な道筋を検討できるようになることを目的とする。 学生自身の経験や近年において注目されている事例といった具体例を用いながら理解を深める。	
			保育臨床相談	(概要) 今日の保育現場では、発達障害や虐待を始めとする、困難を抱えた子どもとその保護者への対応が大きな課題となっている。保育者は、子どもへの対応だけでなく、保護者の相談、専門機関との連携など、幅の広い援助が求められる。 保育臨床相談の授業では、保育・幼児教育の専門家として、これらの問題のとらえ方、解決の方法を見出すための基礎を学ぶ。 (オムニバス方式／全15回) (27 田中 浩司／10回) 保育現場での問題及び相談の方法について担当。 (65 田丸 尚美／5回) 相談の背景について担当	オムニバス方式
			幼児の理解と発達相談	幼児の発達についての基本的理解をベースに、個々の育ちの場でその発達を保障し生活への適応をはかるための実践的なスキルを身につけることを目標とする。発達をアセスメントするという観点から発達理論について捉えなおした上で、診断論・相談論について学ぶ。 障害や発達上の困難を抱えた子どもを育てる親の気かりや悩みをどう受けとめどう応えていくか、その保育を担当する担任はじめ保育者達の実践上の困難にどう関わっていくか、事例に則して学び、そのスキルを身につけることを目指す。	
			教育方法論B(幼)	現代的な幼児教育における教育課題について理解を深めながら、保育者の専門性とその倫理・知識技術の内実について理解する。それらの知識を基礎としながら、幼児教育実践を構成する「目的」と「方法」と「内容」の関係について理解を深め、子ども達が乳幼児期に経験することが望まれる「心情」・「意欲」・「態度」をどのように主体的な経験として実現することができるか、その指導・援助の方法について考察する。さらに、教材研究の方法と指導計画への実現についての基礎能力を培うことを目的とする。	
			自然環境の観察法	この講義では、野外観察が含まれる単元を指導するための基礎知識を身につける。身近な自然の構成要素は地域によって異なるので、教員及び保育士自らが自然を調査し、地域の自然を把握したうえで教材を作成しなければならない。そこで本講義では、地形・地質・植生の基礎知識とともに、地形図・地質図・植生図や衛星画像から自然の情報を読み取る方法を学ぶ。次に、地図上の作業結果を元にして、実際に野外にでて野外実習を行う。野外実習は土日を利用して、福山市近郊で実施する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		保育教材研究	(概要) 日々の生活の中で特に衣生活に着目し、様々な衣服や素材に関心・興味を持ち、保育者が身近な教材として利用できるような基礎力を養う。また、乳幼児が健康で気持ちよく過ごせるような衣生活に関する知識・技術を習得する。 (オムニバス方式／全15回) (90 筒井 由紀子／8回) 衣服の素材・保育教材づくり (91 山本 百合子／7回) 衣服の役割・保育教材づくり	オムニバス方式
		食育研究	(概要) 乳幼児期は、さまざまな体験をとおして豊かな人間性をはぐくみ、健康な心と体を育て、「生きる力」を身につける重要な時期であり、特に食育は重要である。そこで、保育所における食育に関する指針を基本に、食の原理、栄養、安全性、食育レシピ、これからの食育の分野、ライフステージ別、文化、いのちの育ち、保育ニーズの分野、健康、人間関係、料理と食、給食、実践例の分野を取り上げ、共に考える。 (オムニバス方式／全15回) (92 三谷 璋子／5回) 食の原理、栄養、安全性、食育レシピ、これからの食育の分野 (93 倉田 美恵／5回) ライフステージ別、文化、いのちの育ち、保育ニーズの分野 (94 土屋 房江／5回) 健康、人間関係、料理と食、給食、実践例の分野	オムニバス方式
	特別支援教育関連科目	特別支援教育総論	2007(平成19)年度に始まった日本の新しい障害児教育制度である特別支援教育の理念は、それまでの特殊教育制度の問題点を認識し解消するとともに、発達障害に対する新しい教育的ニーズにも対応するために、特殊教育の長所を継承するだけでなく、新しい仕組みを立案・実施しつつある。この授業では、障害児の教育が直面してきた歴史的経緯、特別支援教育の国際的な位置、通常教育との関係等と関連させながら特別支援教育制度への転換の全体像を把握したうえで、実際の特別支援教育の状況と対照させながら、特別支援教育の意義・可能性・制約を理解する。	
		知的障害者の心理・生理・病理	(概要) 脳の構造と機能についての概要を基礎に、知的障害の心理・生理・病理の特性について概説し、その基本的な支援方法について考えていく。また、知的障害を伴う自閉症の特性とその特性に応じた基本的な支援方法に言及し、知的障害の理解をより深める。 (オムニバス方式／全15回) (9 廣重 佳治／5回) 脳の構造と機能、知的障害の生理特性を概説する。 (22 今中 博章／5回) 知的障害、自閉症の心理特性と支援法を概説する。 (79 村尾 正治／5回) 知的障害、自閉症の病理特性と支援法を概説する。	オムニバス方式
		肢体不自由者の心理	肢体不自由心理の内容に加えて、肢体不自由生理・病理の基礎知識を学習することを目的とする。 姿勢の発達段階と各姿勢の特徴、運動発達の方向性、姿勢運動の障害の様相、姿勢反射反応の成熟に関する三段階とその障害、中枢神経系の成熟とその障害、姿勢運動を支える感覚系として前庭覚と姿勢運動との関係とその障害及び脳性まひの各類型における姿勢運動障害の様相について講義する。視聴覚機器や体験実習を活用して理解を深める。	
		肢体不自由者の生理・病理	毎回資料やスライド・ビデオなどを使用し、表層理解に留まらないように工夫しつつ、中枢神経系のしくみや発達の基本的知識を学び、中枢性運動障害(とくに脳性マヒ)の病態や症状を理解する。また肢体不自由の原因となる先天性運動器疾患(とくに進行性筋ジストロフィー症)や後天性運動器疾患(外傷・脳炎脳症など)およびよくみられる併存・合併症についても学習し、障害をもつ病弱者に適切な支援ができる教員の資質を養う。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		病弱者の心理	健康の概念や病弱の障害としての構造、疾患や療養生活が与える心理的影響、具体的な心理的支援・配慮について概説し、病弱の子ども一人ひとりのニーズに応じた適切な指導・支援ができる教員としての資質を培うことを目標とする。具体的には、健康の定義、病者役割行動と患者役割行動、ストレスとコーピング等、健康や病気に関わる主要理論を通して病気の子どもの理解の在り方を学び、子ども一人ひとりの心を支え、育てるという視点から、支援の在り方について考える力を身につける。	
		病弱者の生理・病理	障害のある幼児・児童・生徒について、個々の持てる力を高め、生活や学習上の問題を軽減するための指導及び支援を行うには、小児の発育・発達に関する深い理解と病的状態に対する一定の専門的知識を備えることが望まれる。 従って、特別支援教育に従事するうえで必要になる小児の成長発達および小児期の疾病に関する基礎知識を習得すること、学校での適切な対応について理解することを授業の目標とする。 授業内容は、初期段階で健康小児における各小児期に対応した発育と発達について学び、第二段階で疾病を有する病弱者の生理について理解を進め、更に多岐にわたる小児疾患の病理・病態の要点を疾病ごとに学習する。最終的に、特別支援教育を適切に実践するための臨床的基本知識を習得することを旨とする。	
		障害者発達診断法	(概要) 障害のある子どもの発達を支援するためには発達の観点からの対象理解が必要である。この授業では、知的障害、学習障害、脳性まひなどを含む発達の遅れや偏りを示す子どもを、発達の観点からとらえる方法について、観察法、検査法を中心に講義する。 (オムニバス方式／全15回) (22 今中 博章／8回) 姿勢・運動機能、知覚運動機能の発達診断、知能検査、認知機能検査、社会生活能力検査について講義する。 (21 伊澤 幸洋／7回) 乳幼児の発達診断法、ことばの発達診断法、コミュニケーションの発達診断法、知能検査について講義する。	オムニバス方式
		知的障害者指導論	特別支援学校(知的障害者)の教育課程と授業づくりについて理解することをねらいとして、知的障害教育の教育課程について、領域と教科を合わせた指導、教科別の指導、自立活動の指導などに分けて、指導事例を織り交ぜながら講義する。合わせて、知的障害児(自閉症児、肢体不自由児、病弱児を含む)の指導方法や指導上の留意点、就学指導、進路指導についても説明する。また、受講生には、知的障害児教育における指導のあり方についても考えさせたい。	
		肢体不自由者指導論	肢体不自由者教育の教育課程、自立活動及び指導法について基礎的な事柄を理解することを目的とする。 最初に、肢体不自由教育の教育課程と自立活動について解説する。次に姿勢運動発達指導法として、(1)筋緊張障害への対応、(2)臥位における指導、(3)座位における指導、(4)立位と歩行の指導、(5)食事の指導に関して、指導の理論と実際を取り上げる。(3)及び(4)では、座位から立位への姿勢変換と立位の安定と歩行の指導の実際について取り上げている。実技実習や体験実習を取り入れて理解を深める。	
		病弱者指導論	病弱者(内部障害者)の指導法について、特に幼児期・学齢期・青年期といった発達の視点、及び、本人、きょうだい、家庭といった支援領域に焦点をあてて講義を行う。 内容としては以下の3点に大別される。 (1)心身の健康が失われ、日常生活に支障をきたしている、幼児～成人、及びその周辺の人々に対する、教育・心理的な知見を理解する。 (2)以上の知見を基にした指導・アプローチの基本的方向を、ライフステージ毎に理解する。 (3)具体的なアプローチの方法の基礎について学び、習得する。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
			知的障害者教育課程論	知的障害のある人の教育・社会参加の歴史を概観し、知的障害者の社会的役割価値とそれに伴う教育の変遷を講述する。特に、知的障害のある人に対する生涯にわたる支援の必要性の観点から考えるべき教育的支援の意義と役割を理解してもらう。また、特別支援教育の目的・目標とそれを達成するための教育課程の構成要素を確認し、知的障害の特性に応じた教育内容の組織化と授業における指導方法の実践について講述する。特に、これまでに蓄積されてきた知的障害教育の実践知の分析を通して、知的障害教育におけるカリキュラムの特徴を理解してもらう。	
			障害者の心理・生理・病理	(概要) 視覚・聴覚障害及び発達障害を中心に障害者の心理・生理・病理の特性を概説する。環境情報の獲得や他者とのコミュニケーションを可能にする感覚知覚系、認知・言語系などの諸機能が正常に発達し発揮する過程、それらの障害による発達と生活上の問題点を概説し、基本的な支援方法を考える。 (オムニバス方式／全15回) (9 廣重 佳治／5回) 視覚障害、知的障害の生理特性 (22 今中 博章／5回) 発達障害、知的障害の心理特性と支援法 (21 伊澤 幸洋／5回) 聴覚障害の病理特性と支援法	オムニバス方式
			言語障害指導論	私たちは普段あまり意識することなく言語コミュニケーションを営んで生活している。しかし、その働きは複雑で多様性に富んでいる。従って言語障害も損傷・障害領域によって臨床像が異なる。この授業では、まずいわば完成された言語機能の諸相について理解した後、言語発達過程を概観する。続いて幼児・児童期の代表的な言語障害の特性について理解を深める。各言語障害の要点と指導法に関する基礎知識の習得が目標である。必要に応じ、現在明らかにされつつある脳科学研究の知見にも触れたい。	
			重複障害教育総論	重度・重複障害教育は、学校教育に新しい問題提起をした。それまでの障害児の教育を前提にすると、重度・重複障害は成立しなかったからである。そこで、養護学校義務制成立前の段階における重度・重複障害児教育の前身、学校教育の対象外となった理由を学習することで、重度・重複障害教育の障害児の教育における新しい意義を理解するとともに、実態把握、指導と評価の方法を具体的に学習し、学校教育以外の生活の重要さと学校教育との関連についても学習を深める。	
			発達障害教育総論	LD・ADHD・高機能自閉症等の発達障害のある子どもが充実した学校生活を送るとともに健やかな成長・発達を遂げるためには何らかの配慮が必要であり、それらの子どもは特別支援教育の対象として位置づけられている。この授業では、受講生がLD等の発達障害のある子どもに対する教育的支援について理解するとともに、そのあり方について考えることをねらいとして、発達障害の障害特性を概説したうえで、それらの子どもが示す学習上の困難、発達上の困難、学校生活上の困難およびそれらに対する教育的支援について講義する。	
	発展科目	教育学・保育学	教育史特論	日本の近代学校の成立と展開を外形的な表徴を通して講義する。欧米モデルの近代学校の急速な普及はなぜ可能であったのか。国民国家の確立をめざす学校教育は、いかなる装置を用意したのか。地域の人々は、学校に何を求め、期待したのかを、具体的な事象を通して説明し、現代の学校文化の源流を考える。そのことによって、今日の常識化している学校文化を相対的にみる認識力の形成を目標とする。	
			教育方法特論	「教育方法特論」では、学校教師が教育実践経験の中で形成する実践知に関して理解し、教師の力量形成のあり方について認識を深める。この授業では、教師の実践知に関わって、その個性的・状況依存的な性格、実践の中で経験された出来事に基づく事例の知識という様態、既知の事例を未知の事例へ重ね合わせる活用のあり方、実践経験の語りを通じた形成過程といった諸点について考察する。その際、具体的な実践事例を検討しつつ、教師の実践的知識について解釈する活動に取り組む。	

科目 区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		教育制度特論	1980年代から現在まで、「教育改革」の必要がうたわれ、制度化されてきた。これら「教育改革」は、どのような社会的背景を受け、どのような人・機関・団体（アクター）が、どのようなことを目的に企図して、制度化されたのだろうか？ これを資・史料に基づいてつぶさに検討していくと、アクター間での対立や、綱引きがあった過程が垣間見られる。これらの教育をめぐる「政治」——社会的背景、アクターの抱いた目的、およびアクター間の対立と綱引きの過程——を視野に収めながら、「教育改革」が政策として形成されていく様子を、この授業では分析する。	
		保育実践理論研究特論	世界の幼児教育として、モンテッソーリの理論と保育の実践について学ぶ。日本においては、東京女子高等師範学校附属幼稚園・奈良女子高等師範学校附属幼稚園の保育の実践と倉橋惣三の「誘導保育論」及び森川正雄の「幼稚園の理論」について学ぶ。そして、「石井十次記念愛染園」に繋がる社会福祉事業の一環として、大原孫三郎によって設立された修養教化団体「倉敷さつき会」保育所「若竹の園」について、大原孫三郎の思想と保育所「若竹の園」の保育の実践について学ぶ。さらに、現在の保育現場実践研究を通して、今どのような保育が求められているのかについて考える。	
		保育制度特論	保育制度の基礎的概念、保育法制等についての基礎的な理解を踏まえ、とくに現代日本の保育制度の現状・意義・問題、さらに改革動向について知識を深め、保育実践を支えるマクロな環境としての現代日本の保育制度の諸課題について洞察力を得ることが到達目標である。 なお、ここでは、保育制度の具体的内容として、幼稚園教育制度、保育所保育制度、認定こども園制度、学童保育制度の3つの側面を含むものと捉えておく。	
		保育国際比較特論	本講義は、「世界の幼児教育・保育改革の現状と課題」をテーマとし、比較の視点から、20世紀末から世界各国において急ピッチで取り組み始めている幼児教育・保育の制度改革と質的改善の現状と課題を検討することを目標とする。具体的に、①欧米諸国の幼児教育・保育改革の動向と課題、②アジア諸国における幼児教育・保育改革の動向と課題、③日本における幼児教育・保育改革の動向と課題。という内容を中心に展開する。本講義を通して、21世紀における国際化社会に貢献できる広い視野を持つ専門性のある幼児教育・保育人材の育成を目指す。	
		保育表現研究特論	幼児・児童期における表現あそびは身体発達のみならず、リズムや音感、言語の獲得、関係性の構築といった様々な分野の発達と密接に関連していることを解説する。日本およびフランスを中心とした諸外国の表現あそびを取り上げ、国際比較を行う。様々な生活文化を背景として形成された表現あそびの構造を理解し、保育・教育計画での位置づけ、保育・教育現場への活用や展開方法についても実践的に考察し、その技術を身につける。人間が発達していく上で、原初に現れる表現活動を、持続的に自ら発達させることのできる子どもを育てる視点を養う。	
		産育文化史特論	この授業では、妊娠・出産・子育てをめぐる意識と実態、そこに関わる政策・制度や運動の総体を産育文化ととらえ、その歴史の変遷と社会的な基盤、背景について考察する。その目的は、現代日本で「教育」と呼ばれている事柄を深くとらえ直すことにある。歴史のなかの、教育に関する意外性ある事実に触れ、思わぬ解釈に出会うことによって、固定観念に縛られない自由な発想と、目の前の現象を大きな文脈のなかで理解するために必要な知識の習得を目指す。	
	心理学・発達臨床	発達心理学特論	認識や社会性の発達に関する具体的研究を紹介し、幼児期から児童期、青年期に至る発達過程について理解を深め、発達心理学の現代的課題について講義する。また、学生に研究調査法についての知識と技能を一定程度に修得させるために、学生による問題意識の報告や文献紹介、調査計画の発表の場を設ける。学生の関心に即した初歩的な調査を実施し、倫理規定など心理学がふまえるべき事柄について知識を得るとともに、研究成果の発表の仕方についても学習させる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		生理心理学特論	現代社会は生活リズムが乱れ、不眠の時代と言われる。睡眠への関心は大人から子どもに至るまで、老若男女を問わず高い。本特論は「人はなぜ眠るのか」をテーマに、人の高次の精神活動を支えている睡眠の多様性と可変性および生物リズムに関する科学的知見を心理、行動、生理の角度から解説する。さらに、認知（記憶・言語・随意運動）に関わる高次神経活動に言及し、精神活動の生物学的基礎であるシステムとしての脳のしくみについての理解を深める。映像資料を活用して理解を助ける。	
		青年心理学特論	青年期の発達におけるキャリアの位置づけを概観し、現代における青年期のキャリア発達の問題点について探る。具体的にはフリーターやニートはなぜ問題なのか、学校におけるキャリア教育の問題点、若年層における離職や転職の現状とその意味などについてとりあげる。授業の進行は講義中心であるが、学生自身に自らの経験を振り返ったり、資料検討から問題点を見出させる課題やディスカッションを行うことでより深い理解を促す。	
		教育心理学特論	児童期から思春期・青年期にかけての友人関係は、親子関係とともに、人間形成において重要な位置を占める。この時期の発達ばかりでなく、以後の発達と精神的健康にも大きな影響を与えることが知られている。この授業では、(1) 児童期から思春期・青年期にかけての友人関係の特徴と最近における友人関係の変化、(2) 小学校、中学校、及び高校における友人関係をめぐる問題、(3) 健康な友人関係の展開を支える方途、及び(4) この時期の友人関係が後の発達や精神的健康に与える影響について講義する。	
		臨床心理学特論	心理臨床は、生き難さを感じている人の、心の問題に関わる側面について、臨床心理学の知見に基づいて専門的な援助をしていく営みである。本講では講義とともに、心理テストや面接技法についての疑似的な実習体験をしながら、臨床心理学と心理臨床についてより専門的な理解を深める。(受講生は「教育相談」を受講していることが望ましい。)	
		幼児心理学特論	遊びは子どもの生活の大部分を占めるものであるが、それでいて「遊びとは何か」という実態を捉えることは難しい。これまで、社会学・保育学・心理学といった多様な学術領域において、遊びについての研究が行われているが、その範囲は非常に広範で、捉え方も多様である。本講義では、まず遊びを通して現代の子どもを取り巻く社会環境についての理解を深める。さらに、遊びについての様々な議論に触れながら、遊び研究の方法論を学ぶことを目標とする。	
		特別支援教育・児童福祉		
		障害原理特論	障害に対する見方や障害のある人に対する対処が時代・地域・文化によってどのように異なっていたのか、またその理由は何かを学ぶことにより、現代そして今後の社会において差別と排除を最小限にする手がかりと、教育や福祉において障害の有無を問わず共存できる条件と困難を明らかにする基礎的教養を身につけることを目的とする。障害(者)や心身の差異に対する社会の態度や意思決定に対する考え方を、時間・障害カテゴリー・空間・文化等について縦断的かつ横断的に俯瞰することにより、現代社会において差異にかかわらず共存できる条件と困難を考える。	
		特別支援教育特論	子どもの個性や障害特性に配慮しつつ、個々の子どもの充実した学校生活と健やかな成長・発達を保障していくことが、特別支援教育の課題であるが、それらの保障や様々な学びの体験は、学校生活を共にする級友や教師との関係や対話の質や量によって左右されるのではないだろうか。この授業では、そのような関係性や対話性に関連する文献を講読し、さらに学校フィールドワークを行うことによって、受講生が生徒同士の関係性や対話性、生徒－教師の関係性や対話性に配慮できるようになることを目指す。	
		児童福祉特論	発達に困難をかかえた子どもの生涯発達を見通して、地域のなかで保育・教育・福祉・医療が連携して、子どもやその家族を支えていくという視点を学ぶ。そして子どものライフステージに応じて生じる共通の困難や課題を知り、子どもの権利擁護と生涯にわたる発達保障の立場に立った総合的で長期的な支援の在り方について、具体的な事例を通して学び、個別支援のあり方について考察する。	

科目 区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
	教育・ 保育 内容 研究	言語障害特論	言語発達およびその障害について、観察、言語および心理学的検査を利用した評価から指導法立案までの基礎理論について履修する。主な検査の実施と解釈、指導事例について演習形式で講義を行う。本講義で取り上げる言語障害としては、言語発達遅滞、学習障害（発達性読み書き障害）などを中心とする中枢性の言語障害、検査はWISC-Ⅲ、K-ABCⅡ、ITPAを予定している。各検査の課題と言語・認知機能との関連を理解することと事例の評価と指導案作成までを本講義の到達目標とする。	
		社会福祉特論	近年の児童福祉法の改正では、子育て支援事業の法定化がおこなわれ、要保護児童や要保育児童を対象とした従来の施策から、地域のすべての子どもと家庭を視野に入れた施策へと拡大され、地域での子育て支援の重要性が増している。そこで、フォーマルな福祉サービスと住民参加のインフォーマルなサービスとしての地域の子育て支援の拠点づくりの必要性について理解する。特に福山市内の小地域で福祉活動を進めている組織について理解を深め、地域の住民主体の子育て支援事業の現状と課題を把握する。また、実際に小地域福祉活動に参加して、住民主体の活動に触れる。	
		国語科教育特論	近年児童書の出版はますます盛んになっており、子どもだけでなく大人にも身近な文化財となってきた。歴史分野では時代的な背景、とりわけ政治や経済の動きを意識しつつ、我が国における児童文学の成立と展開過程を学び、現在の子どもの本の到達点と課題についての認識を深める。加えて講読分野では近代から現代にかけて評価されてきた代表的な児童文学作品を読み、これらの作品評価ができるようにするとともに、子どもと文学との出会いについて、学校教育のみにとどまらない広い視野で考えられるようにする。	
		社会科教育特論	社会のグローバル化に伴い、文化的・民族的背景の異なる人々が増大し、日本社会の多民族化が進行している。問題は彼らとどのように共生していくかである。残念ながら、民族的マイノリティーの人々に対する偏見が根強く、しばしば差別事件が相次いでいる。本講義では、どのような外国人が日本社会に住んでいるのか、彼らがどのような状況に置かれているのかを学び、彼らとどのように共存するのかについて考えてみたい。また、ユネスコが提起するE S Dを通して、人権問題や文化多様性について理解を深めたい。	
		算数科教育特論	小学校算数科の教科書の歴史的変遷、特に算術国定教科書、尋常小学算術について述べ現在使われている教科書のありようや、また、諸外国の教科書と新学習指導要領についても紹介する。さらに、コンピュータの教育利用の歴史を紹介するとともに、コンピュータ等を利用した様々な実践例を紹介し、算数・数学の指導法についての在り方を講義する。また、算数科における文化史や算数科学習指導案の書き方や様々な指導案の実践についても提示する。	
		理科教育特論	本講義では、理科を中心にしながらも、できるだけ広い視野をもって理科教育に従事するための基礎的な事項や思索の方法について学ぶのが目標である。小学校の教員こそ、森羅万象の幅広い知識と深い教養を身につけ、本物に触れる多くの経験が、とりわけ必要不可欠である。また、子どものように無垢な知的好奇心をもっていることが迫力のある実践につながっていく。この特論では、地域的な特性を生かす方法や、理科と他教科との隣接領域に属するさまざまな事象を、いかにして生き生きとした教材にするかを学生各自が自らの力で考えていくような、活発な議論をとまなう講義を目指している。	
		音楽教育特論	日本の学校音楽教育は、明治以降、異なる音楽構造をもつ西洋音楽を取り入れて始まった。これが現代の私たちにどのような影響を与えているか、また、これから私たちは音楽をどのように享受し表現していくのかについて、音楽の好みと多種多様な音楽、大量生産される音楽、芸術的価値と商品価値、社会の影響を受ける音楽等の観点からアプローチする。そして、人間の言語や行動と密接な関連をもつ音楽が持つ特質を再認識し、教育における音楽のあり方を考える。	
		絵画造形表現特論	「図画工作表現活動Ⅰ（基礎）」「図画工作表現活動Ⅱ（応用）」及び「教育内容（図画工作科）」での内容をふまえて、本授業では発展的に物語性のある絵画表現と、身近な素材を使った造形表現に対する理解を深める。その過程で教材として展開可能な制作物と、それに必要な表現方法の習得をめざす。鑑賞活動は表現と一体化したものと捉え、鑑賞のための具体的な方法についても理解を深めたい。	講義16時間 演習14時間

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
	実習科目		家庭科教育・生活保育特論	家庭科教育は、21世紀に入って大きく進化した。国際化や環境破壊など、地球規模で大きな転換期にある現在、個人や家族の心と身体と地球にやさしい暮らしとは何だろうか。家庭科教育の4つの柱である、家庭生活と家族、日常の食事と調理の基礎、快適な衣服と住まい、身近な消費生活と環境からそれぞれ大学生にも身近なテーマを選び、21世紀に求められている個人や家族の心と身体と地球を大切に暮らしかたについて概説するとともに、家庭科の特色である参加型学習により実践も行う。	
			小学校教育実習 事前事後指導	(概要) 「教職に関する科目」である「小学校教育実習事前事後指導」では、小学校教育実習へ向けての構えの形成、実習の目的の理解、及び実習後の教育実践体験の省察が目標となる。事前指導では、小学校教育実習要項に基づいて、実習への構え等学校の教育活動に関わる際に求められる規範と、子ども理解等実習中の種々の体験を通して認識すべき内容について学習する。また、事後指導では、実習における教育実践体験の省察を通して、教師としての資質能力形成における今後の課題を明確化していく。 (13 藤原 顕) 実習への構え・組織としての学校・子ども理解の方法・学級経営のあり方・特別活動に関する事例検討の指導、実習経験のふり返りの指導 (101 濱原 泉) 実習への構え・組織としての学校・子ども理解の方法・学級経営のあり方・特別活動についての講話、実習経験のふり返りの指導補助	共同で担当
			小学校教育実習	(概要) 「教職に関する科目」である「小学校教育実習」では、小学校における教育実践体験を通して、小学校教諭に求められる資質能力を形成する。この実習では、学校全体、学年、学級での様々な教育活動に関わる中で、教師としての使命感や責任感・教育的愛情、社会性や対人関係能力、児童理解、教科等の指導力について体験的に認識を深める。同時に、そうした教育実践体験を、実習の過程の中でふり返ることを通して、教師としての資質能力を確認していく。 (13 藤原 顕) 学部教員による各実習校での巡回指導コーディネート (101 濱原 泉) 各実習校との連絡・調整、巡回指導結果の報告を受けた各実習生の状況集約	共同で担当
			幼稚園教育実習 事前事後指導A	(概要) 事前指導においては、幼稚園での実習の目的や意義及び実施方法を具体的に学ぶとともに、望ましい実習の準備や態度を系統的に養う。そして、主体的・効果的に実習を行うための基本知識の習得と心構えを養成する。事後指導においては、実習中に会った諸問題について発表・討議することによって、今後の幼児教育の場での実践への理解を深めるとともに、実習における実習体験を省察することを通して、教師としての実践的知識を明確にする。 (8 高月 教恵) 授業計画を立て、全体的に学生に指導する。 (102 青江 知子) 実習先の配属、実習先事前訪問、指導計画の立案や実習の不安や悩みなどに、個別に対応し、指導する。実習後の発表・討議に参加し、担当教員とともに、学生の問題解決への糸口を探る。	共同で担当

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	幼稚園教育実習 事前事後指導 B	(概要) 事前指導においては、参加・指導実習を効果的に行うための基本知識の習得と心構えの養成、および課題を明確にする。また、実際の指導案作成の方法について具体的に学ぶ。事後指導においては、実習における実習体験を省察することを通して、幼稚園教員としての実践力の基本の習得がどこまでできたかを確認し、さらに自らの今後の学習課題を明らかにした上で、その課題解決に向けての具体的な取り組み方を考える。 (11 秋川 陽一) 実習全体の意義、実習手続き、実習への構え、実習における課題設定、および実習後の反省会における実習経験の振り返りの指導 (102 青江 知子) 実習への構え、指導案（部分指導実習・総合指導実習）の書き方、教材作成、実習後の反省会における実習経験の振り返りの指導等の補助	共同で担当
	幼稚園教育実習 I	(概要) 観察実習を通して、幼児理解を深め、幼稚園における指導の具体的な方法や内容を理解し、習得する。さらに、幼稚園の学級経営や教師の仕事についても理解する。 観察実習では、子どもの活動の邪魔にならないように配慮して、メモをとる。子どもの登園前は助手として日直の仕事に参加する。降園後は担当教師の環境構成の手伝いをし、その後、大学担当教員を交えて幼稚園担当教師と一緒に、その日の保育や子どものことについて話し合い、理解を深める。さらに、日々の子どもの観察記録や日誌を作成し、省察する。 (8 高月 教恵) 観察実習に学生とともに参加し、幼稚園担任教師とともに反省会に参加する。実習後は、学生の質問や悩みに対応し、指導する。 (102 青江 知子) 実習担当者とともに観察実習、反省会に参加し、実習後は個別に学生に対応し、指導する。	共同で担当
	幼稚園教育実習 II A	(概要) 保育コースの学生の実習科目として、2年次に履修する「幼稚園教育実習 I」を踏まえ、主に幼稚園における参加・指導実習を通して、幼児を理解する力、幼児に共感し受容する力をさらに深め、幼稚園における指導の実践、具体的な方法や内容、さらには幼稚園教育の役割・使命、学級経営、幼稚園教員の職務内容やチームワークなど幼稚園教育の全体を理解し、幼稚園教員としての教育実践力の基本を習得する。 (11 秋川 陽一) 実習全体の計画立案、学部教員による各実習園での巡回指導のコーディネート (102 青江 知子) 各実習校との連絡・調整、巡回指導結果の報告を受けた各実習生の状況集約	共同で担当
	幼稚園教育実習 II B	(概要) 教育コースの学生の実習科目として、幼稚園における参加・指導実習を通して、幼児を理解する力、幼児に共感し受容する力をさらに深め、幼稚園における指導の実践、具体的な方法や内容、さらには幼稚園教育の役割・使命、学級経営、幼稚園教員の職務内容やチームワークなど幼稚園教育の全体を理解し、幼小の連携・協力の在り方を踏まえた教育実践力の基礎を習得する。 (11 秋川 陽一) 実習全体の計画立案、学部教員による各実習園での巡回指導のコーディネート (102 青江 知子) 各実習校との連絡・調整、巡回指導結果の報告を受けた各実習生の状況集約	共同で担当

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	保育実習事前事後指導	(概要) 本授業は、保育実習Ⅰ（保育所）・保育実習Ⅰ（施設）・保育実習Ⅱ・保育実習Ⅲに関わる指導により構成されている。事前指導においては、保育所及び施設での実習の目的や意義および実施方法を具体的に学ぶとともに、望ましい実習の準備や態度を系統的に養う。そして、主体的・効果的に実習を行うための基本知識の習得と心構えの養成、及び課題を明確にする。事後指導においては、実習後、実習中に会った諸問題について発表・討議することによって、今後の保育の場での実践への理解を深めるとともに、実習における実習体験を省察することを通して、保育士としての実践的知識を明確にする。 (オムニバス方式／全16回) (8 高月 教恵／8回) 保育実習Ⅰ（保育所）、保育実習Ⅱの事前事後指導の授業計画を立て、全体的に学生に指導する。 (12 高橋 実／8回) 保育実習Ⅰ（施設）、保育実習Ⅲの事前事後指導の授業計画を立て、全体的に学生に指導する。 (103 岡崎 眞智子／16回) 実習先の配属、実習先事前訪問、指導計画の立案や実習の不安や悩みなどに、個別に対応し、指導する。実習後の発表・討議に参加し、担当教員とともに、学生の問題解決への糸口を探る。	オムニバス方式 共同で担当
	保育実習Ⅰ（保育所）	(概要) 保育所で実際に乳幼児に触れるという体験を通して、乳幼児について理解を深め、保育所の役割や保育士の職務内容について理解する。さらに、参加実習や部分実習を体験することによって、実践的、専門的な知識と技術を習得する。 (24 吉長（丸山） 真子) 実習及び巡回指導の全体計画の立案と運営、学生への総合的な指導 (103 岡崎 眞智子) 各実習保育所との連絡・調整、巡回指導結果の報告を受けた各実習生の状況集約	共同で担当
	保育実習Ⅰ（施設）	(概要) 居住型の児童福祉施設の社会的役割、職務内容、児童とのかかわり方、集団、個別の指導方法、職員同士の連携、協同のあり方等について、実地の体験を通して理解する。そして児童の生活支援に関する知識と技能を身につけ、社会的養護に携わる保育士としての自覚や態度を育成する。 そして職員間の役割分担とチームワークについて理解させるとともに、記録や保護者とのコミュニケーションなどを通して家庭・地域社会を理解させ、子どもの最善の利益や保育士としての職業倫理を理解する。 (12 高橋 実) 実習見廻り等を通して実習施設での児童とのかかわり方、指導方法、職員同士の連携などを体験的に理解させる。 (103 岡崎 眞智子) 実習時間、実習時の日誌や諸手続きの確認、出席簿や評価表の整理、遅刻や早退、欠席状況の確認、補充依頼などについて学生と連絡を取って調整する。	共同で担当
	保育実習Ⅱ	(概要) 保育実習Ⅰ（保育所）での実習を踏まえ、保育所で実際に乳幼児と共に生活することによって、乳幼児についての理解を深め、保育活動についても総合的に理解する。さらに、実際に乳幼児の活動を展開させていく実習を重ね、実践的・専門的な保育知識や技術を習得する。 (24 吉長（丸山） 真子) 実習及び巡回指導の全体計画の立案と運営、学生への総合的な指導 (103 岡崎 眞智子) 各実習保育所との連絡・調整、巡回指導結果の報告を受けた各実習生の状況集約	共同で担当

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	保育実習Ⅲ	(概要) 保育所以外の児童福祉施設や社会福祉施設の養護を実践し、保育士として必要な資質・能力・技術を習得する。そして家庭と地域の生活実態にふれて、子ども家庭福祉ニーズに対する理解力、判断力を養うとともに、子育てを支援するための能力を養う。 そして保育実習Ⅰ（施設）での実習をより発展させて、養護技術を習得するとともに、子どもの個人差や障害についても理解し、子どもの特性にあった援助計画を立て、実践してみる。 また、子どもの家族とのコミュニケーションの方法や地域社会との連携の仕方などについても学ぶ。そのことを通して児童福祉施設等の保育士に求められる資質・能力・技術に照らし合わせて自己の課題を明確化する。 (12 高橋 実) 実習見廻り等を通して実習施設での児童とのかかわり方、指導方法、職員同士の連携自分なりの発展課題などを体験的に理解させる。 (103 岡崎 眞智子) 実習時間、実習時の日誌や諸手続きの確認、出席簿や評価表の整理、遅刻や早退、欠席状況の確認、補充依頼などについて学生と連絡を取って調整する。	共同で担当
	特別支援学校教育実習	(概要) この科目の内容は、実習事前指導、実習、実習事後指導から構成される。事前指導では実習生各自の実習に対する目的意識の明確化を図る。また、授業および指導の技術や方法、指導案の書き方について説明し、実習に備えるとともに、各自が実習中に体験することを実習の過程で適宜ふり返り、有意義な考察ができるよう授業や指導の評価の観点についても説明する。実習では、各自が、特別支援学校における教育実践体験を通して、教師としての使命感や責任感、社会性や対人関係能力、児童・生徒の実態把握力および指導力について体験的に認識を深めるとともに、それらの向上に努める。事後指導では、互いに実習体験を報告し共有し合うことも含めて、改めて自己の実習体験をふり返りながら、実践家としての省察を促し、教師になるに当たっての今後の自己の課題の明確化を図る。 (22 今中 博章) 事前指導、巡回指導報告の取りまとめ、事後指導（実習報告書） (104 近田谷 正治) 各実習校との連絡・調整、事後指導（実習報告会）	共同で担当

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
演習		(概要) 教育学・保育学における基本概念に関して総論的な理解を深めるため、教育・保育系、心理系、障害・福祉系、内容系の4つの系ごとにテーマを設定し、テーマに関連した文献の講読とレビューを通して探究力の基礎を養うとともに、集団学習の中で議論の方法を習得する。また、自己の教育・保育体験、教育・保育現場での実地体験、フィールドワークの結果を省察・検討し、子どもの成長・発達や、社会における教師や保育士の役割、教職や保育職の責務について考察する。 (教育・保育系：3 森川輝紀，8 高月教恵，11 秋川陽一，13 藤原顕，19 劉郷英，20 大庭三枝，24 吉長（丸山）真子，25 小野方資) 教育・保育の理念，歴史，制度，方法・カリキュラム，国際比較等に関わる基礎的テーマを取り上げる。 (心理系：1 田丸敏高，2 渡邊弘純，6 播磨俊子，9 廣重佳治，26 高澤健司，27 田中浩司) 心理学の観点から教育・保育を探究する。具体的には教育心理学，発達心理学，生理心理学，臨床心理学，青年心理学，幼児心理学に関わる基礎的テーマを取り上げる。 (障害・福祉系：4 中村満紀男，7 八重樫牧子，12 高橋実，21 伊澤幸洋，22 今中博章) 子どもや家庭を支える福祉のあり方や制度，特別支援教育の指導法や評価法，障害の病理への理解に関わる基礎的テーマを取り上げる。 (内容系：5 田淵五十生，10 村山ひろみ，14 正保正恵，15 齋木喜美子，16 渋谷清，17 平松和彦，18 宮本俊光，23 森美智代) 教科教育や保育の諸活動の内容や方法について，授業研究や教材研究，保育の諸活動の観察，子どもを取り巻く文化や社会に関わる基礎的テーマを取り上げる。	共同で担当
	教育専門ゼミ	(概要) 教育学・保育学における基本概念に関して各論的に理解を深めるため、教育・保育系、心理系、障害・福祉系、内容系の4つの系ごとにテーマを設定し、テーマに関連した資料・文献の収集や実験・観察等を行うとともに、フィールドワークや教材研究を通じて、テーマ探求の手法と方法論を習得し、課題探究の実践力を養う。また、教育実習や教育・保育現場での実地体験についての省察レポートを作成し、グループ討議する等の活動にも取り組む。 (教育・保育系：3 森川輝紀，8 高月教恵，11 秋川陽一，13 藤原顕，19 劉郷英，20 大庭三枝，24 吉長（丸山）真子，25 小野方資) 教育・保育の理念，歴史，制度，方法・カリキュラム，国際比較等に関わる専門的テーマを取り上げる。 (心理系：1 田丸敏高，2 渡邊弘純，6 播磨俊子，9 廣重佳治，26 高澤健司，27 田中浩司) 心理学の観点から教育・保育を探究する。具体的には教育心理学，発達心理学，生理心理学，臨床心理学，青年心理学，幼児心理学に関わる専門的テーマを取り上げる。 (障害・福祉系：4 中村満紀男，7 八重樫牧子，12 高橋実，21 伊澤幸洋，22 今中博章) 子どもや家庭を支える福祉のあり方や制度，特別支援教育の指導法や評価法，障害の病理への理解に関わる専門的テーマを取り上げる。 (内容系：5 田淵五十生，10 村山ひろみ，14 正保正恵，15 齋木喜美子，16 渋谷清，17 平松和彦，18 宮本俊光，23 森美智代) 教科教育や保育の諸活動の内容や方法について，授業研究や教材研究，保育の諸活動の観察，子どもを取り巻く文化や社会に関わる専門的テーマを取り上げる。	共同で担当

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		卒業研究のテーマに関連する文献や実践事例の検討レポート、フィールドワークや実験のレポート等を発表しつつ、指導教員との議論や学生相互の議論を通じて、各自の研究テーマへの理解を深めながら研究を深めていく。また、適宜、研究室合同で研究作業の進捗状況について中間発表を行う。また、教育実習や教育・保育現場での実地体験についての省察レポートを作成し、グループ討議する等の活動にも取り組む。	
卒業 研究	卒業研究	学生各自が研究テーマを設定し、指導教員の助言・指導のもとに研究テーマについての研究を進める。1年間を通じて卒業論文の執筆に取り組むが、論文の執筆に当たっては、論文の全体構成を立案するとともに、本文・資料の構成を検討し、論文執筆の基本を学習しながら論文執筆を進めていく。研究成果は、適宜、研究室合同の中間発表会で報告するとともに、最終結果は「卒業論文」にまとめるとともに、卒業研究発表会で発表する。 (1 田丸 敏高) 生涯発達の視点から、それぞれの時期特有の子どもの成長過程を明らかにするとともに、発達に関わる環境要件とりわけ教育について理論的・実証的に考察できるよう指導する。 (2 渡邊 弘純) 教育心理学をテーマとした研究論文の作成を指導する。方法としては、文献研究を行った後、質問紙法、面接法、あるいは観察法によってデータを収集し、これを分析検討して、また、学生相互の討議を組織して、研究論文として練り上げる。 (3 森川 輝紀) 各自の課題意識に基づく研究テーマを取り上げ、主として歴史的なアプローチによる研究論文の作成を指導する。先行研究の整理と史料調査と史料整理を重ねながら、研究論文の完成を目指す。 (4 中村 満紀男) 理論と実践という点で多面的で総合的な分野である特別支援教育について、受講生の希望に即しながら文献的研究から教育現場でのフィールドワークを範囲としてテーマを設定し、受講生が、将来、実践家として自力で思考し、活動できる理論的・実践的基盤を育成する。 (5 田淵 五十生) 社会科に関係する分野、歴史・地理・公民的分野に関する諸課題で、もっとも興味があり、より深く研究してみたいテーマを選んで、それを教育の文脈に位置づけて（教材化の視点から）、他者に分かりやすく論述してもらう。そのための、論文の書き方やフィールドワーク、特にインタビュー調査の方法などを演習形式で学ぶ。 (6 播磨 俊子) さまざまな人間関係の心理を考えることをテーマとした論文にとりくむ。人と人との絆の重要性と難しさ、また親子関係にかかわって母性の問題などもテーマとして取り上げていく。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	卒業研究	(7 八重樫 牧子) 子ども家庭福祉に関連したテーマの研究論文の作成を指導する。文献検討を行い、テーマに即した研究方法を選択し、データ収集を行う。ゼミでの討論や発表を行いながら、研究論文の作成を進めていく。 (8 高月 教恵) 保育実践（内容・方法）を中心に研究を進める。歴史的観点から、その当時の日誌やカリキュラムや残されている資料に基づいて保育の実践について考察する。また、先達の保育思想より求められた保育実践について考える。さらに、現在の幼稚園・保育所の保育実践を分析して、“環境による保育”や“遊びを通しての指導”について研究する。具体的に手作り教具教材を作り、保育の場で実践することによって、求められる保育実践を探究する。 (9 廣重 佳治) 人の脳とところに関わる諸問題を中心に研究テーマを自ら定め、文献研究によりテーマについての理解を深め、適切な調査や実験を通して収集したデータ分析と発表討議を通じて卒業論文に仕上げる。実証的学習態度の形成がなにより大切である (10 村山 ひろみ) 子どもたちが生涯にわたり、音楽とどのように関わり、そのために必要な音楽的能力の獲得には何が適切であるか、など自分の問題意識に基づいて研究テーマを設定し、課題発見から課題解決について検討を重ね、論文を作成する。 (11 秋川 陽一) 受講生各自が保育・幼児教育に関するテーマを設定し、指導教員の援助・助言のもとで卒業論文の作成を行う。その際、テーマに関わった情報を受講生自らが収集・分析を行い、新たな知見を得ることを目指す。 (12 高橋 実) 児童の福祉や特別支援教育に関する文献や実践事例の検討レポート、あるいはフィールドワークや実験などのレポートを発表しつつ、同時に論文執筆の方法を学習しながら、執筆活動を進めていく。そうした探求の成果の発表を、適宜、研究室合同のゼミなどで行い、ディスカッションしながら論文の完成を目指す。 (13 藤原 顕) 受講生各自が学校園における教育内容・方法に関するテーマを設定し、このテーマを探究しつつ卒業論文の作成を行う。その際、テーマに関わった文献を検討しつつ、実践事例や学校のフィールドワークからのデータ収集に取り組む。 (14 正保 正恵) 個人や家族と環境との関わり等からテーマを取り上げ、問題意識に基づいて文献レビューを行った上で、オリジナルデータを収集・分析し、一定の結論を導く。また、ゼミでのお互いの発表を通して、相乗的に高め合い完成度を上げていく。 (15 齋木 喜美子) 教科教育（国語科）内容、指導法はじめ、子どもの文化・文学に関連する分野からテーマを設定して研究に取り組む。文献購読やグループワーク、レポート課題の発表と討議を通して研究を深め、最終的には成果を論文にまとめ、発表することを目指す。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	卒業研究	(16 渋谷 清) 美術あるいは造形表現教育領域の中で、教材研究・開発などをテーマの中心にする。それらのフィールドワークや実践事例をふまえた上で、制作物を含めた研究結果を論文としてまとめていく。 (17 平松 和彦) 小学校で扱う理科教材や自然現象や理科教育方法をテーマとした研究論文の作成を指導する。実験や観測及び歴史的な文献を遡る作業を通して、理科教育全般に通用する議論をしながら指導していく。 (18 宮本 俊光) 算数科教育に関する研究論文の作成の指導をする。具体的には、算数科教育内容、算数科指導法、算数科におけるコンピュータ活用、算数教科書、数学史などから学生がテーマを選びゼミを通して研究を深め、関心を共有しながら研究論文としての完成を目指す。 (19 劉 郷英) 「卒業研究」では、次のような研究テーマに取り組む学生に各自の論文テーマの設定から、論文の組み立て方、内容の展開、資料収集と整理、論の展開の仕方などの方法について指導を行う。 ① 乳幼児の言葉の発達と指導方法 ② 絵本に関する研究 ③ 保育・幼児教育に関する国際比較研究 (20 大庭 三枝) 子どもの発達過程における身体表現の重要性を考察し、自己表現力を伸ばし他者の表現を理解できる子どもを育てる保育・教育のありかたを、諸外国の就学前における表現教育との比較研究を踏まえながら、実践的に追究する。 (21 伊澤 幸洋) 言語障害の病理、障害機序、評価法や指導法などをテーマとした研究論文の作成を指導する。方法としては文献のレビューから関心を深め、保育・療育現場等での対象児から得られたデータに基づいた研究が考えられる。 (22 今中 博章) 受講生各自が研究テーマを設定し、探究を行い、卒業論文としてまとめ上げる。探究過程では、ゼミ内での経過報告ならびに検討をくり返し、テーマ探究を進めるとともに、他者とのディスカッション力の向上を図る。また計画的に進める段取り力や実行力の発揮が期待される。なお研究テーマは主として特別支援教育に関するものとする。 (23 森 美智代) 国語科教育における目標論、評価論、教育方法論、教育課程論、教材論に関わるテーマを個人または共同で追究し、研究室内で討議を行い研究を進める。必要に応じ、フィールドワークや研究授業を実施する。 (24 吉長(丸山) 真子) 保育・幼児教育を中心としながら、広く人間形成に関わる歴史研究について論文指導を行う。実証的歴史研究を目指す。現代の問題に関する問題意識や現状分析も大切にしよう留意する。 (25 小野 方資) 教育制度をテーマとした研究論文の作成を指導する。方法としては、政治過程論、法的分析、フィールドワーク、歴史研究などが考えられる。学生同士の関心を研究指導で共有しながら進めていく。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		(26 高澤 健司) 現代社会における若者が抱える問題からテーマをとりあげ、文献研究によるレビューを行ったうえでデータ収集を行う。そのデータに基づいた発表などを通して研究論文としての完成を目指す。 (27 田中 浩司) 乳幼児の発達に関連した研究テーマを設定し、フィールド調査や実験を通してデータを収集する。各人が問題関心を深めるとともに、研究発表を通して学生同士で学び合う態度も重視する。	

授 業 科 目 の 概 要					
(都市経営学部 都市経営学科)					
科目 区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通 教育 科目	教 養 科 目	人 間 と 文 化	哲学	哲学的な思考は現状への批判を含む。しかし、その批判の基準や方法はかならずしも定かではない。時代や文化によっても異なる。また批判は時として現状擁護の議論にも転換しやすい。本講義ではそうした問題性を、古代ギリシアにおける哲学の発生、中世神学における哲学の役割、近代初頭における「人間の発見」、啓蒙主義における現状批判と宗教批判の結びつき、日本の近代における哲学と人生論の結合の意味、天皇制と哲学のあり方などに絞って考えて行く。「経済」「政治」「理性」「国家」など通常何気なく使用している概念の中に、非常に息の長い知的ダイナミズムが宿っていることも考えていきたい。	
			教育学	より善き次世代の育成という人類にとつての普遍的課題に対して、人々はいかなる「知恵」を集めてきたかについて講義する。そうした教育的営為は普遍的であるとともに、地域性、自然性、文化性にもとまって、各地域（国家）で個性的に展開したことを、欧米社会と日本社会の比較史的視点から説明する。とりわけ、日本の伝統社会から近代社会への変化にともなう教育的営為の歩みについて説明する。学生が自らの学校（教育）体験を相対化し、広い視点から教育問題を認識できる力の形成を目標とする。	
			心理学	初学者を対象とした心理学入門の授業である。人の心理機能の生物的基础と社会的基礎について、感覚知覚・学習・記憶・言語・思考・発達・性格・ストレス・病むところ・社会と個人・脳と心・こころの測定などをテーマに概説する。適時、現代心理学の成立史（主に諸学派）に言及し、人間の心性についての認識が時代の思潮やテクノロジーの影響を受けていることを論じる。特に、映像教材を活用して心理学の実証的アプローチについての理解を深める。	
			社会思想史	人間が自分の欲望を追求しだす（自己実現の追求といってもいい）と、時によっては互いの間に争いがおこる。人間は一人だけでは生存できないから、その争いを調整して世の中を成り立たせなければならない。このやり方を人類は模索してきた。その過程を近代社会思想史の軌跡から理解し、社会のなかでの自分の位置を客観的に把握し、社会生活を営むに必要な洞察力を身に付けることが目標である。	
			家族とジェンダー	かつて、地域共同体と一体となって生産と消費の生活全般を担っていた家族は、近代化の過程の中でその機能を外部化させていった。近代化のなかで一方では専業主婦化がおこり、一方では保育士、栄養士、看護師などの「ピンクカラー」といわれる女性職が登場する。さらに、ポストモダンのなかでは、女性のさらなる労働力化、「ピンクカラー」の脱ジェンダー化（男性加入）、ワーク・ライフ・バランス視点に立つ男女の労働観、生活観の変容、その中で起こっているセクハラ問題、DV問題など、社会的・歴史的視点で複数のパラダイムとして家族とジェンダーを概説する。そのうえで、現在を生きる我々にとって職業人・生活者とは何か、子どもを産み育てるとはどういうことか、講義と参加型学習を通して考える。	
			美術史	美術作品は自分の目で見て、自分の心で感じる事が重要である。しかし、少し考えながら見ることもまた大切である。どのようなテーマが描かれているか。作家はどうしてこのテーマを選んだか。なぜこのような描き方をしているか。訴えたい本当のことは何か。そういった見方をすることで、きっとこれまでと違った作品の見え方がするはずである。本授業では、初期ルネサンスから現代までのできるだけ様々な画家の作品を紹介する。そこから歴史的な時代背景や、美術史としての特徴的な様式や動向を理解し、美術作品に対して多様な見方ができることを目標とする。	
			瀬戸内の歴史と文化	日常私たちが何気なく暮らしている地域には、当然のように悠久の歴史があり、そこで育まれた文化がある。つまり、地域にはそれぞれに独特な歴史文化がある。本講義では、瀬戸内海地域を舞台に繰り広げられた歴史や文化の形成や展開について、具体的なテーマや史資料を挙げながら講義を行う。前近代における地域文化の特質について理解を深めるとともに、現在の地域社会に内包している諸問題や、将来の地域社会における課題について考える力を養うことを目標とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
社会と経済		法学概論	法学（法律学）は、社会における「問題」（トラブル）の解決をはかる学問である。時代ごとに解決すべき「問題」が動き、それに伴ってその解決手段の一つである「法」も発展してきた。「問題」の解決のあり様には、いろいろなものがあり、唯一の正しい答えがあるとは限らない。受講生一人一人が法的主体として、今後、社会における様々な問題について自分なりに考え判断することができるようになるよう、リーガル・マインド（legal mind）を身につけてもらうことが本講義のねらいである。	
		日本国憲法	この科目は、日本国憲法の全体像とその今日的意義について理解することを目的とする。授業は、講義形式を中心に初学者向けのテキストに沿ってすすめる。授業においては、憲法制定に至る過程と基本原理（国民主権、基本的人権の保障、平和主義）について説明したのち、人権（身体的自由、精神的自由、経済的自由、参政権）と統治機構（立法、行政、司法、地方自治）をめぐる諸規定の解釈を学説と判例の紹介を交えながら、わかりやすく解説する。また、「地方主権」や「国際貢献」など最近の議論についてもとりあげる。	
		行政法	行政に関する法の仕組みに関し、行政法の基本原理、行政作用及び行政救済の各分野にわたり講義を行う。行政法の基本原理の分野では、法治主義を中心に講義を行い、行政法の基本的な考え方及び行政法の基礎知識の習得を図る。行政作用の分野では、行政計画、行政立法、行政行為、行政手続及び行政情報管理を中心に講義を行い、行政活動の特質について理解してもらう。そして、行政救済の分野では、実際の裁判例を素材として国家補償及び行政訴訟について講義を行い、国民の権利救済に係る制度の意義及び重要性を認識してもらう。	
		現代の経済	この講義では、経済学の基本的な枠組みにもとづいて日本経済および世界経済で見られる諸現象の意味を理解することを目的とする。講義ではまず、戦後日本経済の動きおよび世界経済の現状を説明する。つづいて、消費や投資といった経済動態の基本要素にはじまり、最近の経済を理解する上で必要な金融や国際取引まで、マクロ経済学の基礎を解説しながら、それらを活用して現実の経済現象をどのように理解できるのかについて考察する。	
		現代の経営	企業経営のサステナビリティを考慮した場合、経営は単純に利益の極大化ではなく、それをとりまく環境、そこに働く人間ないしかかわるすべての利害関係者について理解することが不可欠となる非常に多面的な存在である。本講義では、経営学に初めて触れる学生に、できるだけ平易に解説し、経営学生成と展開の足跡を辿りながら、経営学を構成する「人間」、「組織」、「環境」等の諸概念、あるいは現代経営に直面する諸問題について考え、理解することを目的とする。	
		会計学概論	会計はビジネス社会での共通言語であり、社会人として活躍するために不可欠なコミュニケーションツールである。とくに国際財務報告基準（IFRS）のアドプション（採用）に伴い、会計の重要性は改めて取り立たされるであろう。本講義では、まず複式簿記の基本的な構造を理解した上で、財務会計、管理会計、会計監査、経営分析、そして税務会計など、会計学への興味を引き出すことを目的としている。受講者には、会計学に関する基本的な専門知識の修得と財務分析能力の向上、さらには国際会計基準への理解を深めることを目指してほしい。	
		都市・社会調査法	都市社会を構成する諸活動や都市の環境を扱う研究、業務において、対象とする様々な事象や現象、あるいはその主体である「人」「人々」の属性、意見や意識、行動実態等を客観的に把握しかつ分析する調査は最も基礎的な取り組みである。本科目では調査目的や調査原理、調査方法、分析とその結果の活用に至る一連の調査法についての基礎的な理解を得ること、および初歩的な調査の設計、実施を体験することにより、さらに専門的な調査法の学習やより実践的な応用、活用へのステップとすることをめざす。	講義 20 時間 演習 10 時間
		国際関係史	1989年、東西冷戦の象徴であるベルリンの壁が崩壊し、その45年の幕を閉じた。その後、ソ連邦の解体、東西ドイツの統一、コーカサス・中央アジア地域の独立などにより、世界の様相は一変した。冷戦は、地政学的な競争や核兵器の競争だけでなく、社会経済システムのありようについても多くの示唆を与える。講義では、冷戦の象徴的な事項をとり上げ、それらが過去のものであってもいかに現代につながっているのかを考える。あわせて、かつてソ連邦の一部であり、その後独立を遂げた中央アジアについても触れる。	

科目 区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
			平和学	本講義では直接的・物理的暴力である国際紛争の歴史的背景、経済的・文化的な原因を分析し、平和のための諸条件を考察する。また、戦争がないという意味での消極的平和はあっても、飢餓などのために人びとが大量に死んでいく社会状況や、武力紛争はなくても自由も平等も人権尊重もない苛酷な抑圧国家、すなわち構造的暴力といわれる社会状況もある。したがって、真の平和のためには直接的暴力も構造的暴力もない社会の構築が最大の課題であり、国連の取り組みや日本国憲法第九条の意義を参考にしながら、真の平和の可能性を探りたい。	
			メディア論	私たちはメディアを通して「現実」の多くを認識している。そのメディアはテレビ、新聞のようなマス・メディアから、インターネットまで多様である。とりわけ、IT（情報技術）は、メディア秩序を大きく変えようとしており、ブログのように個人に表現の可能性を開く一方で、無責任な情報の氾濫、既存メディアへの打撃などの症状をもたらしている。授業ではメディアの歴史的理解、現状把握を通じてメディアリテラシーを高め、市民としてメディアをどう利用していくかを身につける。あわせてジャーナリズムの役割という視座も重視する。	
	人間 と 自然		数理の世界	自然や社会現象を理解する上で役に立つ数理の世界を探索し、数理的思考を用いた課題形成と解決に取り組む事が出来る力を養う。その中で、解析や代数、統計処理の基本と共に、都市のデザインやビジネスモデル、開発構想といった専門科目の学習や日常生活においても役立つ数学の基礎学習を通して、数学リテラシーを養う。公理や定理の体系を厳密に教授する事を目的とするのではなく、実例や応用例をその都度取り上げる事により、図形・デザインのみならず、環境・経済モデルの構築の基礎を成す数理の世界を分かりやすく学習する。	
			統計の世界	情報技術の発展につれて、自然科学のみならず、他の学問領域においても多くのデータが利用可能となると同時に、その活用法がさまざまな現象を理解する一つの手立てとして重要性を増している。この講義では、こうした観点から、統計学の基礎を解説する。その際、統計学の理論を学ぶことはもちろんであるが、データを実際に処理するための分析手法をマスターできるように、コンピュータを利用した実習も重視する。どのような場合にどんな集計法や検定法を利用するか、体験的に学習する。	
			生命科学	現在、遺伝子組換え作物の普及やiPS細胞による再生医療の展望、さらには生物多様性の保護など、生命科学に関する話題には事欠かない。そこで、本講義では、まず、生命の設計図である遺伝子DNAとその総体であるゲノムのはたらきを通して、細胞の仕組みを学ぶ。また、単細胞生物である微生物のいろいろな役割を俯瞰するとともに、多細胞生物の成り立ちについて講ずる。さらには、生命科学の進展の中で誕生したバイオテクノロジーについて、食糧問題の解決や新しい医療法の開発さらには環境浄化などへの幅広い応用性を解説する。	
			地球の進化	40億年前の原始地球からどのように大気組成が変化し、海陸が分化して来たかについて、変動する地球の姿について解説する。大気の組成が二酸化炭素から酸素へ変化する過程では、生命の進化が中心的な役割を演ずる。これが地球惑星のなかで他の火星や金星との相違に繋がる。こうした地球固有の生物進化を生み出す要因とその歴史について、平易に解説する。講義では理解を助けるための様々な工夫を凝らし、最新の研究成果について映像情報を駆使して行う。	
			科学史・科学哲学	(概要) 中国では、古代以来、火薬・紙・羅針盤の発明と多くの技術革新がなされたが、近代科学は誕生しなかった。一方中世ヨーロッパではキリスト教会が学問の世界にも君臨し、大学が設立され、やがて近代科学への基礎を築いた。唯一神を信ずるキリスト教的な世界観は、科学的な事実を説明する法則は唯一であるという近代科学の基本的考えと共通している。産業革命以降、生産現場での技術向上のために、近代科学は大いに貢献したが、現代では過度の進展で環境汚染などの問題を生みだし、科学のあり方が問われている。 (オムニバス方式／全15回) (3 福田 正己／9回) 「科学は魔物か神か」をテーマに、こうした科学の成立とその精神基盤について広範な見地で解説する。 (6 堀田 誠三／6回) ヨーロッパの自然観＝科学観の源泉をギリシアの自然哲学にみたのち、自然認識＝世界認識としての科学と宗教および社会制度との相互作用のあり方を、中世から近代の産業革命まで歴史的に解説する。	オムニバス方式

科目 区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		近代哲学と技術	近代理性は自然と人間を支配する道具的理性であったという批判がドイツ哲学の底流にあり、フランクフルト学派が継承している。フランクフルト学派第二世代のハーバーマスは道具的理性に対抗し、人間性と民主主義を基礎付ける理性をコミュニケーション的理性として提唱した。このような理性概念の分節化のなかで、近代科学技術をどのように位置づけるかが問題となる。技術を道具的理性と同一視して批判に終始するのだけでは済まされない時代が現代である。このような視点から、技術をめぐるさまざまな事例を取り上げて考察する。	
		フィールド情報学	近年の温暖化のもとで、地球環境に様々な異変が多発している。これらの実体を正しく理解し、また将来予測と対応策を講ずることが急務となっている。その場合には対象とする課題や分野が多岐にわたり、単一の学問領域や思考では問題解決に至らない。そこで多領域の学問分野を統合する思考基準として、情報の共有と課題の一元化のための思考基準として、フィールド情報学が提示されている。この新たな学問領域を理解するための、知識ツールについて段階的に学習し、学生が自立的に問題解決するための重要な知識を体得させる。主要なテーマとして地球温暖化を取り上げ、その発生メカニズムから対応策までを示して、具体的な学習資料とする。	
	環境 と 生活	環境と物理	環境の様々な問題について、物理学の視点から解説する。環境汚染など科学の進歩が引き起こした負の側面を情緒的に論じるのではなく、物質やエネルギーを消費しながら人間が種々の活動を行うことで、環境はどのような影響を受けるのかを客観的に学ぶ。地球システムの中での物質やエネルギー循環の視点から人間活動を位置付けることで、環境問題の解決の糸口を見出す。そして、今後の都市や地域開発において、人間活動と自然環境の共存に役立て、更には、地球環境と生態系の維持につなげるための学習を行う。	
		化学と環境	有機化学や無機化学の基礎、環境関連の化学に関する講義を行う。内容は、有機物、無機物の構造や反応、分析などの一般知識を重点に講義し、環境と関連する水中有機物、水中無機物、そのような化学物質の毒性、環境関連の化学製品や技術など環境と関連する内容も一部含める。この講義で、社会に出た時や今後各専門分野へ進んでいく際に最低限必要な化学の基礎知識を持たせる。	
		生物生態学	生物界、特に陸域で最大の生物システムである森林生態系を対象に、その変異と成立メカニズムに加えて生態系機能に関する講義を行う。森林生態系の変異と成立については、地球上ならびに我が国の多様な森林タイプとその成立要因を気候学、土壌学、地形学、地史の視点から理解させ、同時に森林生態系を支える有機物とミネラルの循環について基本的知識を習得させる。さらに森林生態系の機能に関しては、その炭素吸収による温暖化防止や良質な水資源供給の機能に焦点を当て、森林生態系の重要性を科学的・明示的に認識させる。	
		自然誌概論	地域の自然と特性について、その成り立ちと歴史を多角的に理解するための視座を養う。自然を構成する要素（地形、地質、大気、植生、気候など）が相互に依存しながら構成する地域特性を、実地での学習を交えながら系統的に学習する。特に福山を中心とする地域の自然の成り立ちについて、地形図や衛星画像を用いながら、空間的な要素の配置が、時間経過とともにどのように変化したのか、大気や気候が陸域の環境要素にどのように作用しているのかについて、平易に解説する。地域の環境の成立を体系的に理解する力を養う。	
		自然誌実習	本講義では、自然環境を調査するための基礎的な知識と技能を習得する。最初に、地形図と空中写真から地形や土地利用を分類する方法や、地形の測量方法を学ぶ。次に、これらの技能をベースにして、福山周辺で野外実習を行う。実習では、地形計測や土地利用の記載を行い、その成果を地図にまとめる方法を学ぶ。最後に、気象の観測法やAMEDASデータの解析方法について学び、地域の自然環境の特徴を調査するための基礎技術への理解を深める。なお、現地実習は、土日を利用して1日かけて行う。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		森林資源学	森林資源は物質資源と環境資源に大別される。人類は、元来、物質資源として森林を利用してきたが、地球規模の森林の減少にともない、環境資源としての森林の重要性が認識されるとともに、その維持が喫緊の課題となっている。しかし現在でも、途上国では伝統的な物質資源として、先進諸国では工業原料や遺伝子資源などとして森林の物質的利用が不可欠とされる一方、生物多様性の維持や二酸化炭素の吸収源としての環境機能の強化も必須とされており、森林利用における物質資源と環境資源としての二側面の折衷が21世紀の課題となっている。こうした観点から、本講義では1)森林資源の定量的な評価法、2)世界の森林資源の現状、3)農耕開始以来の森林減少史、4)伝統的な森林利用、5)工業原料としての森林利用、地球環境の恒常性に果たす森林の機能と機構、6)森林の側から見た地球環境史、を講ずる。	
		環境資源論	現在、「環境問題」に対応する新しい社会システム「循環型社会」の構築に向けて、様々な取り組みが開始されている。その中で、「循環型社会」を構築するためには、従来は社会全体の中で「ごみ」として捉えていたモノを「資源の源泉」であると再認識し、有効に活用していく取り組みが求められている。そこで本講義では近年、主流となっている3Rの概念に基づき、いかに「ごみ」を資源やエネルギーとして転換し、有効活用していくのかを考察する。(3Rとは、Reduce, Reuse, Recycleを指す。)	
		環境科学実験	(概要) 持続可能な都市の設計のためには、水と河川の性質や、限りある水資源の有効な利用方法を知る必要がある。この講義では、水や河川に関連する室内実験と野外実習をグループで行い、水の性質、河川の地形や河川水の利用について理解を深める。野外実習の実施にあたっては、学生自らが計画を立案し、グループごとに結果をまとめ、発表と議論を行い、実験結果についての理解を深める。これにより、データの取り方やまとめ方の基礎を学び、科学的方法の基礎を習得する。芦田川の実習は、土日を利用して行う。 (オムニバス方式／全15回) (30 平松 和彦／3回) 水の相変化や気象に関する講義と実験 (21 澤田 結基／3回) 河川の地形形成に関する講義と実験 (10 堤 行彦／3回) 河川水の水質変換に関する講義と実験 (澤田・平松・堤共同／6回) ガイダンス、および芦田川河川敷での実習	オムニバス方式
		地域学 (福山学)	(概要) 福山とはどのようなまちであるのか？福山のまちはどのように成り立って発展してきたか？福山のまちは今日どのような課題に向き合い、その解決にむけて何をすべきか？福山で学び生活してゆく上で基本的な教養として身につけて欲しい知識・情報について学ぶ。 (オムニバス方式／全15回) (7 藤井 輝明／5回) 今日の福山の中心部は、江戸時代初期、芦田川のデルタ地帯の開拓によって形成された。以降、さまざまな殖産興業、明治大正期の近代化、戦災復興、大企業誘致を経て今日に至っている。この福山の形成、変遷、今日の状況と課題を理解する。 (11 西川 龍也／5回) 福山というまちのもつ特色について、産業・社会・空間・文化など様々な視点から基本的な知識・情報を紹介・分析し、学んでゆく。さらに、福山というまちが、今日どのような課題に向き合い、その解決にむけて何をすべきかについても考察を進める。 (22 八幡 浩二／5回) 備後地域の歴史は、江戸初期の福山城下町の形成により大きく転換する。まず城下町形成以前の古代から中世にかけての備後地域の地勢・交通・社会などを紹介する。さらに近世に至り、城下町形成の背景・理念と、江戸期福山の生活・文化についても学ぶ。	オムニバス方式

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
スキル科目	外国語	英語	総合英語Ⅰ	英語コミュニケーションの基礎となる語彙力、文法力の徹底習得を行う。英語学習ソフト『ALC NetAcademy 2』を主教材とするパソコンを用いた学習スタイルによって、語彙、文法の継続学習と定着を目指す。英語教員と英語学習アドバイザーの指導のもと、週2回の授業とともに、受講生が各自の英語の能力に応じて、段階的に自学自習を行うよう指導する。「総合英語Ⅰ」における語彙学習（PowerWordsコース）の到達目標をレベル3とし、文法学習（英文法コース）は、レベル1とする。	
			総合英語Ⅱ	英語コミュニケーションの基礎となる語彙力、文法力の徹底習得を行う。英語学習ソフト『ALC NetAcademy 2』を主教材とするパソコンを用いた学習スタイルによって、語彙、文法の継続学習と定着を目指す。英語教員と英語学習アドバイザーの指導のもと、週2回の授業とともに、受講生が各自の英語の能力に応じて、段階的に自学自習を行うよう指導する。「総合英語Ⅱ」における語彙学習（PowerWordsコース）の到達目標をレベル4とし、文法学習（英文法コース）は、レベル2とする。	
			総合英語Ⅲ	I・II期で習得した語彙、文法力を土台に、リーディング、リスニング能力の向上を目指す。英語学習ソフト『ALC NetAcademy 2』を主教材とするパソコンを用いた学習スタイルによって、様々なリスニング、リーディング演習を繰り返し行う。英語教員と英語学習アドバイザーの指導のもと、週2回の授業とともに、受講生が各自の英語の能力に応じて、段階的に自学自習を行うよう指導する。「総合英語Ⅲ」におけるリスニング、リーディング学習（スーパースタンダードコース）の到達目標をレベル2とする。	
			総合英語Ⅳ	I・II期で習得した語彙、文法力を土台に、リーディング、リスニング能力の向上を目指す。英語学習ソフト『ALC NetAcademy 2』を主教材とするパソコンを用いた学習スタイルによって、様々なリスニング、リーディング演習を繰り返し行う。TOEICテストやビジネスシーンで求められるスキルにも対応。英語教員と英語学習アドバイザーの指導のもと、週2回の授業とともに、受講生が各自の英語の能力に応じて、段階的に自学自習を行うよう指導する。「総合英語Ⅳ」におけるリスニング、リーディング学習（スーパースタンダードコース）の到達目標をレベル4とする。学期末にTOEIC-IPテストで1年間の英語力の伸張を測定する。	
			英語コミュニケーションA	(英文) This is an introductory English communication course. The main aim is to help students develop confidence and competence in `everyday` spoken English in a challenging and enjoyable learning environment. The emphasis is on speaking, listening, pronunciation and vocabulary building although some elements of reading and writing skills are built into the course. Students are encouraged to put the English language 'into action' through a wide variety of communicative task-based activities such as pair work information exchanges, team activities and role-plays. (和訳) 入門的な英語コミュニケーションを学ぶ科目である。本科目は、学生が、日常に話される英語を運用する自信と能力を身につけることができるように手助けすることを目的としている。それらは、学生にとって挑戦しようという気持ちになれるような、かつ、それを楽しむことができるような学習環境で行われる。読み書き技術も、ある程度は学習するが、主として、話すこと、聴くこと、発音、語彙構築に重点が置かれる。学生たちは、二人一組になつての情報交換、グループ活動、ロール・プレイなどのコミュニケーションを実地で試みる様々な活動を通して、英語を「実践」する。	
			英語コミュニケーションB	総合英語で獲得した語彙と文法力と聴解能力を活かして、英作文力とスピーキングの力を養成する。演習は週に2回あり、1回の演習の前半分45分において英作文を学び、後半45分においてオーラル・イングリッシュを学ぶ。英作文では、自己紹介などの英文からビジネスレターなどを大量に書いて、英文の仕組みを自分のものにする。オーラル・イングリッシュでは、日常生活や時事問題に関する基礎的な教材を使用し、自分の考えを論理的に伝える能力を発展させ、総じてライティングとスピーキングの基礎を習得する。	

科目区分				授業科目の名称	講義等の内容	備考
				ビジネス英語Ⅰ	日常英会話からビジネスシーンまで、幅広い範囲における英語の実践的な運用能力の習得を目指す。講義はリスニング強化（前半）とリーディング強化（後半）で構成し、リスニングでは、慣用的表現や短い会話文の聞き取り等を行い、リーディングでは文法やビジネス文書の読解を行う。教員と英語学習アドバイザーによる週1回の講義と、英語学習ソフト『ALC NetAcademy 2』を用いたパソコンでの自学自習による語彙力の強化を同時に進め、到達目標はTOEIC試験の470点を超える程度とする。	
				ビジネス英語Ⅱ	日常英会話からビジネスシーンまで、幅広い範囲における英語の実践的な運用能力の習得を目指す。講義はリスニング強化（前半）とリーディング強化（後半）で構成し、リスニングでは、紛らわしい音の聞き分けや会話の概要と詳細をつかむ練習等を行い、リーディングでは重要な文法や目的に応じたリーディング法等を習得する。教員と英語学習アドバイザーによる的確な自己学習指導を受けながら、英語学習ソフト『ALC NetAcademy 2』を用いたパソコンでの自学自習による文法力の強化を進め、到達目標はTOEIC試験の600点程度とする。	
				ビジネス英語Ⅲ	日常英会話からビジネスシーンまで、幅広い範囲における英語の実践的な運用能力の底上げを図る。講義はリスニング強化（前半）とリーディング強化（後半）で構成し、リスニングでは、自然な応答練習や状況別の説明文の理解等を目指す、リーディングでは重要な文法やビジネス文書の読解を行う。毎回の小テストや復習テストとともに、英語学習ソフト『ALC NetAcademy 2』を用いたパソコンでの自学自習により、リスニング力、リーディング力の増強を図り、到達目標はTOEIC試験の600点程度とする。	
				上級英語Ⅰ	(英文) This course aims to help students develop more advanced communication skills by building on what they learned in the introductory English Communication Course. While speaking, listening and vocabulary building remain a key part of this course, students will also be expected to read extensively choosing from a selection of graded reading books and then give a short presentation to the class on one of the books they have read. In addition students will be required to write a weekly diary. The course will also include some project work through which students are encouraged to research and prepare presentations both individually and as a part of a group. (和訳) 「上級英語Ⅰ」は、「英語コミュニケーション」で学んだことを土台に、さらに高度な英語コミュニケーションの技術を学ぶことを目的としている。話すこと、聴くこと、語彙力増強が主たる部分を占めるが、さらに、受講生は、自分の読解力にあった英語文献を選び読み、その内容について報告発表することが求められる。英語で記述した日誌は毎週提出しなければならない。各自が設定したテーマで調査して、それについて発表することも奨励されるが、この調査と発表は、個人又はグループで行う。	
				上級英語Ⅱ	(英文) In this level 2 advanced communication course, along side providing plenty of opportunities for developing speaking and listening skills, we also take a closer look at grammar and how to talk about it in English. In addition students on this course will be expected to take part in an extensive reading program, write a book review and talk about an English book of their choice to their classmates. They will also have to complete weekly diary entries and submit these for marking. Ideas and guidance will be given to students with regard to diary work along with plenty of opportunities for more 'free writing'. Students will be encouraged to include recently introduced language ideas and vocabulary into their writing. (和訳) この「上級英語Ⅱ」においては、話し聴く技術を向上させる機会を豊富に提供すると同時に、単に話し聴くことに慣れるのではなく、より文法面に留意して話すことに習熟する機会を提供する。受講生には、より幅広く英語文献に触れ、その内容を報告発表することが期待される。より自由に、より多く書くためのアイデアや方法が、この科目において提供されるので、受講生は、クラスで紹介されたアイデアや語彙を活用して、週毎に英語日誌を提出する。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
	中国語		入門中国語Ⅰ	この授業は「入門中国語Ⅰ」というテーマで、初めて中国語を勉強する学生を対象に行うものである。本授業では、学生一人ひとりが持っている「外国語の学習能力」を最大限に伸ばすために、中国語（標準語）の基礎的な知識を講義するだけでなく、基礎中国語を応用できるように、段階ごとに「聴く、話す、読む、書く、対訳」という総合的な技能訓練を行う。「入門中国語Ⅰ」の段階では、テキストに沿って中国語の表音記号～第5課を中心に学習し、中国語「基本語彙Ⅰ・基本文法Ⅰ・基本表現Ⅰ」の習得を到達目標とする。	
			入門中国語Ⅱ	この授業は「入門中国語Ⅱ」というテーマで、「入門中国語Ⅰ」を修了した学生を対象に行うものである。本授業では、引き続き「入門中国語Ⅰ」のテキストを使い、第6課～第12課を中心に学習し、「聴く、話す、読む、書く、対訳」という総合的な技能訓練を通して、相応レベルの中国語運用能力を育成する。「入門中国語Ⅱ」の段階では、中国語の「基本語彙Ⅱ・基本文法Ⅱ・基本表現Ⅱ」の習得を到達目標とする。この段階の学習を通して、「中国語検定試験準4級」レベルに到達することを目指す。	
			初級中国語Ⅰ	この授業は「初級中国語Ⅰ」というテーマで、「入門中国語Ⅱ」を修了した学生を対象に行うものである。本授業では、さらにステップアップして、テキストに沿って「聴く、話す、読む、書く、対訳」という総合的な技能訓練を通して、相応レベルの中国語運用能力を育成する。「初級中国語Ⅰ」の段階では、日常に使えるような平易な文章を聴いたり、中国語の表現や、文法、句型などの練習をしたりして、「基本語彙Ⅲ・基本文法Ⅲ・基本表現Ⅲ」の習得を到達目標とする。	
			初級中国語Ⅱ	この授業は「初級中国語Ⅱ」というテーマで、「初級中国語Ⅰ」を修了した学生を対象に行うものである。本授業では引き続き、「初級中国語Ⅰ」のテキストを使い、第7課～第12課を中心に学習し、「聴く、話す、読む、書く、対訳」という総合的な技能訓練を通して、相応レベルの中国語運用能力を育成する。「初級中国語Ⅱ」の段階では、中国語「基本語彙Ⅳ・基本文法Ⅳ・基本表現Ⅳ」の習得を到達目標とする。この段階の学習を通して、「中国語検定試験4級」レベルに到達することを目指す。	
			中級中国語Ⅰ	この授業は「中級中国語Ⅰ」というテーマで、「初級中国語Ⅱ」を修了した学生を対象に行うものである。本授業では、主としてテキストに沿って「聴く、話す、読む、書く、対訳」という総合的な技能訓練を通して、相応レベルの中国語運用能力を育成する。「中級中国語Ⅰ」の段階では、主としてテキストの第1課～第6課の内容を中心に学習し、学生自身の日本での生活の場面を想定して、それぞれの場面で中国語の各技能で自由自在に表現できることを到達目標とする。	
			中級中国語Ⅱ	この授業は「中級中国語Ⅱ」というテーマで、「中級中国語Ⅰ」を修了した学生を対象に行うものである。本授業では、引き続き「中級中国語Ⅰ」のテキストを使い、第7課～第12課を中心に学習し、「聴く、話す、読む、書く、対訳」という総合的な技能訓練を通して、相応レベルの中国語運用能力を育成する。「中級中国語Ⅱ」の段階では、学生が中国での留學生活の場面を想定して、それぞれの場面において中国語の各技能で自由自在に表現できることを到達目標とする。この段階の学習を通して、「中国語検定試験3級」レベルに到達することを目指す。	
	フランス語・ポルトガル語		フランス語Ⅰ	自己および身近な状況など日常的な事柄に関する基礎的な聴解力・会話力・読解力・文書作成力の4分野にわたるフランス語能力を身につける。社会言語として実践的な場面における意思疎通を可能とする語学力を身につけるため、フランス語成立の背景となっている生活・社会文化や地理歴史などを映像を交えて学習しながら、基本的な語彙・文法・表現（口頭・文書）を反復練習する。使えるフランス語習得を目指し、日本人が苦手とする聴解力・口答表現力を重点的に鍛える。	
			フランス語Ⅱ	授業の概要：フランス語Ⅰに引き続き、日常的な事柄に関するやや発展した聴解力・会話力・読解力・文書作成力の4分野にわたるフランス語能力を身につける。フランス語成立の背景となっている生活・社会文化や地理歴史・社会問題・教育制度・文学などを学習しながら、社会言語として実践的な場面における意思疎通を可能とする語学力を身につける。礼儀正しい表現など日常生活を円滑に行うためのやや発展した語彙・文法・表現（口頭・文書）を反復練習する。DELF A1と並行して、文部科学省認定実用フランス語技能検定4級相当のフランス語運用能力を習得する。	

科目区分				授業科目の名称	講義等の内容	備考
				ポルトガル語Ⅰ	福山市におけるブラジル人の外国人登録人口は約800人と、中国、韓国・朝鮮に次いで3番目に多く、福山市ではポルトガル語訳の転入ガイドの作成や、ポルトガル語を話せる専門アドバイザーを配置している。本授業では、ポルトガル語の基礎的な文法・表現・語彙などを丁寧に学習し、身近な状況など日常的な事柄に関する会話・読解・作文などのポルトガル語の基礎的能力を身につける。また、ブラジル人住民と実際にかかわる様々な場面において、意思疎通を可能にする初歩的なコミュニケーション能力を身につけることを目標とする。	
				ポルトガル語Ⅱ	「ポルトガル語Ⅰ」に引き続き、基礎的な文法・表現・語彙を復習しつつさらに学習を進展させ、身近な状況など日常的な事柄に関する会話・読解・作文などのポルトガル語の基礎的能力を身につける。また、ブラジルの歴史・文化、教育制度、生活などを学びながら、実践的なコミュニケーション能力を身につける。受講生の要望やニーズを把握しつつ、使用教材や参考書も随時紹介する。文法の学習にかたよらないよう、毎講義に会話の練習を行い、基本的な時制表現（現在・過去・未来）ができること到達目標とする。	
		コンピュータ・スキル		情報演習Ⅰ	情報化社会で活躍する為に最低限身に付けておくべき情報リテラシーとして、パソコンを使用する際の基本操作やワープロ・表計算、ネットワークの活用の上で求められるマルチメディア情報通信の応用ソフトウェア（電子メールや情報検索）に関するスキルや情報倫理等を学ぶ。この科目は、必要なアプリケーションソフトを活用する為の基礎的知識の習得が主体の授業である為、更なる情報コミュニケーションスキル向上の為に情報演習Ⅱと併せて受講する事が想定されている。	演習 24時間 講義 6時間
				情報演習Ⅱ	情報に対する合理的な判断力を身に付け、正確な情報を活用して、自らの意見を他人に分かりやすく伝える為の情報コミュニケーションスキルの向上を図る。その為に、インターネットで公開されている多様なデータなどから必要な情報を探し出し、得られた情報の真偽を正しく判断し、吟味した内容に自らの意見を加えて、プレゼンテーションソフト（PowerPoint）やWeb（HTML）による情報発信を行う。この演習を通して、各自が逐次作成した情報の管理や他人の権利を侵害しない重要性についても習得する。	演習 28時間 講義 2時間
				情報応用演習Ⅰ	コンピュータの情報処理の為のプログラミング（BASIC, FORTRAN, 又はC）の基本的スキルを学ぶ。多様化した複雑な情報化社会の中で直面する様々な問題を柔軟に解決する為には、少なくとも簡単な数値計算やデータ処理を自ら行うことが出来る能力を身に付ける必要がある。そこで、テーマ毎の説明と演習によって、プログラミングに必要なアルゴリズム、データの種類や構造、各種処理の流れ等の基礎概念を習得しながら、最後の問題演習を通して、最終的には簡単なプログラムが自由に書けるようになることを目的とする。	
				情報応用演習Ⅱ	パソコンや各種サーバを安全かつ快適に使えるスキルを身に付ける。特に、Linux（UNIX）上で、（1）Xウィンドウシステムの操作、（2）ファイルシステムやシェルの理解、（3）データ圧縮、（4）ソフトウェアのインストールやアンインストール、（5）各種環境の設定、（6）ネットワーク通信（SSHやFTP等）、（7）ウェブサイトの仕組み等、システム管理の基礎を学ぶ。その過程で、テキストエディタEmacsや綺麗なレポートを作成する為のLaTeX、作図の為のGnuplot、シェルプログラミングについても学ぶ。	
人間力科目	キャリアデザイン			キャリアデザインA	学生が自らの将来を設計し、社会の一員として生活する基礎を養うことを目標とする。 自らの将来を設計するために、まず学校や地域、家庭でこれまで何を学び身につけてきたか、働くことについてどのように考えてきたかについて具体的に振り返りまとめさせる。次に、地域で働く人たちの話を聴くことで、実際に社会で何が起り自分たちに何が必要とされているのかについて考え理解させる。そして、これまでの振り返りや考察をもとに、今後の将来設計について考えさせ、その中で大学や社会における学びに何が必要であるかを見きわめる力を養成する。	
				キャリアデザインB	受講生それぞれの特性に合わせ、独自のキャリアデザインの形成を啓発・促進・支援という3つの手法を活用し、潜在能力を喚起することを目標とする。啓発面では、学習した専門知識に沿って、職業観の育成、職業選択能力の開発を行う。促進面では、自己能力の徹底分析により、自分にふさわしい職業観、明確な自己の役割意識が形成できるように教育する。支援面においては、学生の動向を随時に把握しながら、学内CDCとの連携を強化するとともに、学外の変化を絶えずフィードバックし、キャリアデザインの形成を図る。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
	体育・健康	健康・スポーツⅠ	本実技では、自らの健康問題について、体を動かすことを通して、主体的に考える力を養うことを目的とする。毎回のストレッチや準備運動からは、主運動を行うまでの準備（レディネス）の重要性を、主運動であるスポーツ種目（バレーボール、バドミントン、ソフトボール、テニス）では、集団のなかの一員としての役割等から協調性を身につける。更には種々の運動を通して、体を動かすことの重要性を総合的に学び、生涯スポーツへと展開する。	
		健康・スポーツⅡA	生涯スポーツとして、また社会人として関わりを持つ可能性の多い種目や福山市の公共施設を有効利用した、複数のコースの中からひとつを選択し、その競技特性について、実践を通してより専門的に学ぶ。健康スポーツⅡAでは、放課後・土曜日コースとし、フィットネスやエアロビクス、ダンス、ゴルフ、ヨガの中からいずれかを選択する。講師や施設の人と接する中で、社会の一員としての立場を理解し、マナーや規則の重要性について、理解することも目的とする。	
		健康・スポーツⅡB	生涯スポーツとして、また社会人として関わりを持つ可能性の多い種目や福山市の公共施設を有効利用した、複数のコースの中からひとつを選択し、その競技特性について、実践を通してより専門的に学ぶ。健康スポーツⅡBでは、集中コースとし、夏季の二上りおどりや漕艇、スクーバダイビングの中からいずれかを選択する。二上りおどりでは、福山の伝統や歴史について複合的に学び、漕艇、スクーバでは河川や海域の汚染といった環境問題についても学ぶ。講師や地域の人と接する中で、社会の一員としての立場を理解し、マナーや規則の重要性について、理解することも目的とする。	
		健康・スポーツⅡC	生涯スポーツとして、また社会人として関わりを持つ可能性の多い種目や福山市の公共施設を有効利用した、複数のコースの中からひとつを選択し、その競技特性について、実践を通してより専門的に学ぶ。健康スポーツⅡCでは、集中コースとし、冬季のスキーを実施する。更には地球温暖化がスキー場の経営に与えた影響などを総合的に学ぶ。また講師や地域の人と接する中で、社会の一員としての立場を理解し、マナーや規則の重要性について、理解することも目的とする。	
		健康科学	成長期から成人期に移行するこの時期に、正しい健康リテラシーを身につけるとともに、今後起こりうる健康問題について理解することで、その予防としての運動、食事、休養の重要性と、それをサポートする社会的なシステムについて理解する。またこれらを主体的かつ科学的に捉え、行動変容を意識した実践力と、その基盤となるエビデンスに基づいた健康づくりについて考察する。また健康・スポーツⅠおよび健康・スポーツⅡA～Cやコンピュータスキル科目との関連から体力の評価と分析に関する基礎的能力を身につける。	
	入門ゼミ	大学入門ゼミ	大学における学習・研究に必要な種々のアカデミック・スキルを養うため、文献や資料検索の方法、フィールドワークの方法、文献レビューの方法、レポートの作成方法、発表資料作成の方法等について学習する。また、地域社会が抱える諸問題をテーマとしたグループ学習を体験するなかで、多様なものの見方、論理的な思考、資料整理や資料分析等、大学で学ぶための基本を身に付ける。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	学部 基礎 科目	都市経営入門	第1に、共同社会としての都市の経済的成り立ちを説明する。第2に、都市経営の基盤をなす諸要素（自然環境と資源、社会共通資本、産業と市場、コミュニティ、自治体政府など）の相互関係を概説し、都市経営は、これら諸要素のネットワークにより、住み心地の良い安定した共同社会を、安価に形成することを目指すことについて示す。第3に、これまでの欧米と日本における代表的な都市経営の類型を概説し、都市経営の公準を明らかにする。第4に、実例として「ニューヨーク2030年計画」を紹介し、公共と民間のパートナーシップによって進められている現代都市経営の計画過程を説明する。	
		都市デザイン入門	有史以来、人間は生活の場として都市を作りそこで暮らしてきた。現在、地球上の人口の7割が都市に生活していると言われる。そこで都市デザイン学講義では、その都市の発生や成立過程、都市の遺構、さらに、それらの上に何代にも渡り構築・集積された現在の都市形態、都市の構成、都市の機能、都市の動態などをプランや空間を基に概観し、都市デザインとは何かを歴史や風土をもとに具体例を挙げて解説する。また、これからの持続可能な、自然と共生できる都市の構築に向けて、都市を企画・計画・デザインするための知識と基本となる技術を学ぶ。	
		都市経営と社会学	社会の基盤は都市・地域社会であり、そこに生活・文化・自治に関わる重要な社会的問題が集積し出現することを踏まえて、身近な問題から、現代社会の諸問題、とりわけ都市を舞台に現れている諸問題を学生が自ら考える。次に、地域社会と人々に身近な現代的で中核的な社会的問題（少子化・高齢化・孤独死・サスティナブル問題等）を学ぶ。社会学が、ローカルガバナンス論や市民社会論とリンクした形で、現代的な社会諸問題の解決をめざす実践的知恵とスキルとして進展していることを、実感として体得することを目的とする。	
		経済学入門	この講義の目標は、経済学の基礎概念の解説をつうじて、経済社会の持続可能性（サステナビリティ）という問題を理解することである。まず経済学の対象と特質を検討したうえで、現代において経済行為が展開される場である市場社会の構造とそれを支える政府の役割とを明らかにする。そのうえで市場社会において実現している経済社会の再生産のメカニズムを概観し、人間社会の再生産と維持という課題を経済学の立場から理解する。	
		地球環境入門	地球を構成する陸域、海洋、大気の共通する特性として流体特性を捉え、流体的地球像としてその特性について学習する。地球内部での流動性（マントル対流）から海洋のダイナミックス、そして大気大循環の特性など、地球を階層分けして各領域の流動の特徴を平易に解説する。更に陸圏、海洋圏、大気圏での流動の相互作用が生み出す様々な現象について解説する。またこうした各圏の流動特性の歴史的な変化について、それがどのように探求され明らかにされたかを紹介する。こうした地球環境の様々な側面を最新の多研究分野の成果を取り入れて、総合的に理解を深める講義とする	
		都市経営ゼミ	環境のほかに計画・デザイン、経済・経営、共生・開発の4つの領域ごとにテーマを設定し、テーマに関連した文献の講読とレビューを通して議論の方法や学習の方法を習得する。テーマに関連した課題に取り組み、都市経営学の学問的な広がりを理解するとともに、具体的な課題への理解を深め、専門的な学習へのモチベーションを養う。さらに、3年次以降の専門演習選択や卒業研究に向けた予備的な文献調査や資料収集に取り組む。	
	基幹 科目	都市の歴史	都市に種々の歴史上のタイプを作り上げたのは、社会の経済および政治の機構であり、また地理その他の自然の影響による個性を持っていると言われている。この講義では、それらを基に、都市の歴史を大きく3つの時代に分類する。それらは、メソポタミア、エジプト、インダス、黄河の4代文明の発祥地の古代都市、ヨーロッパの中世・近世の都市、18世紀の産業革命による近代都市・現代都市である。この講義から都市とは何か、都市問題とは何かなどの基本的な事項について学び、都市を知り、理解する基礎を習得する。	
		都市基盤施設論	都市活動や都市生活を支える上で不可欠となる都市基盤施設論に習熟するには、単に概観するだけではなく、①都市経営上の課題や要請の多様化や高度化に対し、施設の種類・整備手法・管理法等をいかに発展させてきたか、②時代の要請ともなる環境・防災・地域の再生・魅力形成などに対しては、どうであったかを理解する必要がある。これらについて実例をもとに習得とともに、③近年問題となる「地域の合意形成」「整備効果や総合評価」についても学習し、全体としてこれからの都市経営に求められる都市基盤施設のあり方や考え方を学ぶ。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	都市計画論	「都市」と「計画」の意味と役割を始め、都市計画の体系についての基礎的な理解を得る。まず、都市の概念や性格を把握する方法を理解するとともに、都市政策・マスタープランを理解する。さらに都市計画の主な対象である都市の土地利用、都市施設、市街地開発と、派生的な重要領域である景観やまちづくり等の内容について、今日おこなわれている課題と解決の方向性を都市計画技術とともに理解する。都市計画法や都市計画行政を紹介する中で、都市計画と倫理の問題にも触れる。	
	都市生活学	まず都市における市民生活を考えてゆく前提として、現在の状況に即しながら都市という概念についての再確認・再検討を試みる。次に、近代都市計画の主な理論、制度とその背景となる社会的な状況や思想について概説し、現在の都市空間を形成・維持しているシステムについて基本的な知識を学ぶ。さらに今後の日本社会の都市住民が直面せざるを得ないと考えられる諸課題を紹介し、その解決を旨として近年新たに導入されはじめた都市計画・まちづくりの制度と具体的適用事例を参考にしながら考察を進め、問題解決への道をともに考えてゆく。	
	ミクロ経済学	受講者が資本主義経済の基盤である市場メカニズムと経済を構成する消費者と生産者（企業）の行動の理解ができることと経済学の眼で経済を理解できることを本講義の到達目標とする。市場の役割と機能について概観した上で、消費者と競争企業の最適決定までのプロセスを図を用いて分かり易く説明する。各主体の選択から導かれた需給の競争市場での調整方法、その結果社会全体にどのような成果（余剰）がもたらされるのか、そして競争企業の対極に位置する独占企業を取り上げて、それが消費者や社会に与える影響を明らかにする。最後に、市場が機能しないケースを紹介する。	
	経営学原理	本講義では、①代表的な経営学説、②著名な経営者の経営思想と経営手法、③経営学分野において注目された事象を分析する。①では、ヒトや仕事の管理の変遷と、その背後にある思想・哲学と併せて研究する。②では、一世を風靡した経営者による革新的マネジメントに関しては、トヨタ等のほかに大学の地域性を考慮して広島県の中核企業の事例を含めて生産・流通等の具体的イメージを理解させる。③では、企業戦略論の側面からSCMから見た福山市の都市設計上の問題点と、産業構造の問題点を講義する。	
	マクロ経済学	この講義では、マクロ経済学の基礎的な考え方を理解できるようになることを目標とする。そのために、国内総生産(GDP)の決定、政府支出の経済効果、GDPと利子率の同時決定、経済成長、貿易などに関連したマクロ経済学の基礎的な理論を解説し、同時に、基礎的な問題演習を行っていく。また、それに付随して、これらの問題に関連する(経済記事などに基づく)現実の経済問題を取り上げ、その解説を行いながら、同時に、それらの問題がマクロ経済学の基礎的な理論によってどのように取り扱われていくのかについても言及していく。	
	公共政策論	公共政策の目標は、自治体政府が、自然環境と資源を保全し、コミュニティの基盤となる社会共通資本を建設・管理し、市場経済の働きから生まれる社会的経済余剰の地域内循環をつよめ、福祉、医療、保健、教育のような社会サービスを公平に供給し、公害、災害、犯罪などの社会的損失を防ぐことにより、住み心地の良い安定した共同社会を形成することである。以上のことを講義の前半においては、①公共政策の目的、②政策過程、③政策手段、④政策主体のパートナーシップ、という諸側面から概説し、後半では具体的事例として、ニューヨーク市の公共政策をとりあげ、日本の都市への示唆を示す。	
	地域経済論	今日の地方工業都市の多くは、昭和30年代、40年代の大企業誘致により形成され、急速に発展し、変貌してきた。備後福山を事例にとりながら、工業化のプロセスにおいて、地域の経済・産業および街の構造等にどのような変化が生じ、どのような課題・問題が内在しているかを考察・理解する。その中で地場産業の果たす役割、その多様性の重要性を認識する。また、単一の産業・企業に大きく依存する地方工業都市の脆弱性を考察し、社会的企業等による補完・活性化を考察する。	
	都市社会学	本講義では都市社会・地域社会にかかわることがらにつき、1)理論、2)制度環境比較、3)地域社会運動論、4)町内会論、5)地域社会に係る諸スキル、という五つの領域を学ぶことにより、現在まで都市社会・地域社会が置かれてきた背景と現在の状況を、理論・運動論・スキルの三位一体で捉えることを目標とする。とりわけ、これまでの都市社会学が都市のハードを重視するあまり限界に陥ったことの反省をふまえ、地域社会運動という「人」を重視する視点から課題を考察する。	

科目 区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
展開 科目		多文化共生論	異文化の他者たちが出会い相互行為する現代日本社会における「共生」の重要性について講義する。具体的には、日本社会において「共生」が着目されるようになった背景、さまざまなマイノリティと異文化のマジョリティ集団との間で発生する葛藤の歴史と現状を講義しつつ、「共生」理念の意義と限界の理解を深める。また、日本社会において実践されるさまざまな多文化共生の事例を紹介する。本講義は、多文化共生が求められる日本社会の現状理解を深めるとともに、理念と実践の双方から「共生」を理解することを目的としている。	
		国際関係論	経済社会の開発、発展に関する理論的な枠組みを学び、基礎的な知識を身につけることを目指す。世界には10億人以上の貧しい人々がいると推計されている。その貧しさはどのようなものなのか、どうして貧困や格差が生じるのか、どのようにそれらを克服すべきかを考えるのが具体的なテーマである。経済学における国際開発論からのアプローチを主に取るものの、社会・文化的視点も取り入れる。人間や社会にとって「開発とは何か」という問題意識を原点にしつつ、グローバルな次元での持続的開発について考察する。	
	計画・デザイン	土地利用計画	土地利用計画は、交通計画と並ぶ基盤的な計画分野であることから、都市計画全般における位置づけ、役割、手法等の体系的かつ俯瞰的な理解をめざす。土地利用計画の目的である都市の環境、機能、活動等の創出や誘導を常に意識し、事前調査、計画検討・立案、土地利用計画の法制化や事業化等の運用面に至る段階的な計画プロセスを、具体事例等を通して解説する。また、モデル地域の想定や模擬的な条件提示により、計画検討及び計画の評価について、実践的、体験的な学習機会（演習課題）を設定し、理解を深めると共に習熟をめざす。	
		都市交通政策	都市交通政策の基本として、①都市総合交通計画について調査・交通需要推計・計画・決定手続きの基礎を学ぶとともに、②環境・土地利用誘導・情報化などのテーマと都市交通政策との関わりを学習し、幅広く総合的な知見を得る。その上で、③具体的な例として交通広場・新市街地・都市拠点・中心市街地などを取り上げ、その交通計画の考え方や方法論を学ぶことで、交通政策に対する理解を深める。全体を通して、極力、実例を交えることで、具体の都市に対し、交通政策や交通計画を論じられる能力と見方・知見を学ぶ。	
		都市水環境システム	上水道、下水道などの水に関する都市インフラ施設の現状、課題、今後の在り方について、グローバルな視点を含めて幅広く講義を行う。内容は、水循環システムの中での水利用の観点から、上水道、下水道の水処理施設などの概要及び水不足・水質汚染等都市水環境問題の現状と課題、その取り組みなどの講義である。その講義内容を通して、都市水基盤施設の理解を深め社会の中での水の重要性を認識させ水環境に関する幅広い視野を持たせる。	
		建築の歴史	建築及び都市環境を理解するための基本的な教養となる建築の歴史について、西洋及び日本に関して古代から近世までの概要について学習を行う。具体的には、各時代ごとあるいは、学習対象となる国や地域を代表する建築物を、種別ごとに時代を追って取り上げ、建築様式、空間構成、構造、意匠、材料などを紹介する。あわせて、その背景となる気候・風土や文明・文化の成立・発展・交流が建築に及ぼした影響についても考察する。また授業の理解を進めるため、福山の歴史的資産である草戸千軒遺構等を展示する県立歴史博物館を見学する。	
		建築計画	建築計画は、人間生活と建築空間との対応の視点から研究されてきており、さらに建築を設計する為に必要な知識と技術を建築の用途ごとに項目立て体系的に構築したものである。本科目では、人間の生活、行動、意識と、空間との対応関係を基にして建築を計画するアプローチをその用途ごとに実例をあげて概説する。そして様々な用途の建築の形態はどのようにきまるのかを、人間と空間とそれらの建築の機能について基本的認識を持ち理解することが目標である。	
		都市景観論	良好な景観とは何を指すのか。現代の生活や新たな景観形成と景観保全との兼ね合いはどうあるべきかなど、多様な人々が居住する都市の景観に関わるさまざまな要素をいかに解決し景観形成を行うかを講義する。授業では景観についての概要を解説し（1～4回）、次に国内外の具体的景観形成事例を解説する（5～9回）。さらにさまざまな視点で良好な景観のあり方について解説する（10～15回）。都市景観のもつ問題の複雑さを認識し、多面的な視点で景観を評価する姿勢を身につけることを目標とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		建築都市計画法規	建築物を建築し、維持管理していくための社会的秩序として、さまざまな法規がある。建築に関わる法規について、建築基準法を主軸としつつ、関連法規について学ぶ。膨大かつ難解な現行法規を理解するため、全体の構造を把握し、主要な内容については手続き規定、集団規定、単体規定に分け変遷や規制値の由来等の原理について理解する。また、都市計画法等の関連法規についての概要を把握する。最後に、建築に携わる者の法規（建築士法、建設業法等）とともに、倫理について学ぶ。	
		生活環境論	「生活環境」が物理的環境と社会的環境の2つの側面を持つという基本認識を踏まえ、「環境」への観察力、分析力、及び問題解決への関与力（意欲、計画スキル）の育成をめざす。地域住民の日常生活における多様な環境との関わりに視点を置き、人々が自身の日常生活を支える生活環境を知る、評価する、そして「改善する」視点や方法、取り組みについて学習する。本講義では主に住宅地、集合住宅等の「住環境」、及び中心市街地等における都市の「賑わい空間」の観察と分析、計画事例等の学習を通して、課題発見から計画や改善に向かう思考と行動について基礎的な理解と習熟をめざす。	
		住宅政策論	「住まい」は人間の生活にとって最も重要な要素であるが、都市化や社会の変化に伴う根深い課題にさらされ続けている。住宅政策とは、適切な住宅を生み出すこと、そしてそのことを通じて社会の問題解決に寄与しようという目論みである。当授業では、住宅政策の意義、精神を歴史的な住宅開発の事例であるレッチワースから学ぶことから初める。その上で、我が国の住宅政策の系譜を俯瞰するとともに、マクロな面での住宅需給構造と課題について把握する。さらに福祉や地域文化等の側面からの住宅政策の展開について学ぶ。今後重要となる人口減少社会における新たな課題等についても考える。	
		生活空間学	産業革命がもたらした近代機械文明の発展が、我々の市民生活と生活空間に与えた影響について紹介し、真の意味での生活の豊かさについて考える。具体的には、19世紀から今日にいたるまでの、都市・建築から家具・家電など我々の生活空間を構成するに関わる様々なアイテムのデザインや生産システムが、どのように発展・変容してきたかについて、ヨーロッパ及びアメリカ合衆国を中心に概観する。また各時代における代表的な建築・デザイン思想やその背景となる生活の機械化に対する思想や社会的な評価の変遷についても考察を進める。	
		環境人間工学	人間を取り巻く建築環境は、気温、湿度、酸素（二酸化炭素）濃度、光、音、振動といった環境的要因の影響を受ける。人間の体はそういった環境の変化に対し、どのように適応しているかといった生理的応答を中心に、人間と環境との関係について講義し、それらを理解する。また様々な環境下における呼気ガス中の酸素濃度（酸素摂取量）の測定演習などから、人体の適応のメカニズムを科学的に捉え、人間の健康を保つ環境の重要性について学び、総合的に理解する。	講義 20 時間 演習 10 時間
		アーバンデザイン 演習	都市空間はさまざまな建築物や広場、街路などが有機的に結びついて構成されている。それらの有機的な関連を成立させるものは人間の空間認識であり、人間の活動である。それぞれに機能をもった建築相互の関係、広場空間がもつ意味性、人の動線や景観などをミクロとマクロの視点で観察、分析し、自ら問題を抽出しそれらの解答をデザインする能力を養うことを目標とする。住宅、美術館、コミュニティ施設などの個々の建築の機能を把握した上で、それらの複合施設や複数の建築を一つの区域内に関連性をもたせて機能的に配置する設計を行う。 (1 奥山 健二) 20世紀の世界の新都市（ブラジリア、シャンディガール、キャンベラ、デファンス等）を事例として、デザイン的に解析し、それらの再構成を指導する。 (16 近藤 桂司) 主として人間側からのアプローチで都市空間のデザインを指導するとともに、図面化、模型化、プレゼンテーションなどの指導を行う。	共同で担当

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		まちづくり計画実践演習	(概要) 都市計画では行政主体の都市整備の領域のみならず、身近な「まちづくり」も重要な領域である。本演習では身近な特定のテーマを設定して、グループでフィールドワーク等を実施することで都市計画的思考の実際を学ぶ。演習に当たっては、実験テーマに関する予備的な講義を行い、その上で、学生自らが演習の目標を設定し、演習計画を立てる。結果はグループごとにまとめ、プレゼンテーション・ディスカッションを行い、多様なまちづくりの解の存在を理解する。 (オムニバス方式／全15回) (15 岡辺 重雄／8回) ・都市のバリアフリーに関する実査 (4回) ・都市公園のデザインワークショップ(4回) (16 近藤 桂司／5回) ・まちなみ景観改善計画づくり (5回) 良好な景観形成とはどのようなものか、またその実現のためにはどのような課題の解決が必要なのか。価値観の多様な人々が居住する都市の景観形成を実践的に学ぶ。 (岡辺、近藤共同／2回) ガイダンスおよびプレゼンテーションは2人で実施する。	オムニバス方式
		まちづくり協働実践演習	(概要) 都市計画・都市開発とまちづくりとの相違や相互関係について、歴史的経緯や社会的背景を踏まえた的確な理解を得ることをめざす。また、都市の環境や機能に対する住民ニーズ、市民ニーズの顕在化や、自ら問題解決に取り組むプロセスと協働の実態を体験的に学習する事例体験や模擬的な活動の場を設定するなど、住民活動を支援、誘導するための幅広いコミュニケーション能力の育成や、ワークショップ運営手法の習得などをめざす。 (19 笠木 弘二) 概論の講義、学内・学外活動の全体進行、管理 (11 西川 龍也) 概論の講義、学内・学外活動の企画、グループ指導 ※ガイダンス、講評、総括等は共同実施	共同で担当
	経済・経営	行政学	講義の目的は、地方自治に関する用語を理解し、地方自治に関係する事例を知ることである。地方政府、条例、住民参加、大都市制度、市町村合併、地方財政、第三セクターなどをテーマとして、重要な用語を説明し、その用語に関係する事例を紹介する。地方自治体による行政は、住民の日々の生活にかかわりを持っている。このことを確認しながら、地方自治体がどのような問題に直面しており、問題にどのように取り組んでいるかを理解する。	
		地方財政論	この講義は、以下に示す順序で、地方自治体の財政を構成している基本的仕組みについて理解し、さらに地方分権と地方自治制度改革のなかで変貌しつつある日本の地方財政の課題を、欧米諸国との比較を通して、学ぶことを目標とする。(1) 国際的に見ると日本の地方財政の特徴、(2) 地方自治と予算制度、(3) 地域共同需要と経費、(4) 地方税と課税自治権、(5) 政府間財政関係、(5) 地方公営企業、第3セクターの財政、(6) 公共事業改革と財政、(7) 地域福祉と財政、(8) 分権社会の自治体財政のあり方。	
		金融システム論	本講義の目的は、わが国の金融システムおよび最近の金融システム改革について理解することである。まず、わが国の金融システムについて、金融ビッグバンなど最近までの金融システム改革について説明し、次に資金循環と金融構造から、わが国の金融システムの特徴について取り上げ、続いてわが国の金融機関、決済システム、新しい金融取引、さらに最近関心が高まっている金融システム安定化の方策、広い意味での金融規制について、その内容やあり方について講義する。	
		経営管理論	経営管理は、経営の合理性を追求するために誕生した体系的な学問である。本講義では、経営管理を構成する6つのカテゴリ、つまり人的資源管理、生産管理、財務管理、戦略管理、情報管理、マーケティングなど管理の諸側面における基礎理論概念を理解することを目的とする。各カテゴリの通説を学習することにより、経営管理の全体像を把握するとともに、学生はそれぞれ興味をもったカテゴリへの理解を一層深めることを目標とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		マーケティング論	マーケティング論は、1. 製品計画、2. 価格計画、3. プロモーション計画、4. チャネル計画の4Pから構成されている。この4Pをアサヒビールの経営戦略と絡ませて講義する。1980年頃には夕日ビールと揶揄されていたアサヒビールがいかなるマーケティング戦略を駆使しながら如何にしてキリンビールを席捲していったのかを講義しながら、マーケティング・ミックスを理解させる講義を行う。同時に、講義の最後でチャネル計画の発展形態であるSCM論への橋渡しをする講義を行う。	
		起業論	ベンチャー企業はあらゆる企業の雛形であるゆえに、小さいながらも企業としての機能と役割をすべて備えている。ベンチャー企業に対する理解を深めることは企業経営の全体像を把握することに等しい。その理解のもとで、起業における特有な問題、計画立案や資本政策の内容などを解説していく。本講義は、起業を目指す人々ないし起業活動に関心を持つ学生が、起業に際して知っておくべき基礎的な知識を習得することを目的とする。	
		経営分析	本講義は、企業経営のクオリティを見極める基本的な手法として、個別企業の財務諸表を対象にした経営分析の基礎的な手法を収益性分析、生産性分析及び財務安全性分析の枠組で学習する。また講義では、実際の企業の財務諸表を資料として読み、総資本経常利益率や流動比率等を算出する練習問題を解くことによって、基礎的な経営分析の手法の理解と応用力を深めることを目指す。	
		生活構造論	本講義は生活経済学、生活経営学、社会政策学などの多様な研究蓄積を踏まえ、日本における生活構造がどのように変化し、現在に至っているのかを検討する。特に高度経済成長期から現在の少子高齢社会に焦点をあわせ、(1) 世帯・家族構成、(2) 労働様式、(3) 生活時間、(4) 家計実態の4点を生活構造の要素とし、各要素について統計資料などを使用することで詳細に把握する。現在の生活構造の理解を深めた後に、生活構造上の問題点を見つけたし、その解決のために何が必要であるかを考える。	
		福祉開発論	福祉開発とは、一人ひとりが価値ある生き方を選択し、また、共同的な生活能力を開花させ、様々な関係を構築（変容）させながら自他の福祉を向上させることであり、さらに、そうした行為主体が成立しうような地域社会の形成やそうした方向へと促す政策対応のことである。本科目では、福祉開発の概念や福祉開発を射程に入れた地域づくり（支え合いづくりや元気づくり）のあり方に加えて、それを展開していく上での支援ワーク（ワーカー）のあり方（スキルとココロ）、そして、その地域実践のあり方について講義を進めていく。	
		異文化経営論	本講義の目的は、国際ビジネスの遂行において、文化の理論と洞察がいかにプラスの影響を与えていくかを学ぶことにある。ものの見方、考え方、価値観が異なると、安易にコンフリクト（衝突・対立）を起こしてしまうことになりかねない。企業のグローバル化に伴う異文化相互理解の養成と、世界的展望を持つ人間観の確立をねらいとしている。授業では、異文化マネジメントにおける代表的な理論、組織における人間行動の国際的次元の研究をみながら、国際ビジネスと文化の関わりをみていく。	
		環境経営学	21世紀の最大の課題は「環境と経済の両立」であり、これを実現するための経済システムの構築が求められている。この中心的な存在が「企業」であり、企業において環境と経済の両立を目指す「環境経営」の重要性が高まっている。そこで本講義では、「環境経営」の歴史的変遷、基本的概念を整理し、その後、事例から企業の実態を把握する。その際に、経営学だけに止まらず、経済学、社会学、政策論等の枠組みも援用し、実態に即した「環境経営」を考察する。	
		環境保全論	環境問題は、地域規模であろうと地球規模であろうと、必ず人間社会が関係しており、人間社会が「環境保全」を二の次にし、「人間活動」を優先させてきた結果、生じたものである。そこで21世紀では、「人間活動」を優先させ、環境問題を引き起こしてきた人間社会から「自然環境との共生」を実現した人間社会への転換が急務な課題となっている。本講義では、人間社会と自然環境との係わりに焦点を当て、「自然環境との共生」を実現する人間社会の構築に関して考察を行う。最終的には、「人間社会」と「自然環境」に係わる諸問題を発見し、「環境保全」の観点から人間社会を考える知識を習得する。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
			地域産業論	地域の中小企業の活力に焦点を当てた講義をおこなう。機振法や機電法等の法体系から説きおこし、その延長線上で国の重点施策として展開されている中小企業地域資源活性化法や農商工連携関係法及び新連携関係法のもとの広島県の産業支援施策を分析する。特に福山市にはオンリーワン企業が多く存在するので、これらの企業の経営者を講師に招く。また、中部経済産業局管内の5県（愛知・岐阜・三重・富山・石川）の産業政策と中国地域の産業政策とを比較することで両地域の特性の差異を講義する。	
			産業創生実践演習	(概要) 地域がサステイナブルであるためには、その地域を支える産業や企業が常に自己変革し、第二次・第三次創業を目指さなければならない。福山市を初めとする備後地方には、第二次創業を果たし、オンリーワン・ナンバーワンとなり、地域経済を支える多くの企業が存在する。それらの企業のケーススタディを通して、その戦略・変容を理解し、第三次創業へ向けての提言がなせるようにする。そのために、ヒアリングを行うとともに、それに基づくディスカッションを重ねる。 (4 渡邊 明) 本演習全体の企画・運営について調整するとともに企業の第二次・第三次創業の理論的な枠組みの構築について統括する。 (7 藤井 輝明) 企業の第二次創業に関する実態調査やヒアリング調査の実施を統括する。 (20 銭 峰) 調査結果の取りまとめ、それに基づく報告・ディスカッションの実施を統括する。	共同で担当
	共生・開発		市民自治論	「市民自治」は21世紀までの各種社会思想の結晶的コンセプトであるが、本講義では①市民自治に関わる理論、②市民自治の展開、そして③市民自治に呼応する自治体（政府）の姿と可能性、という三点から21世紀における「市民自治」のありようを学ぶ。理論とともに、とりわけ、世界の事例より市民自治が展開する類型と条件、また市民自治に呼応して自治体の変革をどのようにすすめるかにかかわる基本的視点と方法論を身につけることを目標とする。	
			都市情報論	情報化社会は、情報処理技術の発展から社会全体のコミュニケーションの変容への移行段階にある。本講義では、この現状を都市自治体の情報化の進展と今後の展望の中で明示することを到達目標とする。自治体の業務内容は、本質的には情報処理であり、情報機器の装備はおおきなメリットをもたらす。しかしながら、都市自治体の情報機器装備は、自治体間で大きな格差があり、さまざまな進展要因が提出されてきた。これについて工業化が進んだ人口流入地域の自治体において高水準であることを統計的に示し、業務圧力を起因とした情報機器導入、公共組織の情報化について議論する。	
			異文化コミュニケーション論	異文化コミュニケーション理論の基礎的な知識と、現代日本社会と関連させた上での異文化コミュニケーションの意義について講義する。具体的には、社会学の一潮流をなすシンボリック相互行為論の観点から、文化とコミュニケーション、異文化理解と異文化コミュニケーション、文化接触と文化混交の基本的な理論を扱う。また、現代日本社会のコミュニケーション問題に触れつつ、異文化・異民族コミュニケーションの諸実践について紹介する。本講義は、現代日本社会に生きる人びとが異文化の他者とコミュニケーションする上での基礎的な知識の習得を目的としている。	
			環境地理学	本講義では、日本国内に展開する自然環境の特性を、地理学的な視点から整理して学習する。講義の前半では、プレートテクトニクス理論から日本列島の成り立ちと地震・火山活動のしくみを学び、活断層・火山がつくる地形について理解する。後半では、気候変動によって生じた自然環境、特に地形や植生の変化を学ぶ。最後に具体的な事例紹介を通じて、瀬戸内海沿岸地域の自然が地質や気候変動、そして人間活動の影響を受けて成立していることを理解する。	
			地域文化史	考古学という学問は、発掘調査すなわちフィールドワークなくしては成立しない。発掘調査によって、地下に埋蔵された過去の人間の行為を遺構・遺物の両面から明らかにする。したがって発掘調査の結果、その地域の歴史をただちに物語るのが考古学の大きな特徴だといえよう。本講義では、最新の研究動向について留意しながら地域の「古墳」を取り上げ、古墳時代の全体像を明らかにするとともに、地域の歴史的性格に関する基礎的な知識を得ることを目標とする。	

科目 区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
			地域産業史	日本古来の製鉄法の一つに砂鉄を原料にし、木炭を燃料とした「砂鉄製錬法」がある。中国山地一帯では、砂鉄製錬法が盛んに行われていたことが、文献史料や発掘調査から明らかにされており、特に江戸時代後半から明治時代にかけては、全国の鉄生産量の90パーセントを占めるほどであった。本講義では、わが国の近代産業の発展に大きな役割を果たした中国地方の製鉄の歴史とその展開について、考古学的な調査と研究を中心に進め、さらに文献史料や絵画資料など様々な角度から理解を深めることを目標とする。	
			国際協力論	日本の国際協力の様々なプロジェクトを通じて、援助マネジメントや援助手法はどのようなものかを理解すると共に、プロジェクトには、貧困社会の状況、資金、分野の技術、人材の投入、インフラの状況、環境やジェンダーそのほかの基本的な配慮事項があり、実際にどのように配慮していくのかを考える。さらには、国際標準的な世界銀行やアジア開発銀行のプロジェクトにも言及し、国際社会が目指す開発協力の理解をはかる。	
			国際開発論	経済社会の開発、発展に関する理論的な枠組みを学び、基礎的な知識を身につけることを目指す。世界には10億人以上の貧しい人々がいると推計されている。その貧しさはどのようなものなのか、どうして貧困や格差が生じるのか、どのようにそれらを克服すべきかを考えるのが具体的なテーマである。経済学における国際開発論からのアプローチを主に取るものの、社会・文化的視点も取り入れる。人間や社会にとって「開発とは何か」という問題意識を原点にしつつ、グローバルな次元での持続的開発について考察する。	
			国際援助政策	日本の政府開発援助について理解を深める。そのためには、とくに9・11後のアメリカの援助と対比し、また、先進各国の国際援助にも触れるが、これらを通じて開発援助が人道的な面だけでなく安全保障や対外政策的な面をあわせ持つことを理解する。さらに、近年では世界の経済危機により欧米の不況が長期化する様子を呈しているが、これにともない各国の援助政策の見直しが求められることに疑いはない。こうしたなかで求められる日本の援助とは何かを考えたい。	
			アメリカ文化論	音楽や映画やファッションのみならず、アメリカ合衆国の文化生産物はおびただしく日本に流通している。合衆国は日本人にとって、もっとも親しみを覚える外国のひとつであるが、一方では、反アメリカ的感情や言論も、またおびただしく日本にある。本講義では、日本人が知っているつもりで知らないアメリカ合衆国の文化を理解するために、「銃問題」と「清貧という美德の不在」と「結社」と「差別と多文化主義」の四つの様相から考察する。同時に、日本人のアメリカ合衆国に対する理解の程度と姿勢を検討し、アメリカ文化から日本人が学べることを確認する。	
			中国社会文化論	2008年の北京五輪や2010年の上海万博を契機に、政治経済だけでなく文化的にもさらに発展している中国。その一方で「反日運動」や「餃子中毒事件」などマスメディアをにぎわしていたことも記憶に新しい。中国は地理的にも広大で、多くの少数民族を有し、言語や宗教などから見ても中国の社会や文化は一面的にとらえられない。本講義では、中国への全体的な理解を深めることを目指し、さまざまな具体例を紹介しながら、中国の文化や社会に関する状況や問題を多面的に考察していきたい。	
			インド社会論	中国や東南アジア諸国のイメージが情報や交流の増大に伴い鮮明になっているのに対し、同じアジア地域でありながら、インドおよび、周辺南アジア諸国への理解は進んでいない。このため地域研究の一つのケーススタディーとして、インドを集中的に分析する。授業では、歴史、文化、経済、政治、社会など、広範な側面からインドの過去と現代を理解することに勉める。民族的にも多様な国家は、多文化主義の一つのモデルともなりうる。このほか世界の安全保障上無視できないアフガニスタン、パキスタンなどについても考察する。	
			ラテンアメリカ社会論	多様な民族が住み、さまざまな言葉が日々の生活のなかで交わされるラテンアメリカ。言うまでもなく、いろいろな文化の衝突や融合、社会的な矛盾とその解決へ向けた取り組みが、メキシコから中米地峡を抜けて南米大陸さらにカリブ海に浮かぶ島々までおよぶ、この広い空間に生じている。それらの文化的・社会的な問題は、いったいどのようなものであり、それらはなぜ起きたのか。この講義では、具体的な事例の紹介をとおして多文化状況の考察を深め、「ラテンアメリカを旅し、多文化社会の現実に触れる」ことを目指したい。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		ヨーロッパ社会論	かつて世界の波頭に立ったヨーロッパは、成熟とともに停滞した社会となった。しかし欧州連合（EU）の目標は、近代世界の政治的・経済的構造を規定した国民国家の枠組みをこえた、多元的共生を実現するヨーロッパ社会の再生にあり、ヨーロッパは、人類の未来をみすえた新たな社会開発の実験にのりだしている。この挑戦を可能としたのはヨーロッパ社会のもつ多様性と統一性である。こうしたヨーロッパ社会の特徴を、歴史的観点のもとに、国境をこえたさまざまなネットワークのあり方を学ぶことで、理解する。そのさい大国中心ではなく、イタリアなど周辺部から照明をあてることで、多文化社会ヨーロッパの特質と統合原理とを明らかにする。	
		都市社会実践演習	（概要） 21世紀型の新たな「持続可能社会型開発」（sustainable development）とはどのようなものとしてあるべきかについて、身近なかつ全国的な、景観－開発を題材に実践的に調査し、学ぶ。具体的には、第一に古代から中・近世、そして現代までの関係する地域社会史、第二に持続可能社会型開発についての理論を捉え、その上で第三に、人口減少化にあつて歴史的景観的資源と観光インフラの構築について実地調査をおこなうことを通じて、「持続可能社会型開発」を実践的に学ぶ。 （オムニバス方式／全15回） （12 前山 総一郎／5回） 授業実施総括 及び 担当論文指導等担当責任者として、10授業数を担当する（第4～6回、第7～10回、第11～12回、第15回） （22 八幡 浩二／5回） 現地調査担当責任者 及び パワーポイント指導責任者として、10授業数を担当する。（第1～3回、第7～10回、第13～14回、第15回） （前山、八幡共同／5回） 現地調査および提出論文講評等の主要な授業時には両教官が共同形式で教授指導をおこなう。	オムニバス方式
	実習科目	企業・行政実習	実社会における知識・技術に触れながら、大学での学習内容を定着・深化させるとともに、学習・研究への動機付けを強めることを目的とする。さらに自己の職業適性を見極め、将来の進路選択といったキャリアデザインについて考えると同時に、コミュニケーション能力や課題発見力など組織に求められる資質の素養を養うため、企業、行政機関等において就業体験を行なう。	
		環境開発実習	広大な面積と寡少人口の米国アラスカ州は、自然環境が良い状態で残されている。中心都市フェアバンクス市にあるアラスカ大学フェアバンクス校で多面的な学習を行う。学習テーマとしては、英語についての集中的な授業、寒冷圏固有の自然環境についての総合的な授業、地域に定住する民族の歴史と文化の授業を行う。これら現地での授業にあたっては、アラスカ大学の協力を仰ぎ、必要とされる大学間協定を締結する。 （3 福田 正己） アラスカの自然環境を構成する地圏の諸特性について、講義と巡検で総合的に紹介する。連携先大学の全面的な協力を得る。 （21 澤田 結基） アラスカの先住の人々の歴史と文化について、講義と巡検で総合的に紹介する。	共同で担当
	専門演習	専門演習 I	（概要） 担当教員の指導のもとにテーマを立て、テーマに関連した文献の講読、関連資料の収集・分析、グループ討議を通して、専門的課題への理解を深める。また、観察・調査・実験・フィールドワーク等を通して、研究テーマの探究手法と方法論の習得をめざす。さらに、問題に対する多様な議論の存在を認識し、複合的な視点から課題の本質を捉えて、それらを整理・分析し、組み立てて表現する力を育成する。 （1 奥山 健二） 卒業研究のテーマを個々に決めさせ、それに対する専門分野の参考文献の調査を指導し、またそれらの資料の整理と分析の方法を指導する。論文の章立ての模擬版を作成させ、論文の結論への道筋を立てさせる。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		専門演習Ⅰ (2 横田 茂) 主として欧米と日本の都市政策および都市経営に関する最も新しい実践を紹介した基本文献を輪読し、ディスカッションと福山市に関するフィールドワークを通じて、演習参加者の問題意識を深め、研究テーマの設定に向かう。 (3 福田 正己) 地球温暖化などの課題について、学生自らが選んだ文献について多面的な視点での要約とプレゼンテーションを指導する。 (4 渡邊 明) 最先端の企業間ネットワーク論を学生と議論する。そこでテキストは『ユビキタス時代の産業と企業』を共通読書として、企業の経営実態の研究を行う。例えば、モバオクやモバゲーで有名なDeNA、検索連動型広告を発明したGoogle、主婦の買い物行動を変えたといわれるCOOK PAD等を手分けして研究・分析する。 (5 米田 博) 開発援助や地域研究を中心とする国際関係を取り上げる。可能な限り政策論にも踏み込む。 (6 堀田 誠三) 都市経営につき政策的観点から接近するばあいには、経済循環の概念が不可欠である。その概念を理解するために、経済学の古典の輪読とその研究文献の報告という手法で研究指導をおこなう。 (7 藤井 輝明) 地域経済に関する基本文献の輪読を行う。それを通じて地域経済のさまざまな視点、分析方法などの基礎を学習する。また、それを福山に応用し、グループワークと個別調査で基礎的なトレーニングを行う。 (8 川西 和夫) 「人間と開発（発展）」を基本的テーマとして、国際開発論を軸に内外の関係主要文献を読み込む。同時に、新聞、テレビ、インターネットなどのメディアを通じて、関連トピックを抽出する作業も行い、演習参加者個々の関心の所在を明確にさせる。 (9 藤森 かよ子) アメリカ合衆国の自由主義について学ぶ。担当教員が準備する文献教材を読解し、それらに関する各受講生の演習時での報告を通して、「自由」という概念の生成と発展について考察する。 (10 堤 行彦) 上水道、下水道における水処理（特に、物理化学処理）に関するテーマを文献や関連資料から幅広く取り上げて、水循環の全体システムの中でそれをどう取り扱うかについて議論し、広い視野での分析・評価の必要性について指導する。 (11 西川 龍也) 都市空間あるいはそれを構成する建築物などを対象とする、文献や図面等の関連資料を取り上げ、研究を進めて行くために必要となる分析・考察手法を学んで行く。 (12 前山 総一郎) 都市社会研究、市民自治研究に関してアップデートなテーマを選び、ゼミナール形式でインテンシブな討議と立論構成鍛錬にむけて、研究指導をおこなう。 (14 高村 義晴) 人口減少・高齢化、都市の縮退現象等は、都市交通政策にも大きな影響を及ぼすが、その課題を取り上げ、その対応策と展望等に関する研究指導を行う。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	専門演習Ⅰ	(15 岡辺 重雄) 都市計画法（関連法を含む）および運用指針を理解し、福山市等での計画事例を取り上げ、都市計画実践の実際を構造的に理解するとともに、今日的な専門文献等を輪読する中で、都市計画のあり方について、自分なりの視座を得る。 (16 近藤 桂司) 街路景観における地域特性とそれを伸長させる方策について、具体的事例を比較考察しながら景観形成の方法とプロセスを演習する。 (17 原田 裕治) 制度経済学の基礎を習得する一方で、現代経済の問題一つを選択し、グループごとに異なる立場の議論を整理し発表してもらう。 (19 笠木 弘二) 土地利用、交通、都市施設の計画、及びまちづくり活動に関する、企画、構想段階の課題発見法、発想法、取り組み姿勢、取り組み手法について学習、習熟をめざすと共に、その間に求められる多様な合意形成やプレゼンテーション等の取り組みについても実践的な学習、習熟をめざす。 (20 銭 峰) ローカライゼーションの問題を取り上げ、グローバル化しつつある今日の環境の下で、ローカル経営の諸問題に関する指導を行う。 (21 澤田 結基) 日帰りまたは数日の実習を行い、野外観察や気象観測によるデータを取得して、地形、気象、植生などの環境地理学的現象を把握する。 (22 八幡 浩二) 考古・文献・民俗・歴史地理など史資料を駆使しながら、多面的に歴史を論じていく視野と姿勢を身につけるよう研究指導を行う。 (23 羽田 裕) 環境問題への解決を図る上で必要な環境経営学、環境経済学の分析ツールを理解し、正確に使いこなせるよう研究指導を行う。 (24 山口 健一) 共生や異文化コミュニケーションに関する諸文献をとりあげ、演習参加者がプレゼンテーションを行い、議論する。特にプレゼンテーション能力とディスカッション能力を重点的に指導する。	
	専門演習Ⅱ	(概要) 専門演習Ⅰに引き続き、担当教員の指導のもとにテーマを立て、テーマに関連した文献の講読、関連資料の収集・分析、グループ討議を通して、専門的課題への理解を深めるとともに新たに取り組むべき課題への認識を深める。観察・調査・実験・フィールドワーク等を通して、テーマへの総合的な探究力を高め、学生ごとの課題意識や問題意識を醸成しながら、4年次における卒業研究に繋げて行く。 (1 奥山 健二) 都市問題に関する現代の取り組み方の事例を取り上げ、それら個々の事例の解決策に関する解説を行い、各自の卒論テーマに沿った論及への指導を行う。 (2 横田 茂) 演習参加者の設定した各自の研究テーマについて、基本文献の収集・学習指導を行うとともに、福山市の関連統計を用いた研究発表を通じて、資料分析と論文構成の方法を学ばせる。 (3 福田 正己) 論文作成に関わる問題設定と解析、その展開の方法について、各テーマ毎に具体的に指導する。 (4 渡邊 明) マーケティングの最先端技法であるSCM（サプライチェーン・マネジメント）・DCM（デマンドチェーン・マネジメント）についての理論の著作を輪読する。これらの輪読を通じて企業のロジスティクス戦略の実際を指導していく。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	専門演習Ⅱ	(5 米田 博) 開発援助や地域研究を中心とする国際関係を取り上げる。可能な限り政策論にも踏み込む。 (6 堀田 誠三) 専門演習Ⅰを基礎に、卒業研究のテーマ設定にむけた指導を行う。分野としては、①経済思想の古典研究、②イタリアを中心としたヨーロッパ都市の類型学、である。 (7 藤井 輝明) 専門演習Ⅰでのトレーニングをもとに、各自いずれかの都市・地域を取り上げさせ、その地域経済の背景・構造・特徴・課題などを調査・分析させ、相互にディスカッションすることにより、研究の視点を養うよう指導する。 (8 川西 和夫) 専門演習Ⅰで行った「人間と開発（発展）」という基本的テーマに沿った作業を続行するなかで、発表・討議を強化していく。それによって個々のテーマに関する一般的な関心を学問のなかでどのように位置づけていくか、方針を絞っていけるよう指導する。 (9 藤森 かよ子) 専門演習Ⅰで把握した「自由」という概念が、建国の理念となった啓蒙思想、奴隷解放運動、南北戦争、公民権運動、フェミニズム運動、多文化主義運動などの歴史的出来事との関連で、どう理解されたのか概観する。 (10 堤 行彦) 幅広い視点からの分析・評価能力をベースに、学生が水環境や水処理分野における自分の考えや意見を論理的に組み立てる能力を議論を深めることでさらに養い、都市の水に関する卒業研究テーマの立案へと結び付けていく。 (11 西川 龍也) 専門演習Ⅰを基礎に学習・議論を進めるとともに、必要に応じて現地調査やCG作成等の研究手法についても学んで行く。 (12 前山 総一郎) 都市社会研究、市民自治研究に関してアップデートなテーマを選び、ゼミナール形式でインテンシブな討議と立論構成鍛錬にむけて、研究指導をおこなう。 (14 高村 義晴) 都市再生や地域活性化が喫緊の課題となるなか、都市の持続的な発展を牽引あるいは支える都市基盤施設の論点を取り上げ、その対応の方向性や工夫措置等に関する研究指導を行う。 (15 岡辺 重雄) 都市計画総論についての専門演習Ⅰでの理解に加え、個別の事業制度を取り上げる。たとえば総合的な都市活性化の仕組みである「まちづくり交付金」もしくは「中心市街地活性化計画」などである。後半は、各事業の効果について独自の視点で考察し、実証する。 (16 近藤 桂司) 多様な人々が利用する街路・広場空間を対象に、具体的事例を比較考察しながら都市空間デザインの方法とプロセスを演習する。 (17 原田 裕治) 専門演習Ⅰで設定されたテーマについて、各グループから出された種々の議論を互いに検討し、とりまとめることを目標とする。 (19 笠木 弘二) 公的な都市計画、民間による都市開発計画など各種ケースに応じた計画立案、デザイン展開、事業計画の作成等のステップに関わる実践的な学習を実施し、さらにより総合性を重視する計画や、専門的具体的課題を解決するブレークスルー型計画などについての体験学習等を通じて、必要なスキルの習熟をめざし、卒業研究への基礎とする。 (20 銭 峰) 地域活性化ないし再生におけるベンチャー企業の役割を取り上げ、起業アイデアを実際の起業活動に結実させる方法に関する指導を行う。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	専門演習Ⅱ	(21 澤田 結基) 専門演習Ⅰで取得したデータを整理・分析し、空間分布や経時変化を表現した図を含む論文が作成できるよう指導する。 (22 八幡 浩二) 地域に所在する博物館や史跡名勝、伝統行事、遺跡踏査などフィールドワークを通じ、調査・研究の方法や技術の習得の指導を行う。 (23 羽田 裕) 専門演習Ⅰで習得した分析ツールを用いて、各企業の環境への取り組みを分析するケーススタディ研究に関する指導を行う。 (24 山口 健一) 福山市における共生ないし異文化コミュニケーションの諸実践を取り上げ、議論したあとフィールドワークを行う。それらにより問題発見能力とコミュニケーション能力を育成し、問題意識の深化を図る。	
卒業研究	卒業研究	(概要) 学生各自が研究テーマを設定し、指導教員の助言・指導のもとに研究テーマについての研究を進める。文献検索、データ分析、論理整理等の指導を行うとともに、指導教員との議論や学生相互の議論を通して考察を深める。1年間を通じて卒業論文の執筆に取り組むが、論文の執筆に当たっては、論文の全体構成を立案するとともに、本文・資料の構成を検討し、論文執筆の基本を学習しながら論文執筆を進めていく。適宜、中間発表会で進捗状況を報告するとともに、最終結果は「卒業論文」にまとめ、2・3年次生も交えた卒業研究発表会で発表する。 (1 奥山 健二) 各自の設定した卒業研究テーマの進め方を指導し、進捗状況の確認をする。また各段階における纏め方、発表し方の個別指導を行い、ゼミにおける後輩に発表させ、質疑応答を行う。 (2 横田 茂) 都市政策と都市経営に関する演習参加者の研究テーマに即して、資料・文献の解析、実態調査の指導を行い、数回の中間発表を通じて論文の完成に向かう。研究テーマの設定においては演習参加者の自主性を尊重しつつ、特定の都市や都市政策の特定の領域に関する研究が行われることに留意したい。 (3 福田 正己) 地球温暖化をテーマとし、それが身のまわりの環境へどのような影響を与えるかを中心に論文作成を指導する。 (4 渡邊 明) 地場の中小企業の実態分析や、例えば、トヨタの下請け会社のプロジェクト・マネジメントの研究をおこなう。卒論は適宜、ゼミの学生の前で発表してもらおう。できればSKYPEやポリコム等を利用して他大学のゼミとインターネットで連携した教育・研究をおこなう。 (5 米田 博) 現代の開発援助や地域研究を中心に指導をするにしても、より長期的な流れ（歴史）のなかで考察することをめざす。 (6 堀田 誠三) 卒業研究の分野は、①経済思想の古典研究、②イタリアを中心とした都市の類型学、である。いずれの場合も一国単位にとどまらないヨーロッパ的視野からの研究指導を行う。 (7 藤井 輝明) 都市あるいは地域が持続可能な発展を遂げるためには、その経済構造がキーポイントであり、地場産業・企業の多様性と集積効果が必要であるが、地域経済の持続可能性に関して提言できるように研究指導する。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	卒業研究	(8 川西 和夫) 論文作成の手法を一通り学んだうえで、先行研究の整理を皮切りに論文執筆に着手する。授業内での発表・討議を重ねて、論文完成に達するよう指導する。インタビュー技法や海外研究などについても個々の計画に応じて指導する。 (9 藤森 かよ子) 専門演習IとIIで学んだことを土台にして、受講生は、アメリカ文化研究に関するテーマを選び、卒業論文を作成する。アメリカに特化せずに比較文化論的なテーマも選択できる。 (10 堤 行彦) 上水道や下水道の水処理に関するテーマを取り上げ、目的、達成目標を明確にし、そのアプローチの方法とそのロードマップを作成させる。その研究ロードマップに沿って進捗状況の確認と卒業研究論文作成、発表の指導を学生との議論を通じて行う。 (11 西川 龍也) 市街地空間あるいはそれを構成する建築物などの生活空間を対象に研究テーマを選定させ、卒業研究の完成に向けて、文献資料収集、現地調査、データ分析、復元的考察など必要となる調査・研究に取り組むとともに、相互で発表・議論を重ねるよう指導する。 (12 前山 総一郎) 都市社会研究、市民自治研究に関するテーマにつき、各人のテーマを設定し、それにむけての現地調査・方法論指導など、研究指導をおこなう。 (14 高村 義晴) 今後のわが国経済社会の潮流の変化として情報化を取り上げ、都市基盤施設に及ぼす影響と、それを活かした都市基盤施設の対応の方向性に関する研究指導を行う。 (15 岡辺 重雄) 都市計画制度一般ならびにまちづくり交付金等の事業制度、住宅政策、都市建築関連法制等の分野における研究指導を行う。 (16 近藤 桂司) 都市空間を構成する諸要素（ストリートファニチャーなど）や景観と人、時間との関連を対象とした研究指導を行う。 (17 原田 裕治) 学生には経済学に関わるテーマを選択してもらい、受講者全員が各人の問題意識を共有し、議論を高め合う関係の構築を重視する。 (19 笠木 弘二) 自ら設定した具体的な都市、または地域・地区に即した「現況把握」から、「課題抽出」「テーマ設定」「企画または構想」「計画・デザイン」「事業化」という一連のプロセスを視野に置いた計画づくりを体験させ、『一貫性、総合性のある計画書（または提案書）作成』（＝論文）を目標において指導する。 (20 銭 峰) 都市社会の持続可能な発展というテーマを取り上げ、地場産業の再生、家業のさらなる拡大、産業集積度の向上などに関する研究指導を行う。 (21 澤田 結基) フィールドワークによって地形・気象などの環境地理データを取得し、その記載事実や分析に基づいて論文を作成するよう指導する。 (22 八幡 浩二) 各自の問題関心に基きテーマを設定し、先行研究から問題点や課題を明らかにし、現地踏査、史資料の調査を実施する。その成果を踏まえ、整理・分析を行い、論文を作成していくよう研究指導や助言を行う。 (23 羽田 裕) 「環境経営」を実現するために現代企業に求められる要因を抽出し、今後の対策が提起できるための研究指導を行う。 (24 山口 健一) 共生や異文化コミュニケーションに関する諸文献あるいは諸実践の中から、研究テーマを選び、卒業論文を作成する。論文完成に向けて特にデータ収集から分析に至る過程を重点的に研究指導する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
自由科目	建築士科目	設計製図Ⅰ	建築設計図面を正しく設計・製図するために必要となる正投影法の基本も含めて、図学の基礎的な知識・技法の修得を目指す。同時に透視図法、軸投影図法、透視図法を用いた立体的表現の基礎についても学習する。さらに、基本的な建築物として戸建て小住宅を設計し、その建築設計図面の作成に取り組む。	
		設計製図Ⅱ	様々な機能を持つ建築物を創りあげるために、これまでに学んだ都市や建築に関する基礎的な専門的な知識を総合化し、ある適度複合的な機能を有する空間として建築物の設計をとりまとめる。同時に、設計した建築物を建築設計図面として適切に作図・表現する作業に取り組む。具体的には、事務所建築及びクラブハウスを設計し、建築設計図面の作成に取り組む。	
		設計製図Ⅲ	豊かでゆとりある建物を創りあげるために、これまでに学んだ都市や建築に関する様々な知識を総合化し、一つの生活空間として建築物の設計をとりまとめる。同時に、設計した建築物を建築設計図面として適切に作図・表現する作業に取り組む。具体的には、保育園及び展示施設を設計し、建築設計図面の作成に取り組む。	
		設計製図Ⅳ	様々な機能を持つ建築物を創りあげるために、これまでに学んだ都市、計画、構造、施工、環境等の専門的な知識を総合化し、ある適度高度機能を有する複合的な空間として建築物の設計をとりまとめる。同時に、設計した建築物を建築設計図面として適切に作図・表現する作業に取り組む。具体的には、コミュニティセンター及び店舗併設集合住宅を設計し、建築設計図面の作成に取り組む。	
		CAD演習Ⅰ	今日の建築設計現場ではコンピュータを用いた設計・製図システム(CAD)の利用が急速に一般化しつつある。ここでは、CADによる建築設計に必要な図面作成の基礎的な知識・技法を学ぶ。具体的には、2次元・3次元総合CADソフトウェアであるVectorWorksを用いて、情報技術にかかわる基礎知識、能力を早期に習得した上で、平面上の情報から空間をイメージし、空間の情報を平面上に表現するために必要なCAD、および図学の基礎を学ぶ。	
		CAD演習Ⅱ	VectorWorksを用いて、建築設計図面から仮想空間、動画を作成し、都市や建築を立体的な空間に再現するために必要な手法を学ぶ。また、RendorWorksを活用して、空間にテクスチャや光沢、陰影を表現する手法を学ぶ。さらにVectorWorksによって作成したCAD図面およびCG画像に加えて、手書きの図面などにも必要に応じて自由自在に組み合わせ、自分自身の建築設計を、美しく、見やすく、分かりやすくプレゼンテーションする能力を身につける。	
		建築一般構造	専門家として建築を設計・施工に取り組むためには、建築の躯体から細部の収まりまで建築の仕組み全体を細部にわたって理解し、建築の全体像を修得する必要がある。ここでは、建物の設計・施工において一般に使用される、木造・鉄筋コンクリート造・鉄骨造に関して、架構方式等の基本的な知識を身につける。併せて、皮膜構造等その他の架構方式や構造と建築造形の関係、地震と耐震構造への試みなどについても学ぶ。	
		建築構造力学	災害や事故に対して安全な建物を設計するためには、建築にどのような外力が働き、それに対して建物がどのように抵抗するかなど構造力学の知識を身につけ、実際の建築物の構造設計に取り組まなければならない。ここでは力学の基本を学びながら建築など構造物に働く力の流れを理解することを目指す。同時に構造の計算手法や実際の構造設計のプロセスについても学習する。	
		建築材料	様々な建築材料の性質と性能を理解し、建物の設計・施工において、建築材料の適切な選択・利用をするために必要となる基礎的な知識・技法を学ぶ。具体的には、建物を支える役目を持つ構造材料についてその基本的な性質と建築構造との関連性について理解する。また、建物の内装や外装を行い、あるいは断熱、耐火等の機能を満たすことで、建物の意匠や機能を決定する役目を持つ仕上げ材についても学習する。建築材料の適切な取り扱いやその施工法等については、事例とともに講義を行い、建築設計の応用につなげてゆく。	

科目 区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		建築設備	快適で健康的な居住環境を実現するために必要となる建築設備に関する基本的な知識を身につける。具体的には、衛生設備、空調設備、電気設備などの基本システムを習得し、照明・衛生器具・空調負荷の設計の基礎を学ぶ。また最新のソーラーシステム等の実例を通じて、環境と共生する建築設備のデザインについても考察する。	
		建築施工	施工技術の習得は、建築生産技術者のみならず、設計や行政等に携わる建築技術者にとっても必須事項である。建築施工の仕組み全体像を習得するため、建築の施工監理全般にわたり基本的な知識を学習する。同時に企画から保全にいたる建築生産プロセス全体の基礎的な事項を学習し、建築生産マネジメントへの認識と公正な判断力を養う。	